
IS インフィニット・ストラトス 2 人目の操縦者

むー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 2人目の操縦者

【Nコード】

N2815V

【作者名】

むー

【あらすじ】

IS学園に転校してきた、世界で2人目のISが動かせる男のお話。
何を考えてるか分からない過去に何かあった主人公がどんな行動をするか。そんなお話。

超 不定期更新です。連続で更新したり、一週間ほど空けたり不定期な更新です。

目指せ面白い二次創作！

1 話目 2 人目の操縦者（前書き）

オリ主の性格がよく分からない話

1 話目 2 人目の操縦者

白く、白く、とても白い部屋。中央には人が乗れる形状の機械が置かれ、傍には黒い髪の子にはなにも移っていないような少年が立っている。

少年は頭に手をやり呟く。

「うん、ダルい」

『はいはい、さっさと触れてみる。シバくよ?』

少年の正面には機械があり、その向こう側には強化ガラスがあり女性が手元にあるキーボードを指で叩いている。

「ヤー」

触らなきゃ鉄拳と耐久プロレスが待っているんだろうな、という恐怖から少年は機械へと手を伸ばす。

それが運命の交差点だったと少年が気づくのはすぐあとだ。

IS

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を

凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

しかし、インフィニット・ストラトスには重大なとても無視することが出来ない欠点があった。それは女性しか扱えないということだった。

この効果はすぐに世界中に染みわたった。女尊男卑が当たり前となり、男性は街を歩くだけで女性に使い走りされるのも当然の風潮になった。

ISが発表され、いままで現役だった兵器は破棄され研究中の武器も計画が破棄。ほとんどの軍人が職を失った。

現在世界に存在するコアの総数は467個。ISの絶対数は少ないが、その圧倒的な性能で各国の軍の予算は殆どがIS開発に回されていた

「あー、まだかー？わたくしそろそろダルくなってまいりましたー」

空港の待合室の椅子に座ると言うよりも寄りかかっていると言った

ほうが正しい座り方をし、片手に紙コップを持った少年が喋る。少年は独特のなにを考えているか分からない雰囲気醸し出していた。待ち合わせた時間はすでに過ぎた。

幸い人は居らず、遠慮なくだらしなくできる。ならば寝てもいいよなど考え、寝転がろうとすると扉が開く音がした。

「すまない、待たせたな。……君が2人目の？」

「はいそうですよー。僕が世界で2人目の男なのにISが動かせる人ですよ。

どーも初めまして、第1回モンド・グロッツ優勝者の織斑千冬さん。今日からよろしくお願いしまーす」

やってきたのは鋭い吊り目にスーツの似合う長身とボディラインが特徴の女性。少年は織斑千冬が入ってきたのにも関わらず、ニコニコと笑いながら椅子を4つ並べてその上に寝転がる。そしてやる気のない挨拶をする。織斑千冬が目尻が引きつる。

「あーこれは失礼。あまりにもダリーんでつい、いつものようにしてしまいました。どうか許してね、てへりんこ」

「……」

口ばかりで起き上がることもしない少年に織斑千冬は言葉がでない。少年は思い出したというように、右手を握り、左手に打ち合わせる。

「そうだ、忘れてた。IS学園に入学してきたんだった。さあ、早く行きましよう。実質女子校なんでしょ？ たのしみだなー女の園！」

「……はあ、厄介な奴が来たものだ。行くぞ、こつちだ」

織斑千冬は頭が痛い人がするように頭に手を当てながら入ってきた扉から出ようとしたとき、後ろから声がかかる。

「そう言えば僕の荷物どこ行っただけ？ あれー？」

「ちゃんと受け取ったのか？」

「おお、受け取ってなかった。ちよつととってきまーす」

つい、うっかりと忘れてた訳ではなく、本当に忘れていたらしく、少年は走りながら荷物を取りに行った。

その様子を見て、織斑千冬はため息をつく。

「はあ、どうせ私のクラスに来るんだろうな。あいつは束と同類のにおいがする。まったく頭が痛い」

時間がかかるだろうと考え、コーヒーでも飲もうと自動販売機へ向かおうとした織斑千冬にむけて放送がはいる。

『IS学園教員の織斑千冬様、生徒のあおさきいろ蒼崎喜色君がお待ちです。直ちに旅券売り場までお越しください。繰り返します。IS学園の…』

「……なにをやらかした」

織斑千冬の困り事の種がまた一つ増える。

IS学園。それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

もちろんIS学園へ入学するにはIS適正値が高く、学力も優秀でなければならぬ。一般の生徒や代表候補生だろうとこれは変わらない。だが、ISを動かすことが出来る男となれば別だ。喜色は大きなテストもなくIS学園への入学が決まっていた。いや、一つだけあった。ISを使った模擬戦で教師と戦ったが快勝。特に難しいこともなかった。

織斑千冬の困り事の種が一つ増えた翌日、織斑千冬と少年、喜色は廊下を歩いていった。

「さて蒼崎、教室に入ったら自己紹介をしてもらうわけだが、あまり馬鹿なことはするなよ？」

喜色は首を傾げ、数秒思考、結論が出て右手を握り、左手に打ち合わせる。

「それは押すなよ、絶対押すなよってことですか。それじゃあ思いっきり馬鹿なことをしよーっと」

コッソ

「そんなものは必要ない」

喜色の頭に落ちる黒い冊子。しかも角だ。力を弱くしてもそれなりに痛い。喜色は頭を押さえ涙目になる。

「あー殴ったー暴力だ。体罰はんたーい」

「蒼崎、IS学園はどの国からも干渉を受けない。つまり治外法権だ。言いたいことはわかるよな？」

「えーと？ とりあえずその痛そうな武器を下ろしてくれないかなあ？」

ゴスン

「ほら、下ろしたぞ」

「ッ!？」

話しながら、叩きながら、叩かれながら2人は廊下を歩く。

「蒼崎、私が先にはいるから呼んだらはいってきて普通の自己紹介をしろ」

織斑千冬は教室の前で喜色に向き直り、出席簿を振りかぶりながら

忠告する。喜色は叩かれないという理由で素直に頷いておく。
頷いた喜色に満足したのか扉を開け、教室にはいる。

――パァンっ

『今日は転校生がきた。共に精進してくれ。蒼崎入ってこい』

教室にはいると大量の視線に喜色は若干硬直するが、すぐに黒板の前にいる織斑千冬の隣に立つ。

「蒼崎、自己紹介をしろ」

「コホン、やーやー初めまして。蒼崎喜色です。第1回モンド・グロツツ優勝者織斑千冬の弟の世界初の男なのにESが動かせる織斑一夏に万が一のことがあった場合の代替品のモルモットとして来ました。仲良くしてね。ここってみんな綺麗だねって言ったほうがいいのかな？」

ゴズン

「お、男お！？」

「やった、2人目の男！！ツイてる！」

「なんか、幼い感じがするよね」

「目がちよつと怖くない？」

「カッコイい部類にはいる……のかな？」

「というか新学年始まって1日目に転校生？」

「誰がそんなことを言えといった？」

ゴスゴス

「私は普通の自己紹介をしるといったはずだが？」

喜色の頭に出席簿が連続で振り下ろされる。その痛さを知っている一夏は顔をひきつらせている。張本人はといえば何で僕は叩かれるの？ といった様子で首を傾げている。

「あ、あのう、織斑先生？ 蒼崎くん、痛そうですし、まだSHRが終わってないです」

喜色に助け船がくる。童顔低身長に大きさが合っていない眼鏡はずり下がっており、なにより特徴的なのがその豊満な胸をもつ山田真耶がオドオドしながら織斑千冬に言う。

「ああ、そうですか。」

蒼崎、お前の席は織斑の隣だ。織斑、同じ男だ案内してやれ」

「え、俺まだよくわかんないんだけど千冬姉……」

ゴン

「織斑先生だ。さあ、早く準備しろ。時間は有限だ」

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

授業中、山田先生は教科書をすらすらと読んで行く。ほとんどの生徒はノートを書いたり、山田先生の話聞いていたりして、話したりする生徒は1人もいない。もつとも、織斑千冬がいるからだ。だが、熱心なクラスにも例外というものが存在する。喜色と一夏だ。一夏は積まれた教科書の一番上のものを見て、焦った様子で辺りを見回す。喜色は電話帳並みの分厚さの参考書のちょうど真ん中のページを開いているが、本人は教科書には視線を一瞬たりともむけていない。

「織斑、蒼崎、さつきからどうした。なにもする様子がないが？」

「あ、いや、これはただ考え事をしていただけで……」

「えーと、PICとか非情報限定共有とかつい最近入学が僕には全然、ちつとも、さっぱりわかんねーんですよ」

織斑千冬は相手から目を逸らさずに見続けるので一夏は畏縮して語尾が小さくなっていく。喜色は一夏とは対照的に開き直り両腕を頭の後ろで組み、心で思っていたことを吐き出す。

「……」

「あ、蒼崎くんは放課後一緒に勉強しましょう！ 先生、頑張りますから！」

織斑くんはなにかわからないところがありますか？」

織斑千冬が出席簿を投げる体制に入ったとき、山田先生が割り込んでくる。一夏は周りを見回し喜色につられるように堂々と質問する。

「ほとんど全部わかりません」

質問ではなかった。喜色も顔が引きつり頭の後ろにまわした腕がほどける。山田先生も顔が引きつる。

「え、えつと……織斑君と蒼崎くん以外で、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」

拳手を促されて手をあげたのは喜色のみ。他は誰も手をあげない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

教室の端にいたはずの織斑千冬の手から出席簿が一直線に一夏の頭に飛び、音をたてる。

「必読と書いてあっただろつが馬鹿者。」

あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい、やります」

一夏にギロリとあたる視線。眼力に恐れて素直に頷く。その横で知ったこっちゃねーやと大あくびをする喜色にその眼力が向けられる。

「蒼崎お前もだ」

「ああ……は？ いやあ、頭の悪い僕にはちよつと無理だねって
言っておこうか」

ゴン！

「私への返事はYESかはいい、もしくは了解だ^ヤ」

「……イエスマム」

ゴン！

喜色の反骨精神はあっさりと粉碎される。

「私の言ったことが聞こえなかったか？ いいか、ISの性能は過去の兵器とは段違いだ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しなくても覚える。そして守れ。いいな」

俺は希望してここにいるわけじゃない。

僕は望んできたわけじゃないんだけどなあ。

一夏と喜色の考えがかぶる。一夏は黒服の男に君を保護すると言われ強制的にIS学園へ入学することになった。喜色も居場所から追

い出されるようにして荷物と僅かな金銭を持たされ、飛行機へ乗せられた。

この2人の考えを織斑千冬は簡単に読んだ。

「貴様ら、『自分は望んでここににいるわけではない』と思っているな？」

2人はなぜバレタと首を竦める。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きていかななくてはならない。それすら放棄するのなら、まず人であることを辞めることだ」

「……」

やるしかない。俺は家族を見捨てない。一夏は言葉に秘められた真意を理解し決意する。

それに対してもう一人は違った。粉碎されたはずの反骨精神が何時の間にか完璧に再生、織斑千冬に噛みつく。

「せんせーいいですか？」

「なんだ？　言ってみろ」

「まず、僕はすでにいろいろと人の部類じゃないんですけど。それに僕、集団の中で暮らしたのはまだ1年しかないんですけどー？　暗に現実見るとか言われても化け物って言われて人として扱われなかったのが現実なんですけどそこんとこどうなんですかー？」

「そうか。それは大変だったな。辛かっただろう、苦しかっただろう。だがな、それがどうした？ 過去を見るな。今を見る。未来を見据える。貴様はなんだ。化け物と呼ばれていた生き物か？ 違う。1年1組1番蒼崎喜色だろう。お前は人間だ、誰がなんと言おうが人間だ。いいな」

「……………」

「山田先生、授業を続けてください」

静まり返った教室で織斑千冬が授業を続けろと促す。

「え、えつと、織斑くん、分からないところは放課後に教えてあげますから頑張つて？ 青崎くんもがんばろうね？ ね？ ねっ？」

山田先生は2人を励まし教壇へ戻る。そして授業が再開し、ノートをとるためにペンを走らせる音がまた響き始める。

喜色と言えば天井を見上げ、体は微動だにしなかったが一つだけ小さく、注視しなければ分からないほど小さく動くところがあった。

「なんだよーいいよなー家族がいて家があつて慰めてくれる人がいて。そんな人になに言われてもなんともおもわないんだけどねー」

相変わらずなにもする様子が無い喜色にまたしても織斑千冬の出席簿が飛んだ。

パンツ

「いたあ!？」

1 話目 2 人目の操縦者（後書き）

ネギまのほうがつまりに詰まってるので息抜きに……

オリ主のISが登場するのは結構後の予定ですが、どのようなものにするかはまだ決まっております。自分の中ではホワイト・グリントにしようかなとは思ってるんですけどね。ちなみに自分、レイヴンです。リンクスではありません。だってPSS3が無いんだもの。頑張りますのでどうか見捨てないで貰えると嬉しいです。誤字脱字、感想待ってます

2 話目 波乱の襲来

授業が終わり休憩時間になった。授業中静かだった教室は話し声でうるさくなる。

が、騒がしい教室の中に静かなのが2人。

「……う、あ」

「……」

一夏は机にうつ伏せになりうめき声をあげる。喜色は椅子にもたれかかり目の瞳孔が開ききっている。2人の共通点といえばどちらも頭が沸騰していることだろう。

「ねえ、主人公？」

「主人公ってのは俺のことか？」

「そうだよ君だよ織斑一夏」

「なんで主人公？」

一夏の疑問にさも当然といったように口をまわす。

「姉は世界大会優勝者。幼なじみの姉は天才開発者。その皮を剥いでやりたくなるようなイケメンフェイス。世界初の人間。君が主人公じゃないなら誰が主人公なのさ」

「いや、蒼崎も似たようなもんだろ。というか、さっきの授業で言

「ってた化け物ってどういうことなんだ？」

喜色は卑屈に笑う。

「すぐにわかるよ。すぐに……ね」

「……そうか。改めて自己紹介しておこうか。俺は織斑一夏。一夏ってよんでくれ」

「うんわかったよ主人公」

「いや、だから……」

「ちよつとよろしくて？」

一夏がちよつと待てと手を喜色に向けたとき、誰かの声がかかる。

一夏と喜色、2人が聞いたことのない声だ。

「ん？」

「う？」

気の抜け夕声とともに2人は振り返る。そこにいたのは金髪碧眼の少女で、綺麗な金髪はロール状で碧眼の目は少し垂れ気味だ。腰に手を当て2人を見下ろす姿はとてもよく似合っている。クラスは初めて男子との初接触の様子に固唾をのんで見つめている。

「まあ！ なんですよそのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なんですからそれ相応の態度という物があるのではないですか？」

明らかに男を蔑むような態度。世の中の女尊男卑の風潮にのまれた典型的なタイプだ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「うん、僕も知らない。というか、初めて話す人にそれ相應の態度をとれといわれてもどんな態度をすればいいかわかんないし」

「知らない！？ このセシリア・オルコットを！ イギリスの代表候補生にして入学首席のこのわたくしを！？」

ヒステリックに叫び一夏の机を叩き、顔を寄せるセシリアに一夏が手をあげる。

「あ、質問いいか？」

「フツ、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

態度が180°反転、ヒステリックな状態から貴族の雰囲気を漂わせる余裕がでてくる。

「だいひょーこーほせーってなんだ？」

ズルッ！

固唾をのんで見つめていた生徒全員がずっこける。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

ものすごい剣幕で聞き返す。

「おう。知らん」

知らないことは素直に聞こう。と至極まじめな顔で一夏はセシリアを見つめる。

「主人公くん、ちゃんと考えようよ。日本語には一文字に意味があるんだからさ」

そこに除け者にされて寂しそうな顔をしていた喜色が僕の出番だと張り切って出てくる。
一夏は深く考え出す。

「だいひょーこーほせー。代表？ 候補生？ なんかの代表？」

「そうそう、続けて」

「ISだから……国家代表？ の、候補生か？」

「そうそう！ よく分かりましたー」

「極東の猿にも考える能力はあるようですわね。そう、わたくしは

エリートなのですわ！」

声を張り上げ自信満々に一夏の鼻先に人差し指を向ける。その耳に響く声に喜色は顔をしかめる。

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのですね。理解していただけたかしら？」

「そうか、そりゃ幸運だ」

「……馬鹿にしていますの？」

「でもさあ、あくまでも『候補生』なんだよ。代表とは差がありすぎるし、他にも候補生はいるんだよ。ということは補充要員つまり、補欠ってわけなんだよね？ 換えがきく消耗品なんだ。

それに幸運なのは君だよ、ロールくん。その主人公くんはモンド・グロッツ優勝者の織斑千冬の弟で世界初の男性IS操縦者だよ。かなり希少性高いよ？」

たしかに一夏は約30億分の1の人間で希少性はとても高い。喜色がISを操縦できていても、15億分の1だまだまだ希少だ。世界には一夏と接触したい人は掃いて捨てるほどいる。政府関係者に研究者、開発者その他etc. そんな注目の的一夏と当たり前前に話すことができるのは素晴らしい幸運だ。

「わ、わたくしは補充要員などではありませんわ！！ 専用機も頂いていますし、適性値はAですわ！！補欠なわけがありませんわ！！それにわたくしは入試の際に教官を倒したエリート中のエリート

トなのですわ！」

最初は大袈裟なほどに動揺していたが自分の考えを言うことで落ち着いたのか、最後にはまた胸を反らし自信満々に言う。そこに爆弾を投下する2人。

「俺も倒したぞ？」

「僕も倒したけど負けちゃった」

「ん？ 蒼崎、倒したけど負けたってどういうことだ？」

「なんかね、一回目はそのロールくんみたいに高飛車な人でちょっとイラつとしたから圧勝したんだよ。そしたら打鉄を装備した織斑先生がやってきたんだよ。それで負け。どんな無理ゲーって話だよね。というよりあんなチートに15分もった僕にはくしゅー」

1人だけ手を叩く喜色をクラス全員が見つめる。セシリアはショックのあまりに目を大きく見開いている。

「きよ、教官を倒したのはわたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないか？」

セシリアの表情が氷のように固まる。喜色がニヤニヤとセシリアにさりげなく追撃をかける。

「だよねー主人公も倒したんでしょ？ なら本当に倒したのは3人ってことになるねー」

「いや、でもあれは……なあ？」

「なあと言われてわかるわけがありませんわ！　どういつことかしら！..」

「落ち着けて、落ち着いて」

「どうどう、どうどう」

「わたくしは馬ではありません……」

落ち着こうとする気配が一つもないセシリアを止めたのはチャイムの音だった。一夏は安堵の息をはき、喜色は残念そうに肩を竦める。

「　　また後で来ますわ！　逃げないこと！！　よくって!？」

「逃げなねえよ。どこに逃げろっていうんだ？」

「大変だねえ主人公は。頑張つてね」

「貴方もですわ!!　　よろしい!？」

「よろしくないです。来ないでください」

セシリアが鼻息荒く席に着いたと同時に千冬と真耶が教室に入ってきて、いままで静かに見ていた生徒たちが慌てて席に着く。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

今までの授業は真耶が行っていたが、今は教壇に千冬が立っている。真耶は教室の後ろでノートを手にしていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移をはかるものだ。今の時点では大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は無いからな」

忘れていたことをふと、思い出したように話した千冬の話に教室が色めき立つ。事前知識がない一夏は自分には関係ない、誰かがやるだろうと気を抜く。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私も織斑くんを！」

「蒼崎君を推薦します！」

「あ、私も！」

「では、候補生は織斑一夏、蒼崎喜色……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺が！？ クラス代表！？」

「ちょっと待つてよ！ 僕たちまだISに関わって1ヶ月も経っていない初心者だよ！！ そんなのでいいの！？ もっと、他にふさわしい人がいるはずだよ……」

次々と推薦され、立ち上がって抗議を始める喜色の勇氣は千冬の強力な眼力で圧殺される。

「織斑席につけ。蒼崎、うるさい黙れ。さて、他にはいないのか？ いないならこの2人でじゃんけんだ」

「ちょ、俺はそんなのやりたくない！ 蒼崎も……」

「うるさいだつてよ。当たり前のことを言ったらうるさい……こんなこと初めてだよ。ははは」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権は無い」

「で、でも蒼崎の言っただ通り」

初心者だし、と続けようとした一夏の声を甲高い声が遮る。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

机をたたきセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められませんわ！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコ

ツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？
実力から考えればわたくしがクラス代表になるのは当然の話。それを物珍しいからと言う理由で極東の猿たちにされては困りますわ！
わたくしはこのような島国までIS技術の修練にきているのであって、サーカスをする気はありませんわ！」

猿と言われた男2人。1人は我慢我慢と耐え、1人は聞きながらも
のんきに筆入れからあるだけのペンを取りだし積み上げていく。
セシリアの口はまだ止まる気配はない。

「いいこと！？ クラス代表は実力トップがなるべきですわ！
そしてそれはわたくししかおりませんわ！
大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、
わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

プチン

どこかで何かが切れる音がした。

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何
年覇者だよ」

「そーだそーだ、もつと行ってやれー後進的な国の技術の塊を偉そ
うに持つてる奴なんか国に帰れー」

「あつ、あつ、あなた達ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！
？」

一夏がそろりと後ろをむくと烈火のごとく顔を真っ赤にして怒り狂
うセシリアがそこにいた。

「先に侮辱したのはどっちかな？ 侮辱するならISおいて家に帰れよー」

「決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

またもや机を叩いたセシリアに売り言葉に買い言葉。即答の一夏。

「そこのあなたもですわよ！」

「……？」

ビシッと指をさされ、喜色キョロキョロとあたりを見回す。

「その死んだような目のあなたですわ！」

言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使いいえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほどまだ男は腐っていない」

「ねえ、ロールくん。敗者が勝者の言うことをなんでも聞くってことだね？ ね、ね？」

一夏はやる気をみなぎらせ、喜色は異常に食いつきを見せる。異常な食いつきの喜色に律儀にもセシリアは答える。

「いいですわよ。もしもわたくしが負けたのならあなたの言うことを聞きますわ。た・だ・し！ 勝てたらの話ですわ」

「それなら僕の出すお題を言っておこうかなー」

「僕が勝つたら君は卒業までの3年間裸エプロンで過ごしてもらおう！ 食事のときも、ISを操縦するときも、寝るときも、国に一時帰省するときもずっとだ！」

「……………変態だっー！？」

リスクが大きい勝負にもセシリアは勝てると自分を疑うことをしない。

「やはり男は最低ですわ！」

まあ、なんにせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットの实力を示すよい機会ですわ！」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

一夏がそこまで言ったときクラスが爆笑の渦につつまれる。女尊男卑が当たり前のこの世界、男が女より強いといわれていたのは昔のことだ。そのような世界でこの発言、当然笑い物だ。

「織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのは大昔だよ？」

「撤回するのも遅くないよ！」

クラス全員が本気で笑う。その様子に喜色が静かに口を開く。

「黙りなよ」

「主人公は本気に決まってるじゃないか」

「なんで男は女に勝てないの？」

「ISを使えないから？」

「動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獸亜綱正獸下綱
靈長目真猿亜目狹鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエン
ス種サピエンス亜種の雄と雌に大して違いがあるわけでもない」

「世界が二つに別れて戦ったら男性陣営が3日ももたない？」

「バカを言っちゃいけないよ」

「戦争は戦う部隊だけで成り立っているわけじゃない」

「作戦の立案、補給部隊の展開、兵器の生産、兵士のメンタルケア。
他にもたくさんある」

「戦い方だって山ほどある。戦後を考慮しないなら女性陣営側に核
爆弾を大量に発射すればいい」

「毒ガスを撒き散らせればいい」

「仲間割れを起こさせればいい」

「ISをつかうのなら整備機械を壊せばいい」

「整備物資を奪えばいい」

「生活必需品の供給を絶てばいい」

「物資を渡さなければいい」

「今の世の中男性ばかりが辛く厳しい仕事をしてるよね」

「でも、そんな大変な仕事が僕たちの生活を支えているんだ」

「そんな男が敵にまわるんだ。ライフラインを整備する人はいない
よ？」

「ライフラインを破壊すればいい」

「敵のトップを暗殺すればいい」

「それに、」

「ISの初心者候補生に勝てないって言うの？」

「主人公は織斑千冬の弟だよ？」

「ただの男なはずがないよね」

「もちろん僕だって普通じゃない」

「勝てないって決めつけるには早すぎるよね」

「戦いつて言うのは今から始めますってところからじゃないよ」

「いまこのときから始まっているんだ」

「あ、言い過ぎちゃったね。ゴメンゴメン」

「さ、主人公にロールくん。続けて続けて。僕はもう、黙っておくからさ」

今までとは違う喜色の雰囲気クラス全員がのまれ、動く気配もない。

一夏とセシリアも話を続けることができない。

「さて、話は纏まったな。勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。3人はそれぞれ用意しておけ。蒼崎は後で私のところへ来い。それでは授業を始める」

この誰も声を出すことのできない空気を壊したのは千冬で、出席簿を喰らいたくないと皆授業を受ける体勢にうつるのだった。

喜色は勢いよく職員室の扉を開ける。

「しつれーしまーす。織斑せんせー、来ましたー」

パンツ！

「語尾を伸ばすな。鬱陶しい」

千冬の手から投げられた出席簿は喜色の頭でいい音をたて、千冬の手に戻る。

「痛いですせんせー」

「こっちに来い。話したいことがある」

「無視……ヒドいよー!」

喜色を無視し続けて、奥にある密室へ千冬は手招きをする。素直に喜色は部屋に入る。

喜色と話す覚悟を決め千冬は扉の鍵を静かに閉めた。

2 話目 波乱の襲来（後書き）

専用機をどうしたものか……

悩むなあ……

誤字脱字、感想待ってます

3 話目 波乱が去って初日が終わって

「うつ……」

一夏は机の上につつ伏せになり唸る。

「い、意味が分からん……。なんでこんなにややこしんだ……？」

IS学園へ入学する生徒は多少差はあるが参考書を見て勉強をしているが一夏は捨てた。そのため一夏は事前学習を全くしていない。IS関係の教科書には専門用語がひっきりなしに出てくる。辞書でもあれば多少はマシになるだろうがそんな都合のいいものは無い。初日にも関わらずIS学園は授業の全てをIS関係で攻めてきた。これは公式を知らない数式をヒントも何もなく自力で解けと言われているようなものだ。当然一夏に分かるわけもなく、今日一日何もしていないことになる。

一夏の耳には女子がキヤイキヤイと騒ぐ声がよく聞こえる。

「（うぐ……。勘弁してくれ……）」

昼休みに喜色と友好を深めようと一緒に学食に行こうとした。授業中に男2人でいけば精神的疲労も少しは休まるかとも思い誘おうとした。おかげで千冬の出席簿が飛んできたが。だが、昼休みになると喜色は何時の間にか教室からいなくなり、一夏は一緒に学食へ行こうとする女子にまわりを囲まれた。そこからは地獄に等しかった。食堂へ向かう一夏の後ろには人が並び、食券を買おうとするとモーゼの海割りの如く人の壁が割れた。俺がなにをした。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。蒼崎

くんは……いないみたいです」

「はい？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

うつ伏せの状態から体を起こした一夏に真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡す。

IS学園は全寮制で生徒は寮で生活しなければならない。これはIS操縦者を保護する目的で行われる。余所の国の候補生に何かあつてからでは責任はとれないという、お偉いさんの考えも少しはあるが。

一夏は紙と鍵を渡されて戸惑う。

「前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうつていう話でしたけど？」

「織斑くんと蒼崎は事情が事情なので、安全性を最優先して無理矢理変更したそうです。……政府から聞きました？」

真耶は最後の部分だけは一夏にだけ聞こえるよう耳打ちをする。

世界でたった2人のISが動かせる男。解剖してみたい人もいるだろうし、遺伝子を研究したい人もいるだろう。政府関係者も来るだろう。蒼崎喜色、織斑一夏の二名はいま篠ノ之束と同程度の重要度がある。

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく2人を寮に入れるのを優先してみたいです。1ヶ月もすれば個室が用意できますから、しばらく我慢してください」

「……あの、耳に息がかかってくすぐったいんですが」

「あ、いやっ、これはっ、わざととかではなくてっ……!!」

真耶は顔を赤くして一夏から離れる。少しの間耳打ちをしていたため、クラスにいる人間の視線が自然と集まる。

「いや、わかってますけど……。あ、まだ荷物用意してないんで今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「チフーユ先生がとりに」

ゴン!

喜色が口を挟むが後ろから出席簿が振り下ろされ撃沈。後ろから千冬が現れる。

「私が手配しておいた。ありがたく思え」

「まったくさつきと違ってツンデレなんだからチフーユ先生はホントは主人公に誉めて」

ガンッ!

復活。撃沈。忙しいやつだ。

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろう」

とても大雑把である。人の生活は潤いも必要なんだよ、姉さん。と言いたいがそのような地雷を踏む勇気を一夏は持つてない。

「蒼崎は……朝、すぐにここに来たから荷物は私が持つている。後で渡そう」

「もちろん中は見てないよね？」

「安心しろ。私が直々に検査しておいてやろう。それから夕食は6時から7時、1年専用食堂を使え。大浴場はお前たち2人はまだ使うことはできない」

四つん這いになった喜色を放っておいて千冬はつつけるが、一夏が尋ねる。

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「主人公はムツツリだね！ 安心して！ 僕も同じ気持ちだから！ 思春期の男子だから仕方ないよね！」

喜色が一夏の両手を握り大きな声で言う。それを聞いたクラス内外が若干騒がしくなる。

「ふ、2人は、女子とお風呂に入りたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？　女の子に興味がないんですか！？　そ、それはそれで問題のような……」

クラスの注目が集まっているなか、真耶のこの騒ぐ様子に早くも騒ぐ女子が出てくる。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「蒼崎くんがのぞきに来るかもしれないわね」

「どっちともそれはそれで……いいわね」

「織斑くんの中学時代の交友関係を洗って！　すぐにね！　明後日までには裏付けとって！」

なんの話だ、なんの。といったように喜色と一夏は顔を見合わせた。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、蒼崎くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

校舎から寮まではわずか50メートルほどしかない。ISアリーナ、IS整備室、IS開発室など様々な設備があるが今の2人にはどうでもいい。一日中視線にさらされ精神の余裕を示すメーターはとうの昔にレッドゾーンに突入していた。

「ふー……」

「んー……」

「蒼崎、行こうぜ。今日はもう疲れた」

「そうだね。でもまだ気を抜くには早いと思うよ。まだ何かある気がするよ」

千冬と真耶が教室から出るのを見て一夏は喜色に声をかけながら立ち上がる。強制的に床に伏せることになっていた喜色も起き上がる。

「えーと、ここか。俺は1025室だな。喜色はどうだ？」

「……ねえ、主人公。部屋交換しない？」

一夏は部屋番号が書いてある紙を見て、冷や汗をダラダラと流し手がガクガクと震えている喜色の手元を覗き込む。

「……寮管室のとなりか。ここは断っておくぜ」

「そんな殺生なことしないでよ主人公！　僕がストレスで髪が白くなってもいいっていうの！？」

「シラネ」

キツパリと断った一夏に喜色は望み薄とみて、首を振りながら歩き出す。一夏も自分に割り当てられた部屋である1025室へ入る。

「……疲れた。来週は決闘とかあるし。というかISは訓練機でやるのかな？　でも腐っても代表候補生なわけで専用機ぐらいもってるよなあ」

自分の部屋に入った喜色は今まで使っていたベッドよりも何倍も高級なベッドに寝転がる。すでにこの部屋に入る前に寮監室に人がいないのは確認済みだ。寮監が誰なのか後で調べなくてはならない。真耶ならいいが、千冬だった場合は最悪だ。喜色に自由はない。

「ま、なんとかなるさ。さて、主人公の部屋にでも行ってみようかな」

柔らかいベッドを惜しみながら一夏のところへ行こうと扉を開けるときにあ、と声をあげる。

「忘れてたよ。常に身につけてないと」

部屋の隅に置かれていた荷物の中から先端にUSBメモリがついたネックレスを大切そうに取り出す。それを一旦目の前に持ち、眺めた後首にかける。

「さ、行くっ」

喜色が1025室の扉をノックしようとしたとき、突然扉が内側に開かれ一夏が飛び出てきた。

「うおおっ!?!」

流れるような動きで部屋から脱出、扉を閉める。背中を扉につける。

「助かった!」

「主人公、なにしてるの?」

「いや、不可抗力で筈の」

ズドン!

一夏の顔の真横に木刀が突き出す。その隙間、僅か2ミリ。素晴らしい幸運だ。

「……なんか楽しそうな感じがするね。主に僕が」

「お前が楽しくてはどうする　っ!?!」

木刀の切っ先が扉の内側へ引っ込む。

ズドン！

そしてまた打ち込まれる。

「本気で殺す気！？　かわさなかったら死んでるぞ！」

打ち込まれた場所は数秒前まで一夏の頭があった場所。まさに危機一髪。くろひげ危機一髪も真っ青だ。

「……なにになに？」

「あ、織斑くんは蒼崎くんだ」

「あそこが織斑くんの部屋かー」

「蒼崎くんの部屋はどこ？」

「寮監室のとなりー。寮監って誰だか知ってる？」

騒ぎを聞いて部屋から女子が次々と出てくる。男の目を気にしない格好を見て一夏が一度赤くなっていても喜色はただ、笑って話を始めるだけで顔を背けたり赤くなったりもしない。

一夏は頭の上で合掌。邪神でもいいから助けてくれと心の底から願う。

「……箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。頼みますお願いします何でもしますから」

「寮監は織斑先生っていう噂があったよ」

「それホント？ こっそり遊びに行けないじゃん」

「終わった。誰か部屋交換してくれない？ 主人公に頼んだけど切り捨てられちゃって」

「いやだよー怒られたくないもん」

「そうそう、出席簿が振り落とされそうだよね」

パパパパアンツ！ ガン！

「そう遠慮するな。それほど痛いものでもないだろう。蒼崎も決まったものに文句を言うな」

「ッ！？ ッ！？」

「少し、聞きたいことがある。ついて来い」

千冬が登場、一瞬で出席簿を振り下ろす。が、1人だけ威力が違う。千冬は頭を押さえ床を転がりまわる喜色の首根っこを掴みそのまま引きずって歩きだす。壁に当たろうがお構いなしである。

喜色は寮監室に連れてこられ、目の前には千冬が立つ。

「さて、失礼だとは思ったがその首にかけているメモリの中を見させてもらった」

「何やってるんですかチーフユ先生。というか見れなかったでしょう？」

「ああ、おかげでパソコンを買い替えなければならん。一体それはなんだ。とても大切そうに包んであったが」

首を振り溜息をつきながら聞く。どう考えても普通ではない。読み込もうとするとPCが爆発するようなUSBメモリなど普通ではない。そして、ジューラルミンケースにいれ、鍵をかけているのも普通ではない。

喜色は当たり前といった顔で答える。床に蹲ったまま。

「さっき部屋で言ったでしょう？ あの時に持っていたものだよ。データの量が半端ないから普通のパソコンじゃ見ようとすると壊れちゃうよ。まあ、ウイルスを仕込んでるっていうのもあるんだけどね」

「……まったく、私が全面的に悪いとは言えそのように言われるとお前を悪く言いたくなるな。それで、そのメモリの中はなんだ」

「現在の普通の技術者では作れない、発想自体できない兵器だよ。ああ、安心して。少しは世界にばらしてるから、僕だけが持つてるわけじゃないよ」

「それで一夏に危害を加えようとしたら許さんからな」

ここでニコニコと笑っていた喜色は雰囲気が変わり刺々しくなる。目つきは鋭く、声もすこし低くなる。

「だからさっきも言っただろ。目的を邪魔しなければ殺しはしないし、一生残る怪我をさせたりもしない。しつこいんだよ」

その雰囲気は一瞬で終わりいつものなにを考えているか分からない雰囲気になる。ニコニコと笑う。

「ところで千冬ちゃん、もう千冬ちゃんは超ブラコンって事が分かったんだけど、みんなにばらしていい？ それと今少し驚いてたよね？ ビックリだよ。千冬ちゃんが驚くなんて思ってもいなかったよ」

ガンッ！

「織斑先生だ」

ガンガン！

「そして何だ？ その言葉づかいは？」

ゴスゴスゴス

「目上のものには敬語を使うのは常識だ」

「痛い、痛いよ千冬ちゃん！ 叩くならもう少し優しく叩いてよ。あ、でも叩かないでくれるほうが嬉しいな、なんて……」

喜色の自分の威厳に関わる言葉を聞き我に返り、誤魔化すように叩きだす。態度の豹変に少し驚いた自分が恥ずかしいのか照れを隠すように叩く。その頬は若干赤い。

「ほら！ 早く部屋に戻って寝るがいい！ 今見たことも聞いたことも全て忘れる！ いいな！」

「わわっ、分かったから叩かないで！」

喜色が逃げるように部屋を去る。千冬は赤くなった顔を冷ますため、しばらくの間立ち尽くしていた。

3話目 波乱が去って初日が終わって（後書き）

千冬エ……

がつつりキャラ崩壊……

専用機について考えてみた。

オリ主歪んでる 誰かゆがんでる人いたっけ？ オールドキングが
いるじゃん いやでも……なんかあってるようであってない なら
はどうする 別に既存じゃなくてもいいじゃない 姿をばやかして
…… いや、でもそれはちよつと……

うーん、悩むなあ……

次はバトル。期待しないで欲しいなあ

ここから独り言

シュタインズゲート、ゲルまゆ、絢、失敗した。……怖かった。

4話目 クラス代表決定戦（前書き）

バトル……ものすごく書きにくいなあ

4 話目 クラス代表決定戦

一週間がたった。一夏は篠ノ之箒と一週間使える時間を全て剣道に費やした。おかげでISの知識、技術は何一つ習得していない。それもそのはず、ISを触ることもせず、授業以外学ぶこともしなかった。よって今こうしてとても焦っている。

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「山田先生の補習受けとけばよかった……」

だからこうして両手を床につけているのだ。

「主人公、どうするのさ。何もしてないんだろ？」

「蒼崎、一夏は私とちゃんと鍛錬している！何もしてないことは無い！」

「いやいや箒ちゃん、ISの武装が刀一本ってことは無いでしょ」

ダイビングスーツのように首元から足首までピッタリとしたISスーツを着た喜色に箒は不快感を隠そうともしない。

「下の名前で呼ぶな。虫唾が走る」

「主人公、篠ノ之ちゃんに嫌われたよー。ところで主人公のISっていつ来るんだろうね？」

そう、一夏のISはまだ来ていない。完成はしている。だが、IS学園へまだ届いていない。血統の開始時間はすぐそこだ。

「蒼崎って訓練機を使うのか？」

「そうだよ。まだ出来てないらしいしね。というかね、この前開発してくれてるチームの主任と話したんだ……」

喜色の顔が目に見えて暗くなる。

「なにか不味いことでもあったのか」

「うん……。変態だった」

「え？」

「は？」

一夏と箒がなにを言っているか分からないといったように首をかしげる。

一週間ほど前、千冬から専用機が来るという話を聞き喜んだのもつ

かの間、喜色の喜びは砕け散ってしまった。

「だから、変態だったの」

「それは一体……」

「どういつ……？」

「変態技術者だったの！ 僕が電話に出たときまず最初になんて言
ったと思う！？ 複数の人が変わり変わりに『大艦巨砲主義って最
高だよな！』、『戦車ってどう思う？』、『一撃必殺っていいよね』
、『一点特化は最高、異論は認めない』とか言われたんだよ！？
それに最後は全員が声を会わせて『世界にたった一つっていい響き
だ』だよ！ すぐさま切ったさ！！」

「そ、それは大変だな……」

どちらも続ける言葉が無く辺りに音がなくなってしまう。そこに一
つ音が割り込んできた。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

いつも危なっかしい人なのだが、今日はいつもに増して危なっかし
い真耶がビット内に駆け込んできた。
ここで一夏がしょうもないことを実行する。

「山田先生、落ち着いてください。這い、深呼吸」

「は、はいっ。すーはー、すーはー」

「這い、そこで止めて」

「うつ」

本気にしなくてもいいのに真耶は本気で息を止める。息をとめた影響で見る見るうちに顔が赤くなっていく。

「……」

「……ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パンツ！

千冬の登場だ。いつもと同じように出席簿が頭に落ちる。

「千冬姉……」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

弟に対する態度ではない言葉。ここでは教師と生徒なのだから仕方がないのかもしれないが。

「そ、そ、それですねっ！ 来ました！ 織斑くんの専用IS
蒼崎くんのはまだですけど……」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せる。一夏」

「え？ え？ なん……」

本人が理解していないが周りは理解し、一夏をせかす。

重厚な鈍い音とともにピット搬入口が開く。ゆっくりと開いたその扉の先には白があった。純白の、無の色がそのISの色だった。その姿は操縦者が触れるのを今か今かと待っているように見えた。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。出来れば負けるだけだ。わかったな」

「主人公、せいぜい敵の手札を出させてね。僕が有利になるように頑張ってね！」

空気が抜ける音とともに一夏にISが装着されていく。千冬は心配しているように見えたが一夏の言葉に安堵の息を吐く。

「残念だが、蒼崎。お前はこの試合は見てはならん」

「え、ちょ、それは」

「不公平だろう？ だからだ」

「……………」

何か言いたそうな喜色の横で一夏がゲートの外へ飛び出していった。

「よくまあ、持ち上げてくれたものだ。それでその結果か、大馬鹿者。蒼崎、さつさとISを装備しろ。打鉄かラファール・リヴァイヴどちらにする」

一夏がなかなか粘ったが負け、ピットに戻ってきた。千冬はセシリアに喜色との対決は翌日にしてもいいと言ったがさすがは代表候補生といったところだろうか、「大丈夫ですわ！ 訓練機などスクラップにしてくれますわ！」と、自信満々に言い放ったので今日のうちにすることになった。

「それじゃ、ラファールにします。正面から刀でキンキンってやるのはね」

「ふん、さつさと行け」

喜色はISを装着し、カタパルトへ向かう。向かう途中に武装を選ぶ。

「さて、鈍ってないといいけど。ま、スポーツだし大丈夫だろ」

「ふふん、あなたも負けにきたんですの？」

「あーはいはい、所詮お嬢様には負けないよ。おじよーさまはおじよーさまらしく屋敷で紅茶とケーキでも飲んで食べてたら？ ま、僕は紅茶は嫌いなんだけどね」

腰に手をあて空中に佇むセシリアを早々に挑発する。セシリアも挑発に挑発を返す。

「それでは何がいいと言いますの？ まさかコーヒーとはおっしやいませんわよね？ あのような泥水を飲めるとは、尊敬しますわ」

テキ、射撃体勢、移行。初弾、エネルギー、チャージ

ISからの警告を聞き喜色は右手にアサルトライフルを呼び出し、左手にショットガンを持つ。まだ構えない。脱力したただ持っているだけ。

「まあ、今謝るならば許してあげないこともなくてよ？」

「は、攻撃態勢にうつっておきながら許してあげないこともない？ 頭ボケた？ 大丈夫？」

「ならば踊りなさい。セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアの指がトリガーを引き初弾が銃口から飛び出し喜色の眉間

に向けて放たれる。喜色は首を傾げて避ける。間髪おかずに放たれた二発目、三発目と次々に続くエネルギー弾を最小限の動きでかわす。

「はいはい、円舞曲つてのは体を接して共に回るモノなんだけど、拒否してるんじゃないよ世話ないよ」

次々と飛んでくる弾をよけながら話す余裕もあるようで動かしている本人も顔には出していないが驚いている。

「いつまで避けているんですの？ それではただの的ですわよ！」

「ちょっと聞いてほしいんだけどさ、ISに似た兵器つてあったけ？」

「あるわけがないですわ」

「あ、そう。でも、似たような物を動かした感じがするんだけどなあ」

ここではじめて喜色が両手に持った銃を構える。ショットガンのトリガーは引かず、右手のアサルトライフルのトリガーだけを引く。もちろんセシリアのスナイパーライフルから放たれる銃弾をよけながらだ。

タタタッ、タタタッ、タタタッとアサルトライフルから弾丸が飛び出る。

「ようやく撃ってきましたわね！ さあ、実力差に絶望しなさい！」

「ふん、すぐ逆に絶望することになるさ」

続けて飛び出した弾はまずスナイパーライフルの銃身に当たり跳ねあがる。跳ねあがった銃身に向けてさらに弾が当たる。

「くう、小賢しい！」

「ほらよそ見しちゃだめだよー」

セシリアが銃身に意識を向けているとき、喜色は距離を一気に詰め左のトリガーを引く。一発、二発、三発、四発。右手、左手、右足、左足と撃っていき、ブルー・ティアーズの装甲がそれなりに削れる。

「くっ、ブルーティアーズ！」

ブルー・ティアーズからビットが四つ切り離されレーザーが発射される。

「ダメだよ、こんな近距離でビットなんて使ったら。ここは近接武器だよ」

上方向に上昇しかわして、両手のトリガーを引きながらセシリアから距離をとる。距離をとるときにミサイルを放って爆炎で目をくりますのも忘れない。

「あ、あなた、ISを動かすのはこれで二回目じゃありませんの！
？　どこかで動かしただことがあるでしょう！？」

テキ、シールドエネルギー、減少

「ホントだよ。僕、嘘、つかない。目測でいくとあと六割あたりか」
「嘘をおっしゃい！」

喜色は肩を竦めるだけで反論はしない。

「ところで僕が勝つたらちゃんと裸エプロンしてくれるよね？」

「ふふん、わたくしに勝てたら、の話ですわね」
「あーあー、聞こえないーい」

喜色は話している間にアサルトライフルからスナイパーライフルに
持ちかえる。まずは機動力を奪うところから始める。
専用機と訓練機の違いだろうが、性能が違いすぎて話にならない。

「まずは俺から目を、意識を逸らせる」

右肩に六連装のミサイルポットが具現化され、装填されたところか
ら絶え間なくミサイルが放たれる。セシリアは放たれたミサイルを
ビットのレーザーで撃ち落とす。

おかしいことに、スナイパーライフルも使えばさらに効率があがる
だろうに、手に持ったままで使う気配はない。

「ん、ビットが邪魔だな。潰すか」

煙が漂う中、ハイパーセンサーは鮮明にセシリアとビットを捉えていて、喜色は大して狙いをつける様子もなく、右手の指を三回引く。

「え？」

「よし、後は一機か」

弾はビットのレーザーを発射する部分を三発とも的確に貫いた。セシリアはいま起こったことが信じられず動きを止めた。

「ふわあああ……蒼崎くん、すごいですねえ。オルコットさんが一方的にやられてますよ」

ビットでモニターを見ていた真耶は感嘆の声をあげる。

「ああ、私と戦ったときも最初は防ぐので精一杯だった。近づいては離れて、近づくと離れる。厄介な戦法だ」

千冬は防ぐので精一杯と言っているがどのように来るか見定めていただけであって、苦戦したわけではない。

「ISであんな戦い方始めてみましたよ。あんなに急加速したりして大丈夫なんでしょうか？」

真耶が心配そうに呟くが千冬はきっぱりと断言する。

「大丈夫だ。山田先生はラファールを使っていますよね」

「ええ、とても使いやすい機体です」

「では、ラファールの最高速度で急加速や急停止、急旋回を何度もできますか？」

「無理ですよ。Gが大きくて何度もは無理です」

一回五回連続でやったことがあるんですけど気がついたらベッドのうえでした。と恥ずかしそうに笑う。

「あいつは二桁以上やっておいてケロリとした顔で笑っていた。私でも多少体が痛んだのに。それに、どう考えてもおかしい」

組んだ腕を組み直し苦々しげに呟いた言葉に真耶が首を傾げる。

「なにがですか？」

「機体の能力などだ。スペック以上の性能を引き出している。それも限界性能以上だ。あいつ、まだ何か隠しているな……」

「まだ、何か隠している？」

「ああ、こつちの話です。……そろそろ終わるな」

二人はモニターに向き直って試合の結末を見届けようとする。

「ブルー・ティアーズが四機撃墜！？　あなた、何をしたんですの！？」

「何って、弾で貫いただけだ」

「そんなデタラメな……」自分の主な攻撃方法の一つを潰され、呆然とするセシリアに喜色は今の内にと距離をつめる。スラスターを全力で吹かし、今出せる最高速度を出す。

普通の人間ならば急加速や急停止はGがかかり苦しくなったり息がしにくくなる。だが何故か喜色にそのような気配はない。

「考えるのはいいけど、危ないぞ」

ドオンッ！

喜色の左手には煙をあげるバズーカ砲が握られている。至近距離でバズーカ砲を放つなど正気を疑う行動だが、与えたダメージは大きい。

ブルー・ティアーズの装甲はボロボロになりフラフラと地面に落ちる。威力の高さに実体ダメージもとないセシリアの顔が痛さでしかめられる。

「くう……っ！一体なんですかあなたはっ！」

「君たち女が見下している約30億人のうちの1人だ。他にもいろいろあるが……まあ、そんなところだ」

「嘘ですわ！なぜわたくしがこんなにも早くシールドエネルギーを9割削られるのですか！」

「ふーん後1割か。このまま負けたら裸エプロンだよ。どうする？」

「負けませんわ、ここから……逆転しますもの！」

セシリアのスカート状のアーマーの突起が外れる。動き始めたビツトが放ったのはいままでのとは違ってレーザーではなく、ミサイルだった。

しかし使いどころが悪い。接近時に不意をつく形で放ったのなら避けることができるのは殆どいないだろう。が、それなりに距離がある時に使っても大した危険にはならない。

二発のミサイルは喜色のスナイパーライフルに迎撃されあえなく爆散する。

「さ、タイムオーバー、時間切れだ。君には三年間裸エプロンで過ごしてもらおう！ 情状酌量の余地はない！」

右手のスナイパーライフルがセシリアに狙いをつけ固定される。あとは喜色が引き金を引くだけだ。

「ひっ………！」

セシリアは銃口が自分の眉間に向けられ怯え、縮こまる。シールド

エネルギーはもう無いに等しい。絶対防御は生命を確保するだけだ。つまり、痛いものは痛い。

そして、いくら国家の威信を背負っているとはいえまだ子どもだ。ISの威力は絶大である。理論上では一機あれば、戦況をひっくり返すことが可能だと言われている。そのような武器が自分に向けられている。恐怖しないわけがない。

「……」

喜色のハイパーセンサーがセシリアの恐怖にそまつた顔を捉える。流石はハイパーセンサー、怯えている顔がよく見える。

気に入らない。恐怖に怯えている状況を作り出している自分が何より気に入らない。心のどこかが引き金を引くのを邪魔をする。

「……やめだ。やめやめ。この試合、棄権する。僕の負け、セシリアちゃんの勝ち。終わり！」

「……は？」

突然の敗北宣言にセシリアは呆然とし、状況が理解できない。理解しないまま試合は終了する。

『蒼崎喜色、棄権。試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

「よう、馬鹿者が。つまらんとこで止めるなら最初からやるな」

ピットに戻って早々に千冬の鋭い言葉が投げかけられる。一夏は何故あそこまで追い詰めて棄権したのだと疑問で一杯だ。

「そうだよ、なんであそこでやめたんだ？」

「たはー千冬ちゃんキビシー！ いやー、あんな加虐心を撥られるような表情をされたら絶対防御が発動してもさらにやってやりたく

……」

パンツ！

「織斑先生だ。はあ……そんなくだらないことか。そんな事だろうと思っただが」

「くだらないって何ですか！ 耐えるのすごい苦労したんだから！」

拳を握りしめ堂々と言う喜色にあきれたのか、面倒になったのか、千冬は頭を抑える。

「そうか、明日も授業がある。さっさと寮に戻って寝ろ」

「はい」

素直にピットを去った喜色たちが出ていった扉を見ながら千冬はまたため息をつく。

「……はあ。まったく、本当に厄介事の種だったか。どうせさっきの理由も嘘だろうしな……」

フツといやな予感が頭をよぎる。

「いや、あいつのことだ、本気で言っていたのかもしれん……」

「まだ信頼はしてもらえんか。私も、まだまだ未熟だな……」

そう呟いた後、ピットを出ていった。

4 話目 クラス代表決定戦（後書き）

前回の予告通りバトルでした。うん、自分は圧倒的な力で上からねじ伏せさせる戦いのが好きだったります。戦いの書き方こうしたらいいとかアドバイスとかあったら嬉しいです。

次はいろいろかつ飛ばして中国さんが来るよ！ だって主人公が入り込む隙間が無いんだもの。

以下どうでもいい独り言

アーマードコア？発売延期……なぜだフロム！

？が出た記念にPS3買おうと思ってたのにっ！

何故延期したっ。このまま発売中止なんてない……よね？

5 話目 転入生、襲来（前書き）

グダグダでシリアスともいえないシリアスがちょっと入ってて、場の切り替わりがとっても多いです。

5 話目 転入生、襲来

戦いの翌日、一年一組の教室の教壇に真耶が立ち嬉々として喋っていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね」

一夏は状況が把握できず、硬直。暫し時間を使い把握。質問のために手をあげる。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっているんでしょうか？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

シュバツと立ち上がりセシリアは腰に手をあてる。
なんで辞退した、テンションが高い、なんで上機嫌？ 一夏は疑問を抱く。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたし、蒼崎さんについても実質わたくしの勝ちですし」

「ちょっと待ってくれ、蒼崎は勝ちまであと一步のところだったから、蒼崎のほうが強いと思うんだけど……」

「主人公、僕は負けたんだよ。それに敗者は勝者に従う。当たり前
の事だよ。あ、セシリアちゃん、負けたら奴隷とかいうの無しで
いい？」

「ええ、わたくしも熱くなりすぎましたわ。蒼崎さん、わたくしが
負けたときは、は、裸エプロンも無しでいいですわね？」

「もちろんだよ」

「そ、それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華
麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、そ
れはもう見る見るうちに成長を」

コホンと話題を変えるように咳払いをしてセシリアはあごに手をあ
てる。

バン！

セシリアの言葉に反応したのは箒で、勢いよく立ち上がる。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたから
な」

「あら、ISランクCのあなたとAのわたくしではお話にならない
のでは？」

箒の異様に鋭い眼光を光らせてセシリアを睨みつけるが、セシリア

も正面から睨み返す。クラス全体がピリピリとし始めたが千冬がいつものごとくぶち破る。

パパアンツ！

「座れ、馬鹿ども」

出席簿でたたかれ、すごすごと席にもどる2人を見て一夏が何かを思いつく。

（凄味とすごすご……なんつって）

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

一夏の頭に出席簿が落ちる。一夏の文句がありげな視線を無視して声を張る。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

セシリアは何か言いたげな顔をするが反論が出来ないらしく、そのまま言葉を飲み込んだ。
千冬はさらにつづける。

「織斑、これは決定事項だ。お前と蒼崎が負け、セシリアにクラス代表の権利が移った。だが、セシリアは辞退しお前を推薦した。すでに決まったことだ。異論は許さん。いいな」

はい、とクラスが返事をするが、一夏だけは苦虫を噛み潰したような難しい顔をしていた。

時間はずいぶん進む。

4月の夜、IS学園の正面ゲート前に小柄な影が現れる。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜風に揺れる艶やかな黒髪は左右それぞれ高い位置に金色の留め金で結ばれている。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

頭の記憶を探りつつ、上着のポケットから小さくなっている紙きれを取り出す。

紙きれはくしゃくしゃで、少女の性格をよくあらわしていた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

文句を言おうと紙きれが返事をするわけもなく、少女は紙きれを上着のポケットにしまう。

しまったときに紙きれがつぶれる感覚がしたが当然気にしない。

少女はぶつくと口を動かし歩きだす。思考する前にまず動く。そういう主義だ。

歩きながら思考するが、その中身は少女以外は分からない。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

学園内の敷地をあつちこつち歩きながら人を探す。だが、あたりは暗く、校舎の明かりは落ちていて申し訳程度につけられた非常灯が足元を照らす。

少女の耳に人が歩く音が届き、あたりを見渡す。見渡した先には人影が見える。少女はこれ幸いと声をかけるために近づき、肩に手をおく。

「ねえ、ちよつといい？」

「ん？ こんな夜遅くに出歩いている生徒は誰かな！？ 千冬ちゃんの出席簿が落ちてくるよっ」

「あれ？ あんた、男よね？」

肩をおいた人は喜色だった。喜色は今日も今日とて専用機が届くのを待っていたが届くこともなく、またかとすでに通いなれた道を歩いていたのであった。

IS学園は女尊男卑の風潮を色濃く反映し、男が入ることは滅多にない。少女が一度性別を確かめるのも当然だった。

「そつだよ！ 正真正銘の男だよ！ 早く寮に帰らないと千冬ちゃんから怒られちゃうよ！」

「あんた、ここIS学園よ。わかってるの？」

「分かってるよ。男がIS学園にいたら悪いの？」

少女は『都市をとっているだけで偉そうにしている大人』と『男と
いうだけで偉そうな人間』が嫌いだ。少女にとって今の世界ほど心
地いいものはない。それなのに。それなのに、自分の目の前には男
がいる。IS学園はIS関係者しか入ることが出来ない。

研究者か整備士かとも考えたが、研究者にしては知的ではなく、整
備士にしては体の線が細い。

少女が学園への侵入者かと考えISの展開を準備するのも当たり前
であった。そして、敵意を示すのも当たり前のことであった。

「悪いわよ。ISは女しか動かせないのよ。例外はあるけどね。そ
れで、あんたは何者よ」

「僕？ 僕はーそうだね……束ちゃんの知り合いって言うておこ
うかな？」

「誰よそれ。もっと分かりやすく言いなさいよ」

束と言えばISの生みの親の篠ノ之束がいるが、この人は他人に興
味を示さなかったはずと可能性を切って捨てた。

「あれ、しらないの？ それじゃあ、どういう風に言ったらいいか
な？ ……そうだ、クイズをしよう！」

「なんでクイズなのよ……」

「さあ、準備はいい？」

ヒントその1。僕は、ここで暮らしている。

ヒントその2。ここに来たのは入学式の日。

さてわかるかな！？」

少女の呆れた表情を見ても気にすることなく、喜色はクイズを始める。

少女は案外ノリがいいようで、喜色から目は離さないが、考え始める。

「うーん？」

「制限時間後三十秒ー」

「え！　ちょ、ちよつと制限時間あるの！？」

「モチロンサア！」

「あーもー！　わかんないわよ！」

「それじゃあヒントその3。僕の名前はあ行から始まる。ヒントその4。ISのことは基礎知識は大体知ってる」

「あんたの名前なんて言われても知らないわよ……」

「はいはい、呆れられると僕悲しいよ。制限時間後十秒ー」

「もつとヒント頂戴」

「しかたないなあ、ラストヒント！　僕はインフィニット・ストラトス、通称ISを動かすことができます。もう答えを言ったようなもんだよ？」

その瞬間、少女の警戒心はマックスを通り過ぎた。ISを使える男

は少女も知ってる。だが、このような男ではない。それだけは分かる。なぜならそのISを使える男を少女は知っているからだ。

「嘘よ。あんた何者よ。私はISを使える男を知ってる。でも決してあんたじゃない」

「うんうん、そうだよ。そう思うよね。でも、見えていることが現実とは限らないよ。そうだよ、俺だよ。俺が、織斑」

もったいぶった態度で話す喜色に後ろから近づく人影がある。その人影は気配も足音もなく、忍び寄り腕を振りかぶり振り下ろす。

パンツ！

「いち　　つたあ！？」

「私の弟を名乗るな。蒼崎、今何時だ」

「やー千冬ちゃんひどいよ！　なんで足音と気配消してたのさ」

「いま、何時だと聞いている」

戦場をくぐり抜けた強者でも尻尾を巻いて逃げだすような気迫で千冬は再度尋ねる。……尋問と言ったほうが正しいかもしれない。

「僕の体内時計ではまだ夜の6時！」

「そうかそうか、そんなに私にしごかれたいか。いいだろう、明日の放課後首を洗ってまってる」

「しごかれないってなんか卑」

「あのー、ちょっといいですか？」

「ん？ お前は……ああ、転校生か。どうした」

喜色とは違い柔らかな物言いで返す千冬に少女の緊張は少し和らぐ。

「受け付けてどこですか？ ここって広くて」

「ああ、まだ報告していないのか。ついて来い。蒼崎、さつさと寮に戻れ。私が戻ったときにいなかったら。分かってるな？」「え、この人生徒なんですか？」

「ああ」

千冬はツカツカと本校舎へ歩きだす。その後ろに少女が小走りですいていく。

あとに残された喜色は名前を聞いてないことを思い出したが、今から聞きに行くのは面倒とゆっくりと寮に向けて歩き出した。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

翌日、一夏が教室にはいつてすぐにクラスメイトに話しかけられる。

「転校生？」

今はまだ四月。なぜ、入学ではなく転入なのだろうと首を傾げる。
IS学園の転入条件はとても厳しい。さらに、国の推薦がないと転入できない。

「そう、なんでも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん」

「あら、代表候補生ですか？ わたくしを危ぶんだのかしら」

セシリアが腰に手を当て、一夏のそばにたつ。

「どんなやつなんだろうな」

「今のおまえに女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるだろうに」

今度は筈が一夏のそばに来る。一夏が他の女子を気にしたせいだろうか、若干機嫌が悪い。

セシリアが名案を思いついたとばかりに、手を合わせる。

「そう、そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦にむけて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手は専用機持ちのわたくしにお任せください」

クラス対抗戦とは本格的なIS実習が始まる前のスタート時での実力指標を作るために行われ、クラス単位での交流及びクラスの団結のためという名目もある。

そして、やる気を出させるため、一位クラスには優勝商品として、学食デザートの半年フリーパスが配られる。女子は自制をしなければあとで地獄をみることになる。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って、一組と四組だけらしいから余裕だよ」

一夏のまわりには女子が集い騒ぎ始めると、一夏は気概そぐのも何かと思い、短くおう、と答える。

そんな騒がしい教室に一つ声が入り込む。

「その情報、古いよ」

聞き覚えのある声に一夏は振り向く。

振り向いた先には腕を組み、片膝を立てて扉にもたれている少女がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告にきたの」

小さく笑みを漏らし、ツインテールが軽く揺れた。そんな鈴音に一夏は一言。

「すげえ似合ってないぞ」

「んなつ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

こんな言葉が来るとは思わず、口を開けてしまった鈴音。クラスは突然の乱入者を見つめるばかりで、声をたてる者はいない。鈴音が言い返そうと唇を湿らせたとき後ろから声がかかる。

「はい、どいてねー。そこ邪魔だよ。……あれ？　なにこの空気。なにに？　なんか楽しそうなこと？」

「おー蒼崎か。楽しいかどうかはわかんねえ。とりあえず教室に入れよ」

鈴音の後ろに現れた喜色を一夏は手招きする。

「あれ、その声は？」

「邪魔だつて。どいてよ」

「あ、あんた、昨日の！」

後ろを振り向いて喜色の顔を見た鈴音は驚き、一歩飛びのく。そんな鈴音を見ても気にせず都合よく道が開いたと、教室に入り一夏の隣の自分の席に座る。

「主人公、なにがあつたの？　それであの格好つけてた子は何がしたかつたの？」

「俺の幼馴染だよ。何がしたかつたって言われても格好つけたかつただけじゃないか？」

喜色の質問にチラチラと鈴音を見ながら声量を控え目に答える。鈴音は聞こえていないようで、首を傾げ一夏と喜色を見つめている。

「ああ、なるほどね。久しぶりの幼馴染との再開で舞い上がったやつて事だよな！　ね、その女の子？」

「え、ちよつと一夏！　こいつになに言つたのよ！」

一夏が声を控えた意味もこれで無駄になつてしまった。喜色の言葉は凶星だったのか鈴音は顔を赤くし、自分の顔が赤くなった原因の喜色ではなく、一夏に非難の声と視線を向ける。

一夏を睨みつけていた鈴音の後ろに昨夜と同じように1人、人が立つ。

「おい」

「なによ！？　私は今忙しいのよ　　あつ」

バシンッ！

鈴音に出席簿が落ちる。千冬の顔を見た鈴音の顔がピクピクと引きつる。

「もうSHRの時間だ。ショーとホームルームチャイムは鳴っている。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。もう、教師と生徒だ。ケジメをつける。さっさと戻れ」

「は、はい……」

すぐごと教室から出ていく鈴音は千冬がとても苦手のようだ。そして、捨て台詞のように一夏を指さす。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏！ それとそのあんたも！」

「さっさと戻れ」

「は、はい！」

教室を出て、二組へ向かって走り出す。走り去る鈴音の後姿を見て一夏は思っているが一つ。

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

その言葉に過剰に反応した篤とセシリア。2人につられて、クラスメイトからも質問が火を噴く。

バババババンッ！

「座れ、馬鹿ども」

静まらないクラスに千冬の出席簿も火を噴く。
有耶無耶になった一夏と鈴音の関係が箒とセシリアは授業中も離れることもなく、授業に集中できず千冬の出席簿が火を噴いた。

一日の授業が終わり放課後に一夏は箒とセシリアと特訓を終え、鈴音に箒と同室ということがバレ、一夏は夕食を終え部屋でお茶をいれてくつろいでいるときにまた波乱やってくる。

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！　なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

「いやあ篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？　気を遣ってのんびりできないし。　あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってたさ」

「べ、別にイヤとは言っていない……。それに、これは私と一夏の問題だ。部外者が入り込む余地はない！」

「大丈夫、あたしも幼なじみだから」

「そついう問題ではない！」

二人の話は噛み合う様子も口を挟む隙間もない。二人の相性は例えるなら水と油だろうか。それほど恐ろしく合わない。

そして、鈴音はただ部屋を代わるように交渉に来たわけではないように、足下にはボストンバックが置かれている。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふざけるな！　ここは私の部屋だ出て行け！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？　じゃあ問題ないじゃん」

ここで、言葉を区切り同意を求めるように一夏を向く鈴音。箒も一夏に自分の言い分に同意を求めるように顔を向ける。一夏は逃げるように答える。

「俺に振らないでくれ……」

「とにかく！　部屋は変わらない！出ていくのはそつちだ！　早く出ていけ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するな！　ええい、こうなったら力づくで……」

「あ、馬鹿」

自分を無視され、ずうずうしく部屋を出て行けと言われた箒は激昂、ベットの横に置いていた竹刀を握り、一夏が止める間もなく無防備

に見える鈴音に竹刀を打ちこむ。打ちこまれた竹刀は大きな音を響かせた。

「鈴、大丈夫か!？」

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは 代表候補生なんだから」

「……!」

鈴音の頭に打ちこまれたように見えた竹刀は、部分展開されたISの右腕で防がれていて、竹刀を打ちこんだ箒は驚いていた。

ISは展開しなければただの待機状態にある機械だ。既存のISは危険を察知して勝手に展開されたりはしない。展開して初めてハイパーセンサーやシールドの恩恵を受けられる。ということはIS展開速度はに展開を指示する人間の反射速度を超えることは絶対になり。操縦者が人間でないなら別の話だろうが。

篠ノ之は剣道の全国大会優勝者だ。実力は並ではない。その篠ノ之の打突をしっかりと防いだ鈴音の実力も並ではないことが分かった。

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ？」

「う……」

箒は居心地が悪そうに鈴音から顔を反らす。

「あれ？ なんでIS展開してるの。なに？ 生身の人間とISで戦おうとかいう一歩手前？」

「違うわよ。ただ、ちょっと揉めただけよ」

「ふーん……。ま、篠ノ之ちゃんと鈴音ちゃんが戦うっていうなら僕も呼んでね。正々堂々不公平にジャッジしてあげるから」

「いや、それ正々堂々って言わないから」

一夏の部屋にヒョッコリ顔を出した喜色は場のギスギスとした空気を感取り、なんとか和ませようとする。そして、一夏も話を逸らして場を明るくしようとする。

「そっいえば鈴、約束っていつのは」

「う、うん。覚えてる……。よね？」

顔を伏せ、上目遣いで一夏を見つめる。恥ずかしそうな顔を見て、
箸が顔をしかめる。

「えーと、あれか？ 鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を」

「そ、そう！ それ！」

「おごってくれるってやつか？」

「……………はい？」

すっかり思い出せたと自慢げな顔で約束を言った一夏に、鈴音は声が出なくなってしまう。

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺に飯をごちそうしてくれるって約束だろ？ いやしかし、俺は自分の記憶力に関心」

パンっ！

「……へ？」

乾いた音が部屋に響く。頬を叩かれた一夏は状況が、何故叩かれたか理解できずまず箒と目を合わせる。箒は一夏と同じように状況が理解できてない。次に、喜色の顔を見る。喜色は鈴音をチラッとみて何故叩いたか分かったようで、苦笑いを浮かべる。苦笑いをしながらも唇だけを動かす。

「（く・た・ば・れ・ど・ん・か・ん・や・ろ・う）」

「え、えーと」

「……………」

一夏はゆっくりと鈴音の顔を見る。鈴音は、肩を震わせ涙が溜まり怒りに満ちた目で一夏を睨み、唇を固く結んでいた。

「最低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

そう言うとき床にいたバツクを持ち上げ、扉を蹴り開けて部屋から出ていく。

バタンッ！ と大きな音を聞きに、一夏はやってしまったと心の中で呟く。

「……まずい。怒らせちゃった。でもなんで怒ったんだ？ それに泣いてたよな……………」

鈴音が走り去る直前の顔を思い出す一夏に声かけられる。

「一夏」

「お、おう、なんだ筈」

「馬に蹴られて死ね」

グツと声を漏らす一夏に追撃がかかる。

「主人公」

「ど、どうした蒼崎」

「猪にど突かれて死になよ」

「なあ、蒼崎なんでだよ！」

「一応フォローはしとくから自分の言ったことをよく思い出すとい
いよ、豆腐の角に頭ぶつけてくれたばれ」

喜色はそういい残して鈴音のあとを追いかけていく。

「……はあ、わけわからん」

まだ九時前だが、布団に一夏は潜り込む。明日には状況が変わって
いることを願って。

そう簡単に変わるわけがないのだが。

一夏の部屋から駆け出し、がむしゃらに走った鈴音がたどり着いたのは海に近く、薄暗く、人が近寄らない校舎裏だった。今、誰にも会いたくない鈴音にはうつてつけの場所だ。

「なんでそんな風に覚えてんのよ……」

ポストンバックはそこらに放り投げ、制服が汚れるのもお構いなしに自分も地面に腰を下ろす。

「変な女がいるし……」

「昨日はあの女と楽しげにしゃべってるし……」

思い浮かぶのは一夏の隣にいた自分を攻撃してきたポニーテールのあの女。一夏はその女の隣にいて、楽しげに笑っていた。本当は自分が行る場所なのに。

一夏は随分変わっていた。背は伸び、声が変わり、見た目も格好良くなった。でも、中身は自分が転校していった時と全く変わってなくて、一目見てすぐに自分と分かってくれたのが嬉しかった。

「なにしてるのかな鈴音ちゃん？」

「……なによ。なにしにきたの」

鈴音を照らしていた僅かな月明かりが遮られる。昨日の夜に聞いた

声が聞こえた。

薄暗くて助かった。明るいとみつともない泣き顔が見られてしまうだろうから。

「まあ、乙女に男のからのアドバイスみたいな？」

「いない」

「そう言わずに。隣座るよ、いい？」

「……勝手にすれば」

喜色は鈴音の隣に寝転がって、お願いしてもないのに勝手に話し始める。

「そうだね、僕はまだ織斑一夏を知って1ヶ月もたってないけど分かることはある。あいつ、物凄い鈍感でしょ？」

「……うん」

「鈴音ちゃんが今怒ってて、泣きたいのは織斑一夏が約束をまちがえておぼえてたからでしょ？」

「そうよ。なにが言いたいの」

「その約束を当ててみようか。そうだね、『私の味噌汁を毎日飲んでくれる？』みたいな事を言ったんでしょ？」

「……味噌汁が酢豚だけだね」

「それはどうでもいいよ」

鈴音の指摘を切って捨てる。そして喜色の話はまだ続く。

「今一番重要なのは、君の好意に鈍感なアイツがどうやってたら気づくか、だよ」

「べ、別にあたしは一夏が……」

「嫌いななの？」

「違うわよ！ 嫌いなわけではないじゃない！」

鈴音が顔を赤くするのがわかり、喜色は小さく笑う。

「ふーん……。まあ、味噌汁飲んでじゃ駄目なら直接言うしか無いんじゃない？」

「は、恥ずかしいじゃない！」

「なら既成事実を使うしか手がないよ」

「無理無理無理っ！ 前にそれしようとしたら、千冬さんが……」

「やっぱりあの人も主人公スキーか。それなら自分で考えなよ。今言ったのは最終手段だから他にも方法はあるんだから」

話は終わったというように喜色は勢いに任せて立ち上がる。

「あたし馬鹿だからわかんないよ……」

鈴音の呟きに喜色は歩きながら口を開く。

「……ここからは独り言だけど、なにかで勝って一つ願いを聞いてもらえばいいんじゃない」

「……っ！」

バツと伏せていた顔をあげ、喜色の背中にむけて声をかける。

「あ、ありがとう……」

「早く帰らないと春と言っても風邪ひくよ」

喜色は後ろを振り向くことなく寮に戻っていった。

鈴音はすぐ後に自分の両頬を軽くたたき、この場所に来たときの暗い気持ちではなく、若干明るくなった気持ちになって歩いていった。

翌日、玄関前廊下に張り出されたクラス対抗戦の紙には一回戦目で一夏と鈴音が戦うことになっていた。

これをみた鈴音がすぐさま一夏の部屋に走り、負けた方が勝った方の言うことを聞くという約束をとりつけたのは簡単に分かることだった。

5 話目 転入生、襲来（後書き）

あるえー？ 鈴音こんな性格だったけ？

というか最後エ…… 喜色誰だよテムエなレベルｗｗｗｗ

というか篤ちゃんまじ空気ｗｗｗｗ

束さんが怒って出てきそう。

さて、次は閑話を入れる予定です。

さあ、変態どもが出てくるかもよ！？

というか、予定だと束さんが悪者になってしまつ。どうしよう……
束さん大好きなのに。

以下、どうでもいい独り言

アーマドコアとエースコンバットとＡＣアーマドコアってややこしい。アーマー
ドコアで調べようとＡＣと打ったらぽぽぽーんが出てくる……
エースコンバット新作やりたいなあ

専用機製作現場（前書き）

ほとんどか会話です

専用機製作現場

「さて、今ここに世界で2人目のIS操縦者のためにと篠ノ之博士から送られてきた、ISコアと我々の発想力では思いつかないような兵器の設計図が入れられたらメモリがある」

その部屋はカーテンが全て引かれ日の光が一切入らず照らすのは、そこにいる人が使っているパソコンのディスプレイから漏れる光だけだった。部屋には大きく丸いテーブルがあり、人の顔が簡単に見えるようになっていて。テーブルには複数のパソコンがあり、電源がついていないものもある。

机の上で手を組んだ中年の男がリーダーのようで、司会のように話を進める。

「各自ディスプレイを見てくれ。ここにあるのは今の技術力では突破出来ないような装甲や、発想する事さえなかった兵器の設計図だ。特にこのコジマ粒子というものは今のエネルギーとは比べものにならない。有毒性があるようだが、ご丁寧にも篠ノ之博士が取り除く方法を添付してくれている」

「それであなたは何をしたいの？」

「そんなことか。決まっているだろう？　なあ、若いの」

「ええ、新しい技術にISのコア。やることは一つしかないです」

若い女の声がし、中年の男はさも当然といった風に答え、隣にいる男に問いかける。問われた男は他になにがあるというように胸を張ってはつきりと答える。

「この技術を使って超ハイスペックで白騎士にも勝てる魔改造で

きるISを短期間で作り上げる！」

「で、その作ったISは人に扱えるの？ 扱えないんなら宝の持ち腐れよ」

男2人で声を合わせ一言一句同じ言葉を言う。女はあきれ返った声で尋ねる。

ISは人が扱う機械だ。無人機などではなく、人が動かさなければならぬ。加速するだけで人間が潰れるようなISや、IS適性以外にも適正が無いと扱えないなどもっての外だ。

「安心しろ。篠ノ之博士から操縦者のデータは届いている。見てみる」

「え、これって……」

ディスプレイに目を落とし新しく表示されたウィンドウを眺めていく女の顔は次第に険しくなっていく。

「ええ、体をいじられているようです。対G耐性や、身体修復能力の強化、神経の光ファイバー化とともに機械信号を処理可能に。さらに全神経伝達速度の向上により反射速度などのスピードが向上しています。他にもいろいろありますがまあ、主なものはこれくらいでしょう。しかし、これだけの事をやってしまう人がいたとは。素晴らしい」

「なかなか面白い事をやられているよな。本人も気にしていないらしいし、やりたいようにやっても大丈夫だろう。なにか質問は？」

ないのならこれで第三二五回最高の武装はなんだろうなっ！？ 討論会+ を終了」

男が締めくくろうとしたそのとき、カーテンがいつせいに開く。明るい日の光が部屋に差し込み、3人は顔をしかめる。

「何バ力なことやってんすか？ あたしが思うにこのISは最高の物を作らなきゃ篠ノ之博士にこの会社が潰される気がするっす」
「そんなことがあるわけが……」

男は考える。篠ノ之束のしたことを。ISの性能を世界に知らしめるため世界中のミサイル基地を並列してハッキング、実際に発射する。興味が無いものには徹底的に興味が無い。世界中の裏で違法にISを研究している研究所が最近よく潰されている。そして極め付けがこのコアとメモリ。世界中の組織に呼びかければこの二つを少しでも見ようと、おこぼれに預かろうと一斉に飛びかかってこられるだろう。

「……あるな」

「あるわね」

「ありますね」

「ヤバいっすよ。しかもタイムリミットは2週間っす」

お互いに顔を見て、頷きあう。状況はややまずい。ISを構想から作るのに二週間など有り得ない。ISの制作は普通は長期的なものだ。

だがこの四人も所詮天才だ。そして一度何かに熱中し始めると止まらない、止められない、止まる気がない。毎日仮眠三十分など日常茶飯事だ。つまり、なにが言いたいかというところ。

「よし、やるか」

「未知の技術……ああ、ゾクゾクするわあ」

「あまり興奮しないでくださいよ……」

「腕になるっすねー」

変態が興奮するだけの話だ。それぞれ、腕まくりをしたり、服の襟を正したり、眼鏡をクイツとあげたり、エイエイオーと腕を振り上げたり、2週間完徹を物ともせずに作業につづるのだった。

IS作成途中の四人の様子

「む、グレートウォール？ ふむ、装甲の部分は見たことがない理論だな……。これをISに流用すれば……」

「ふーん、プライマルアーマーにアサルトアーマーねえ……。随分面白いことを考える人がいるのね。普通は考えもしないわよ」

「クイックブースト、オーバーブースト。瞬間加速より性能は上、しかもコジマ技術を使えばエネルギーは回復する。これが世に出たらIS戦闘がひっくり返りますね」

「うーん、ISの装甲は部分的っすけどこのACCってのは全身装甲っすか。……くうう！ ロマンっす！ この無機質などフォルム！ 戦闘のために研ぎ澄まされたこの設計！ 組み合わせが無限大！ 全てのISがこんなだったらいっすのに！」

「さて、案を纏めよう。私はこの装甲を使いたい。このネクストというACの火力をもつてしても破れない装甲だ」

「全身装甲の出番っすね！？ その装甲に身を包めば要塞になれるっす！ 一人要塞……憧れるっす！」

「ではその一人要塞を高機動化しましょう。この二つをISに組み込めば既存の兵器やISは追い付くことなどどうあがいても無理でしょう」

「ふん、それだけじゃ駄目でしょ？ やっぱり最後に通じるのは力よ！ というわけで、これの広範囲殲滅が可能になるこれを使うわ！」

「ほう、それを使うとなればさらに一人要塞になってしまいますね」

「大丈夫だ、問題ない。むしろ足りなくらいだ。こんな最高の技術をもったんだ、最高のものを作らなければ技術者の恥だろう」

「それじゃあ、デザインはどうするっすか？ 性能だけがなくて格好悪かったらイヤっすよ」

「ああ、当たり前だ。そのようなものはスクラップにしてくれる」

「もちろん幾つかデザインはあるんでしょっかね？」

「ふっふっふーモチロンっすよ。さあ、どれがいいっすか？」

「ほう……」

「これは……」

「あなた……」

「」「素晴らしい」「」

「いや、複数案出してっすからそれじゃ分かんないっす」

「当然この灰色だろう」

「白はちよつと狙いすぎね」

「この逆関節は少し丸っこ過ぎます」

「となればこれしかないだろう」

「えー自分は白がよかったす。ま、三人がこれと言っならこれはいくつす。ちなみにこれをデザインしたのは自分っす」

「あ、そうだ。装甲の内側はどうするの？」

「どうする……とは？」

「内側はスカスカのままよ。特に胴体。どうするの？」

「ふむ……ならばこれを直接ここにやってしまえば……」

「それならここもこうすれば……」

「その手があったわ。これなら素晴らしいものになるわね」

「では、内部の方針はこれでいくぞ」

「ところで武器はどうするっすか？ さすがにアサルトアーマーとかいうのだけじゃキツイと思うっす」

「「「え？ それは……」」」

「実弾の巨大砲身の大砲しかないだろう」

「高威力のレーザー兵器しかないです」

「ブレード一択でしょ？」

「あんたらアホっすか！？　なにその極端な武装！　柔軟性もクソもねえっす！」

「そう地団駄を踏むんじゃない」

「そうよ。一点特化があれば他はいらないわよ」

「そうですよ、あなたはどんな状況でも打ち破ることができるものを作れないと？」

「……その一点特化が複数あつたらどうなるっすか？」

「そりゃあ……」

「それは……」

「きまつてるわよ」

「「「とっても面白そうことになる」「」」

「そうっすか……。それじゃあみんなが作った武装を全部積むっす。生半可なものだったら自分が許さないっす」

「よし、持ち場に戻れ。このIS、妥協は許さん。最高の物を作ろう。ああ、あと有害物質を取り除く装置をもう一度、一から調べなおしておいてくれ」

専用機製作現場（後書き）

……変態っぽくない。

ぼやかしたところも……。

専用機は想像に頼るということにしました。

以下、どうでもいい独り言

ヒロイン決めてなかった。（・・・）

どうしよう。これハイスピード学園バトルラブコメでしたよね。

ハイスピード？ いいえ、のろのろです。

学園バトル？ バトルにもなってないです。

ラブコメ？ それなあに？ おいしいの？

どうしよう。一応予定はあるけど一人だけ。こうなったらラスボス級のちーちゃんを……。

6 話目 クラス対抗戦の始まり

クラス対抗戦当日

第二アリーナ第一試合

織斑一夏 VS 鳳鈴音

世界の噂の渦のど真ん中にいる一夏とIS学園への転入生の鈴音の戦いとあってその注目度は半端なものではなかった。アリーナは満席で通路に立ったまま試合を観戦しようとする生徒もいた。会場の外でもリアルタイムモニターを見つめている生徒もいる。

一夏と鈴音はすでに会場で試合開始の合図を今か今かと待っている。喜色や箸、セシリアはピットのリアルタイムモニターを見つめていた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「スズメの涙くらいだろ。そんなのいらねえよ」

一夏は強がりではなく本心からこの言葉を言う。一夏は勝負で手を抜くのも抜かれるのも大嫌いだ。勝負とは全力で戦って初めて意味がある、そう一夏は思っている。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴音の言葉は本当のことでありそのことを目的として作られた武装

もあることにはある。もちろんスポーツであるISにとって競技規則違反であり、命に危険が及ぶ。つまり、最強の兵器といわれるISでも殺さない程度にいたぶることは可能である。

『それでは両社、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響き、鳴った瞬間から2人は動きだした。

ブザーを聞くなり俺は鈴に雪片式型を手に鈴に斬りかかるが、鈴は異形の青竜刀を持って雪片式型を迎え撃つ。

「ふうん、いきなり切りかかるなんて勇気があるわね。でもね」

両端に刃のついた異形の青竜刀を回転させ鈴は俺に斬りかかる。刃の角度を変え、高速回転させながら斬りかかってくる。このままじや消耗戦になるだけだ、一旦距離をとろう。

「甘いわよ!」

鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光り、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

なにが起こったのかも分からず慌てて回避しようとする俺に鈴は不敵な笑みを浮かべた。

「今のはジャブだからね」

牽制の後は本命と相場が決まっている。鈴は直感型だ。俺が慌てている隙を見逃すはずが無い。

ドンッ！

「グウッ！？」

またしても見えない拳に殴られて地表に叩きつけられ、鈍い痛みがシールドバリアーを貫通して届いていた。シールドも既に80近く無くなっている。これは非常にまずいな……

「なんだあれは……？」

「衝撃砲ですわね。空間に圧力をかけて砲身を生成、過剰で生じる衝撃それ自体を砲弾として打ち出す第三世代型兵器ですわ。不可視というアドバンテージはとても強いですわね……」

ピットにあるリアルタイムモニターを見つめながら箒が呟く。箒の疑問にはセシリアが答える。そして一夏にヒントを与えることができない自分に対して歯がみをするのだった。

「それほど強くないよ」

「え？」

喜色が呟いた言葉にセシリアは驚きの顔とともに振り返る。振り返って自分を見たセシリアには目もくれず、モニターを見つめたまま喜色は続ける。

「空間を圧縮して砲身を作っているならそれなりのエネルギーを使うはずだよ。それに衝撃砲は面制圧じゃない。エネルギーを感知して、少し早めに動けばいいだけの話だよ」

「い、いや、それが難しいので一夏さんは苦戦しているのだと思うのですが……」

難しい事を当たり前のように言う喜色とそれに戸惑うセシリア。2人の傍で筈は幼馴染の無事をただ願っていた。

強い。

それが鈴と戦っている俺の感想だ。基本の全てを高レベルで習得し、接近すれば青竜刀と衝撃砲で、距離をとれば衝撃砲で攻撃してくる。衝撃砲は弾丸も砲身も見えず、360度全てに弾丸を撃ってくる。何か意表をつかなければ勝ち目は無い。千冬姉が教えてくれたこの雪片二型のバリアー無効化攻撃があたれば、一回でも入れば勝ち目が見えてくる。だが、それをやるには鈴の懐に潜りこまなければならない。

「鈴」

「なによ？」

「本気でいくからな」

「いいわ、来なさい。わたしが勝った時のこと忘れたら怒るからね」

一週間で身につけた『イケニッション・ブースト瞬時加速』を使えば一瞬で鈴の懐に潜り込め

る。

「うおおおおおっ!!」

バリアー無効化攻撃を放ちながら鈴に接近する。

ズドオオオオンッ!

「!？」

刃が届くと思つた瞬間に鈴の衝撃砲とはケタ違いの威力と範囲の衝撃がアリーナに響く。

ステージ中央から煙が立ち上がっているようだ。

『一夏、試合は中止よ!　すぐにピットに戻って!』

状況が読み込めず混乱する俺に鈴からプライベートチャンネルが飛んでくる。

なにを言っんだと言い返そうとした瞬間、ステージ中央からレーザーが飛んできた。

「んなっ!？」

レーザーは何かキラキラした物質を放出しながら俺のすぐそばを通り抜ける。ハイパーセンサーが感知した熱量はセシリアのレーザーより出力が上。自分の背中に汗が噴き出すのが分かる。

煙が晴れてきてレーザーを撃ってきた本人を確認することが出来る。アリーナへの乱入者はISだった。手が異常に長く頭と肩が一体化しているような形で随分とおかしな形だった。そして一番目を引い

たのがそのISの装甲だった。

『全身装甲』と呼ばれ、体全体を防ぐことが出来る。だが、ISにおいてはそれは異常だった。ISの防御は殆どがシールドエネルギーがになっている。なので普通は部分的にしか装甲はない。

『織斑くん！ 鳳さん！ 今すぐアリーナか脱出してください！
すぐに先生たちが制圧に行きます！』

山田先生から通信が入る。

引く？ 無茶な話だろ。遮断シールドを簡単に突破してきたISを放っておいて俺たちが逃げると観客席にいる人たちにターゲットが移る可能性がある。ならば絶対防御もあるISを使っている俺たちが足止めしておくのが最善だと思う。

「俺たちが食いとめます。 じゃないと他に被害が及ぶかもしれない。いいよな鈴？」

「当たり前よ！ 行くわよ！」

鈴の気合も十分。まだエネルギーには余裕がある。俺と鈴は飛び出した。

「もしもし！？ 織斑くん！ 鳳さん！？ 返事してくださいー！」

非常に焦り、声を出す必要のないプライベートチャンネルに声を使

うほどに焦っている真耶を千冬がなだめる。

「本人たちがやると言っているのだ、やらせてみよう」

「お、お、織斑先生のんきなことを言ってる場合じゃないですよ！？」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

落ち着けと言っているが一番落ち着いていないのは千冬だ。その証拠にコーヒーを混ぜる手は小刻みに震え、コーヒーに入れている白い物体は砂糖ではなく塩だ。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「何故塩があるんだ」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……」

「……」

沈黙。部屋は沈黙し、真耶は自分の息すらも止めなくなる。しかし唐突にその沈黙を破る者はいる。

「先生！ 蒼崎さんと篠ノ之さんが見当たりません！」

「避難したのだろう。オルコット、お前も避難を……」

部屋に飛び込んできたセシリアは髪を振り乱しながら千冬の言葉を遮る。

「違います！ 蒼崎さんが急に立ち上がって……どこかに駆けだし

て……」

「どういうことだ？ 詳しく話せ」

セシリアのただならぬ様子を見て千冬はセシリアを見つめる。
セシリアは切羽詰まった様子で話したず。

「煙の中からレーザーが出たあとにいきなり『コジマ粒子』と言った後どこかに……」

「コジマ粒子？ その時の蒼崎の顔はどうだった」

「なにか……そう、世界の終わりを見たような、そんな顔でしたわ」

「世界の終わり？ あの常に笑っている蒼崎くんがですか？」

喜色は常に笑みを浮かべていて捕らえどころのない人間だ。この数週間喜色の補習を受け持っていた真耶はそれが少し信じる事が出来ない。

千冬はセシリアを促す。

「ふむ……それで、篠ノ之は？」

「篤さんはわたくしが蒼崎さんに目をとられていたときにいつの間にか」

「そうか。ひとまずお前も避難しろ」

「逃げるなんてできませんわ！ わたくしに出撃許可を！」

「無理だ」

千冬は簡潔に答え端末の画面を数回たたき、表示された画面をセシリアに見せる。

表示された画面には第二アリーナのステータスチェックの数値が表示されていた。

「遮断シールドがレベル4に設定？ 扉が全てロック……。あのISの仕業ですよ！？」

「そうだ。オルコット、お前に出来ることは無い。当然私にもない」

千冬の手は画面を忙しなくたたいており、その苛立ちが目に見えて分かる。

「ISでシールドを突破すれば……」

「スナイパーライフルとビットでどうやってレベル4設定のシールドを突破する気だ？ 雪片が超高出力の兵器でもない不可能だ。避難しろ」

「しかし……！」

「これは命令だ。避難しろ」

何もできない自分が悔しくてセシリアは手を握りこむ。そのセシリアの隣で千冬は異様に鋭い視線をアリーナの方にむけていたが、それに気づく人はいなかった。

俺は突然現れたISを無人機と仮定して、次は全力で当てると鈴に言い切った。鈴も俺を信じてくれておれに全てを任せると言ってくれた。

「一夏、どうしたらいいの？」

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「いいけど当たらないわよ？」

「いいんだよ、当てる必要は無いんだから」

絶対に勝てる方法が一つだけ、一つだけあるんだから。

「それじゃあ、早速」

俺が構えて、鈴も衝撃砲の発射態勢をとった瞬間アリーナのスピーカーが大きく振動した。

「一夏あつ！」

「な、なにしてるんだよ」

その声は箒のもので中継室を見ると箒が審判とナレーターをのしてマイクを握っている。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうする！」

キーンとハウリングが起こる。ハイパーセンサーで見た箒は怒っているとも焦っているともとれる言いようがない表情をしていた。

「……」

気がつくともISはいまの大きな音に興味を持ったようで俺たちではなく箒のほうにセンサーレンズが向いている。

まずい。まずいまずいまずいまずい！！

「箒、逃げ」

体感時間が急に短くなり、見るものすべてがゆっくりと見えた俺が見たのは砲口のついた腕を箒に向けようとしているISだった。俺は突撃体勢をとり加速しようとする。まだ、ISは腕を上げ切っていない。まだ、箒に向けられていない。

「……え？」

時瞬時加速をしようとした俺のすぐそばを一つの影がゆっくりと見える俺の視点でも残像しか見えないスピードで通り過ぎていった。

その影は一気にISに接近し上がりかかった腕に向かって脚を振り上げ、そのスピードをはるかに上回る早さで振り下ろした。そのまゝISに余裕を与えず回し蹴りを繰り返して壁に向けて蹴り飛ばした。

「主人公、鈴音ちゃん、生きてる？」

そのISを蹴り飛ばした人がようやく止まり姿を見ることが出来た。

その人は俺の隣の席にいつもいる蒼崎だった。

いや、待て。ちょっと待て。待ってくれ。蒼崎がISを蹴り飛ばした？ 見る限りISを展開もしていない蒼崎が？

「ちょ、どういうこと！？ 蒼崎、アンタ今生身よね！？」

「そうだけど、どうかした？」

「アンタISを吹っ飛ばすってなにをしたのよ！？」

鈴が俺の言いたいことを言ってくれた。鈴の質問には興味を示さず俺の目を見つめてくる。

「主人公、早くここから出で。シールドのレベルは跳ねあがってるだろうけど、その雪片ならシールドを破れるから」

「ここから出でて……蒼崎、お前生身だろ！？」

「いいから早く出で。僕は大丈夫だから」

「そんなのできるわけないでしょ。ISは最強の兵器なのよ」

大丈夫って言っても無理なものは無理だろ。生身でいる蒼崎をおいで逃げることもなんてできない。こっちにはISが2機ある。勝つこともできるだろう。

「なんでそんなに出ろっていうんだ！ それになんで危険なところに入ってきてるんだ！」

「ホントに危険な場所になるからだよ。あんな鉄くずは危険とも言

えない。頼むから、出て」

冷たい感情のない目で俺をみる。いつものニコニコとした顔ではなく鋭い千冬姉が戦うときみたいな目。ハイパーセンサーが敵ISの方に動き警告してくる。

敵IS 攻撃体勢に移行。危険。

「伏せて！」

「え？」

「伏せるのよ！ 一夏！」

突然蒼崎が怒鳴り、困惑する俺を鈴が押しとばす。直後、俺のすぐ横をまたしてもレーザーが通り抜ける。

レーザーが通ったあとにはキラキラとした綺麗な何かが漂っていたから手にとろうと手を伸ばす。

「触るな！」

「っ！？」

「主人公、絶対にそれに触るな。それは核物質よりタチが悪い有害物質だ」

「え、それってここにいるのもヤバいんじゃないか？」

隣で鈴が息を大きく吸い込み止める音が聞こえる。核物質よりタチが悪いってどんだけ凶悪なんだよ。

「主人公、鈴音ちゃん」

「詳しく話すから今は出て行ってくれ」

「……断る」

なんで敵が目の前にいて戦うことが出来るのに逃げ出さなきゃいけない。俺はそれほど弱いと思われてるのか。

「弱いよ。どうしようもなく弱いよ。例えいまここで織斑千冬が来たとしても戦力にはならない。むしろ足手まといだ」

「プハアツ！ 千冬さんでも足手まといってどういうことよ！」

蒼崎はいままで出したことがない大声を俺たちに向ける。

「君たちは分かるのか！ 核物質の数百倍のスピードで汚染される恐ろしさが！ 理解しているのか！ 以降超長期間もの間草木が一本たりとも生えず砂漠化することのクソツ！」

またレーザーが飛んでくる。今度は一本だけじゃなく大量に飛んでくる。全て蒼崎に向けて。

俺のハイパーセンサーが感知するより先に蒼崎は動き出した。動きながらも俺たちに声をむける。

「ああ、もうっ！ シールドと汚染が！ しょうがない！ 一夏、鈴音、隅で体を小さくしてろ！」

「鈴、行くぞ」

蒼崎が初めて名前を呼んだ。この数週間、どんなに驚いたりしよう

と決して崩さなかった呼び方を。よほど切羽詰まっていると理解し鈴を呼ぶ。

「行くつてどこへよ！ まさか言うことを聞く気！？」

「そうだよ」

「なんでよ！　なんで急に言うことを聞くのよ！」

「呼び方だよ。あの蒼崎が呼び捨てで俺たちを呼んだ。それだけ切羽詰まってるんだろっよ」

「た、確かに呼び捨てだったけど……。でもそれだけで言うことを聞くの！？」

何時までも経っても戦う気にいる鈴。なんで分からないんだろう。やっぱり男と女の差か？

このままだと埒があかないから鈴の肩と膝裏に手を通して抱きかかえる。多少失礼かもしれないが緊急時つてことで許してもらおう。

「ちょ、一夏、なにを」

「暴れるなつて。落ちるぞ。というか隅に投げるぞ」

「う……」

急におとなしくなった鈴を抱え避難する。

一つもレーザーが来ないのを不思議に思つて、中心を見ると蒼崎がこっちに攻撃が来ないように立ち回っていた。

蒼崎の邪魔は出来ないな。おとなしく小さくなっていよう。

俺は蒼崎の無事を願うしかなかった。

6 話目 クラス対抗戦の始まり（後書き）

IS 蹴飛ばすって……

次の話で謝りたい人がいるので今のうちから謝っておきたいと思います。

箒ちゃんごめんねええええ！！ ひどいこと言ってごめんねええええ！
許してくれとは言わないけど許してええええ！！

以下、どうでもいい独り言

15日に韓国が2chにサイバー攻撃とか言っていましたけどなんもなかったんですねえ。何があったんです？

7 話目 一瞬の戦闘（前書き）

第ちゃんごめんねえええ！

7 話目 一瞬の戦闘

コジマ粒子

それは取り出すことの出来るエネルギーが既存のものの何倍も、何百倍もある夢のようなエネルギー。しかしそう夢のエネルギーなどあるわけではない。

コジマ粒子を使った機関を使用する機械は今までの機械と比べ、比べものにすらできない性能を叩き出す代わりにどうしても無視することの出来ない欠点があった。

汚染物質の散布

汚染物質は土地を不毛の大地に変え、空気を汚染し、生物を住めなくする。無視することなど出来るはずが無かった。研究者は真つ当な人間だった。完成した研究結果をすぐさま自身が所属していた研究所の最高機密ファイルに隠した。

だが、世界とは奇妙なものだ。奇跡とは簡単に起こる。

もし一人の子どもが実験台では無かったら。もし世界に名を知らしめる天才が気まぐれで研究所を破壊しようとしなければ。もし実験台の子どもが気絶していなければ。もし天才が気まぐれで実験台だった子どもが大切そうに持っていた記憶媒体を見ようとしなければ。もし、もし、もし。一つでもこの『もし』がなかったらこのような事にはならなかっただろう。

しかし奇跡は起こり今の光景がある。

IS学園第二アリーナには一機のISがあつた。そのISは濃い灰色。全身装甲。二メートルを超える巨体。地面につくかというほど長い腕。そしてその腕から発射されるレーザーが主な武装だ。

その主武装が問題だった。コジマ粒子を使ったレーザーで環境への

被害は甚大になる。喜色は汚染を防ぐためアリーナに乱入した。だが濃度予想したものより随分と低かった。低かったといえど無視出来るレベルではないが。

篠ノ之束がこのISを、コジマ粒子を使用するレーザー砲を作った。もちろん天才の名を欲しいままにする彼女はコジマ粒子の危険性は知っており、なんとかコジマ粒子をおうと有害物質を取り出すことに成功した。しかしそれは成功で失敗だった。それは安置して有害物質を100パーセント取り除けるのであって、それ以外、例えばISに搭載すると100パーセント取り除くことは出来ず決して見逃すことの出来ない量の有害物質が漏れ出してしまふ。喜色と一夏、鈴音がはなしている間にも汚染は進んでいた。

「篠ノ之束……。また、また俺のしようとすることを邪魔すると……?」

「……」

いくら喜色が静かに怒りを抑えながらISに静かに問おうと答えない。

「答える篠ノ之束。どうせ聞こえているんだろう?」

「……」

喜色の言葉に返ってきたのは容赦のないレーザーの連射だった。

「そうか。そういう返事か。いいだろう」

喜色の脚が動く。生身の人間がどう足掻いても出すことの出来ない速さでISに向けて走る。狙うは腕の砲身部分か頭のセンサーのどちらか。攻撃手段を封じるか動きを封じるか。

喜色は動きを封じるためにセンサーを潰すことを選んだ。

ガシャンッ！

喜色のとび膝蹴りは綺麗に決まりセンサーは破壊された。

勢いはセンサーを破壊するだけでは殺しきれず喜色はそのままISの後ろ側に着地する。そのことを喜色はしくじったとは思わず好機と考える。

センサーが壊れたISはその場に立ち尽くして動く気配もない。喜色は後ろから蹴り、地面に倒させる。

「さあ、これでもう動けないよな」

ISの背中に乗った喜色は特徴的な長い腕を持つ。

「まったく、いない人を侮辱すんのもいい加減にしろ。こんな不細工なもの作られてよろこぶわけがないだろ」

バギイ！

右腕を力任せに引きちぎる。

バギイ！

左腕も同様に力任せに引きちぎる。一仕事やり遂げたとでも言うようにISに腰掛け汗を拭うような仕草をする。

「よし、これで汚染はちよつとは防げるか。……おい、篠ノ之束。ここの有害物質をなんとかしとけ。早くしないと大好きな千冬ちゃんたちが死ぬぜ」

「……」

「おい答える。しゃべれねーのか？ それとも天才サマは化け物とは話したくないと？」

「……」

「……」

沈黙。ISに腰掛けた喜色の足が小刻みに揺れ始める。

「……」

「……」

「……」

「……なんか言えよ！ 話したくないなら早く自爆させりゃいいだろうが！ ああっ！？ 喋れつつてんだよ！ いつまで私は悪くないですって無言で語ってんじゃねーよ！」

立ち上がりISを八つ当たり蹴り始める。本気で蹴れば速攻で破壊してしまうので手加減はしている。

「答える！ いまも俺は汚染されてるし一夏たちも汚染されてるん

だよ!」

「……わかったよ。有害物質は消しとく」

ISのスピーカーから怯えて、怖ず怖ずとした若い女の声が聞こえる。

「やっと喋ったか。それよりなーんで一夏の名前が出たらすぐ答えたのかなあ? やっぱり化け物とは話したくないと言うことか?」

「ち、ちがつ……」

「ああ、言わなくてもいい。分かってるから。乗り込んだ研究所にいた化け物を庇う無抵抗の女性を殺したのをなんとも思っていないのも分かってるし、化け物と話したくないのも分かってる」

「そ、そんなこと……」

「否定しなくてもいい。全て事実で現実で変えることなんか出来ないんだから。怖かったんだろ? 化け物が。一夏たちにどんな危害を加えるのか怖かったんだろ? 安心しろ。それが普通だ。それが人だ。」

怖かったからこそお前は行動した。コジマ粒子の有害物質が漏れ出す不良品をくつつけてここに来るように命令したんだろ? 唯一コジマ粒子の危険性を知っている俺がどんな行動をするか予測して」

「東さんは、東さんは……」

否定しようとする東の言葉を意図的に無視して喜色はさらに続ける。

「認める。自分の弱さを。臆病さを。言い訳を。過ちを。周囲との違いを。人間なんだから仕方ないと認める。諦める」

「でも、でも、でも……」

スピーカーから聞こえる声はすでに泣き声で何かを言いたそうだが言葉はかたちになっていない。

喜色は声がする場所を踏み抜く。ブツリと音がし、束の音が聞こえなくなる。

「ま、話はこれでお終い。あとは一夏にエネルギー無くしてもらっただけでいいか」

「おい、蒼崎ー！ 無事かー？」

都合よく一夏が警戒しながら近寄っていく。喜色は手を振り無事なことを伝える。

「主人公、ちょうどいいところに。あのシュバーってなるやつでこいつをぶっ刺しちゃって」

「シュバー？」

「ほら、あのバリアーが無くなる理不尽攻撃だよ。……あれ？ シールドあるんだから避難させなくてもよかったのか？ いや、でもシールドすら汚染しそうだし……」

急に考え込む喜色を横に一夏は前に出て雪片式型を展開し、バリアー無効化のために構える。

「『零落白夜』な。間違えないでくれよ」

一夏は零落白夜を発動し、コアがあると思われる胴体の中心に突き立てる。

零落白夜はエネルギーを無効化し、ISのエネルギーは無くなり動かなくなった。

「終わったぜ。ていうか、これ誰が作ったんだろうな？」

「……」

返事をしない喜色を不思議に思い一夏は後ろに振り向く。

「蒼崎？」

「……あ、駄目だ。主人公、これから気絶するからよろしく」

「はい？」

ちょっとコンビニ行ってくるみたいな軽さで言われた一夏は戸惑ってしまう。

喜色の顔をよく見ると目はどこを見ているかも分からず、顔も高熱が出たときのように赤い。一夏が確認できたのはそこまでで、喜色の体からはフツと力が抜け糸が切れたようにその場に倒れ込んだ。

「おい、蒼崎！？ 大丈夫か！？」

「……ん」

喜色の意識が覚醒する。まず見えたのは天井。上半身だけを起こしてあたりを見渡すとカーテンがあり、よく分からないがいるのは保健室だろう。外からは西日が差し込んでいてもう夜が近い。

「起きたか。調子はどうだ」

「あー千冬ちゃん。大丈夫じゃない？」

「熱と足の骨に軽く輝が入っている程度だ。心配することはないだろう」

「どれくらい寝てた？ 第二アリーナに誰か入らせた？」

「寝てたのは6時間程だ。束から電話があって第二アリーナには誰も入らせてない」

「ふーん、興味のある人がいるから、かねえ。ずいぶん対応の違う」と

最後の言葉は呟く程度だったので千冬が聞き返したが何でもないと言を振る。

千冬はため息をつきながら傍にあった丸いすを引き寄せ座る。

「なぜお前は危険を犯してアリーナに侵入した」

「なぜって言われてもねえ。体が勝手に動いたんだし理由を聞かれても返しようがないよ」

「ならばコジマ粒子とはなんだ？　ずいぶん慌てていたらしいが」

千冬は常に喜色の目を見て話す。嘘は見逃さないという構えだ。

「どうせ聞いてたんでしょ？　核物質よりとっても恐ろしいモノだよ。後で束ちゃんに聞けばいいよ」

「そうか。もっと詳しく話して欲しいのだがな。私はまだ仕事がある。お前は元気なようだからさっさと部屋に戻れ」

それだけを言うと千冬は立ち上がり扉に向かう。なにかあったのか扉の前でため息をつくとそのまま扉を開け、出て行った。

「蒼崎！　大丈夫なのか？」

「アンタ足折れてないの？」

「大丈夫だよ。千冬ちゃんに怒られた？」

一夏と鈴音は千冬とすれ違いで保健室に入り、まず喜色に質問する。喜色はにへらと笑う。

「いやすつげえ心配そうな顔で怒られてもな……」

「やっぱりね。そんなことだろうと思った。篠ノ之ちゃんはどこに

いるか知ってる？」

「そこにいるわよ。扉に隠れてるつもりみただけど、隠れてないから」

鈴音は扉を指差す。喜色が指の先を見ると特徴的なポニーテールの一部が見えた。

「う……」

三人の視線に耐えられなくなったのか気まずそうに保健室に入る。喜色は布団から出て両足で立つ。

「あ、蒼崎、ぶ、無事……」

「君らさあ、何なの？ 姉妹揃って僕の邪魔をするの？ 考えなよ。あんな異常で危険な場所に行ってわざわざ敵の気を引くことをするなんて馬鹿なの？ 阿保なの？ 死にたいの？ 死ぬよ？」

箒にかけられる言葉はとてもきつかった。

「蒼崎！ なにを言ってるんだ！」

「主人公はちよつと黙って。常識で考えなよ常識で。もし主人公がやられたとしても他にも専用機を持っている人はたくさんいるんだよ？ 国家代表までいるんだから勝つ必要はないんだよ」

「だ、だかもし一夏がやられたら……」

「それなのにわざわざ、あんな、危険な場所に行く必要はあったの

かな？　もしやられたら？　何のために絶対防御がついてるの？
篠ノ之束の妹なのに知らないの？　妹なのに？」

篠ノ之束の妹。箒にとって鬼門だった。姉のせいで家族はバラバラになり、自分も転校を繰り返さなければならなかった。姉は恨まれて当然、自分は恨んで当然。『妹なのに』という言葉は箒が喜色を掴みかかるには充分な言葉だった。

「あの人と一緒にするな！　あの人のせいで家族はバラバラになったのに！　あの人と私は違う！」

「一緒だよ。そっくりそのまんまだ。感情が高ぶればすぐに泣くか掴みかかる。自分の思い通りにならなければ拗ねる。自分の興味あるもの以外には興味を示さない。ほら、どこが違うって言うのさ」

「違う！」

箒は左手は喜色の服を掴んだまま右手を振りかぶる。これを見た喜色はなぜか笑う。

「ほら、殴りたいなら殴りなよ。なんならIS用の武装で殴ればいい。篠ノ之束と同じようにね。さっすが姉妹、こんな時の行動も一緒だ」

「ッ！」

振りかぶっていた手から力が少しずつ抜け、腕もゆっくりと下ろされる。服を掴んだ手からも力が抜ける。そして保健室から駆け出いった。

「おい、箒！」

「ほつときなよ。主人公だってあそこで出てくるとは思わなかったでしょ。いまここで言つとかないとまた同じことを繰り返すよ」

「……でも放つておけねえよ」

そう言い残し一夏も同じように保健室から駆けだしていった。それを見た鈴音が喜色をうりうりと肘でわき腹のあたりを抉る。

「で、あんたは何者なのよ。ほら、さっさと話しなさいよ」

「蒼崎喜色だけど？」

「そういうことじゃないわよ。なんで生身でISを戦闘不能にできるのよ」

「ああ、化け物だからだよ。それじゃあ僕は部屋に戻るよ。篠ノ之ちゃんに会ったら言いすぎたって言つといて」

そう言つて倒れた後だというのにいつもと同じようにしっかりと足取りで保健室を出ていった。

「…………ハア」

ピッ！

夜の闇に携帯電話の発信音が響く。発信音がして十秒も経たないうちに電話はつながる。

『もすもすひもねす？　ちーちゃん久しぶりだねー！　いきなりどうしたの？　もしかして束さんのところに来たいとか！？　あわわわわ！　散かつちゃってるよー』

「やかましい黙れ」

千冬の一言で電話先の束はぴたりと喋るのをやめる。静かになったのを確認して千冬は話し始める。

「ひとつ聞きたいことがある」

『ちーちゃんが質問？　めずらしーねー。よし、なんでも来なさい

！ 猿にもフェルマーの大定理を理解させられる束さんの頭脳で答えてあげるよ！」

「コジマ粒子とはなんだ」

『……あーそれ聞いちゃうかー。えーとねー、とんでもない出力を発揮する代わりにとんでもない汚染を引き起こすものって考えてくればいいよ。昼にも言ったけどしばらく第二アリーナには誰も入れないでね。汚染しちゃったみたいだから』

「そうか。今度あったら容赦はせん。それと蒼崎喜色は知っているか」

『ッ！？ ……………』

長く黙り始めた束を根気よく千冬は待つ。

束は思う。なぜいきなりその人を知っているかと聞いてくる。思い出すとその時の光景が視界に広がる。匂いを感じる。雰囲気を知する。喉がからからに乾く。手が汗ばむ。背中に汗が噴き出す。音が、声が聞こえる。あの時のあの場所での叫び声。

『……知ってるよ』

話すことにした。親友はこのくらいの嘘は寝ぼけていても見破るだろう。ならば隠すだけ無駄。

『知ってる。今のところだれよりも知ってる』

「なにをした。あいつがお前の名を言う時の目と口調。親の仇でも見るような目だったぞ」

『……うん、親の仇だよ。親の、仇。それに大事なものも奪った』

「そうか。聞きたいことはそれだけだ。いきなりすまなかったな」

千冬が耳から携帯電話を離そうとしたとき束が大きな声を出す。だが、最初だけで後にいくほど小さくなる。

『あ、あの子の！ 学園生活、どうなの……』

「そうだな、特定の仲がいいやつはいないが一夏たちとそれなりに仲は良いみたいだな」

『そうじゃなくて！ さみしそうな顔をしてない？』

「いや、常に笑っているな。本心を覆い隠すようにな」

『……そうか、そうだよな。それじゃあね！ ちーちゃん！』

ブツッ！

唐突に電話は切れた。こんな風にいきなり電話を切るなどはいつものことで、千冬は大して驚きもしなかった。

携帯電話を懷にしまうと明日の授業に向けて準備をはじめ千冬がそこにいた。

7 話目 一瞬の戦闘（後書き）

第ちゃんごめんねええええ！

束さんごめんねええええ！

束さんは挽回の予定があるから勘弁してねええええ！ 許してええええええ！

膝蹴り…… IS 涙目……

これで1巻は終わりの予定。2巻も随分と飛ばし飛ばしになる予定。でも3巻からは結構長くなる予定。

第ちゃんに束さんごめんねええええ！

以下、どうでもいい独り言

steins;gate8bit 体験版やりたいよおお！
でもやったら気になって買わなきゃならなくなるうつ。秋はPS3
が豊作なのにいいいい。

8 話 目 一夏の同級生（前書き）

二巻突入……か。
さあ、頑張ろう

8話目 一夏の同級生

「あんたが一夏が言ってた世界で2人目の男か。俺は五反田弾。よろしくな。こいつの鈍感具合には苦労してるだろ」

「蒼崎喜色だよ。仲良くしてね。うん、モゲロって言いたくなるくらい」

「誰が鈍感なんだよ誰が」

六月、日曜日。

俺はIS学園の外　　というか五反田の家に行った。まえに行くという内容のメールを送ったらもう一人の男も連れて来いって言ってきたので、蒼崎も連れてきた。

2人は会うなりがっしりと手を合わせ俺のほうを見て話す。俺は敏感だぞ？

「もう昼飯は食ったか？　食ってないならうちで食べてけよ」

「お、それじゃあ御馳走になろうかな。蒼崎もいいだろ？」

「そうさせてもらっよ」

五反田の家は食堂をやっている。それはとてもうまいやすいはやいの三要素で中学の時はすごく世話になった。まあ、中学の時は弾と鈴とよくつるんでたつても原因の一つでもあるんだけど。

中に入って隅の席に座る。厨房の奥では弾の祖父で五反田食堂の大將の爺さんが新聞を広げている。弾は最初っから俺たちに昼飯を食

べさせる気だったみたいで机の上には皿が置いてある。

「で、喜色。こいつは何人おとしたよ？」

「少なく見積もっても超がつくレベルを3人は固いね。しかも一人は金髪碧眼のイギリス上流階級のお嬢様」

「マジかよ……。ちくしょうそのスリムフェイスをよこしやがれ！」

「まだ増える可能性は大だね」

「そのハーレム行きの切符をくれよ。片道でもいいから」

2人がなにを言ってるのかさっぱりだ。というか今言った1人つてセシリアのことみたいだけど、なんでセシリアの話がいま？ もしかして弾と知り合いだったたり。

「兄い！ 部屋にいないんならいないって」

厨房のあたりから弾の妹の蘭が出てくる。

「あ、久しぶりだな。邪魔してるよ」

「い、いい、一夏さん！？」

やっぱり女子は家ではラフな格好がいいのかね。ショートパンツにタンクトップという今までの俺なら目をそらす服装だがこの二カ月で鍛えられた俺は前とは違っただよ！

「で、この子も落ちちゃってるわけ？（ボソボソ）」

「ああ、がつつり一目惚れしてやがる。俺の妹で蘭っていうんだ。
(ボソボソ)」

「この様子だと中学のときの同級生も落ちてるでしょ。(ボソボソ)」

「それどころから歳から25歳までバツチリ落としてやがるよ。
(ボソボソ)」

「なんというキラフェイス。(ボソボソ)」

なんか蒼崎と弾が話してるけどわざと俺に聞かせてないみたいで聞こえやしない。除け者は断固反対します。2人に気をとられてたら目の前にいた蘭がいなくなっていた。

「二人でなに話してんだ？俺も入れてくれよ」

「なに？最高の水着は何か！に参加したいの？」

「俺は断然スクール水着だな。一夏はどうだ？」

「こんな所でなに話してるんだよ！」

ちなみに俺はその人にあつたものが最高のものだと思う。

「兄い！なに話してんのよ！あなたもそんな話をしないでください！」

蘭がものすごい剣幕で2人を怒る。蒼崎が反論出来てない。……あ

れ？

「蘭さあ、着替えたの？」

「は、はいっ！」

蘭はいつの間にかラフな姿から出かけるような服に着替えている。
ああ、そうか。蘭もお年頃だもんな。

「デートにでもいくのか？」

「い、いえ、違います！ いつもこんな格好です！」

「よく言っぜ。お前がそんなに気合いいれることなんて数ヶ月にい

」

ガシッ！

蘭の右手が弾の顔を掴む。弾の口が強制的に閉じられる。

「ああ、主人公が来たから可愛くして少しでも目を」

蘭の左手が蒼崎の顔を掴む。蒼崎の口が強制的に閉じられる。男2
人を片腕で持ち上げるなんて生徒会長やってるからできることなの
か？

「……！ ……！ ……！」

「」（コクコクコク！）」

2人に目と口の動きだけで何かを伝える蘭に必死に頷く。ものすごい必死な顔で。弾は許しを願う罪人の顔だった。

「なあ、蘭と蒼崎って知り合いだったのか？」

「違いますよ！ 初対面です！」

だよなあ。でも、初対面の人の会話には見えないんだよなあ。

「じゃあ、なんでそんなに仲いいんだ？」

「よくありません！ それよりこの人は誰なんですか？ 見たことが無い人ですけど……」

「IS学園1年1組所属の蒼崎喜色です。仲良くしてね。希望するなら学園での一夏の様子を教えるよ」

「さすがIS学園の生徒さんです！ これから仲良くしていきましょう！」

待て待て待て。プライバシーと人権は何処にいったんだ。それから蘭も手を組むなよ。

「いつまで話してやがる。食わねえんなら下げちまうぞ」

のそつと厳さんが現れる。あいかわらず筋肉は盛り上がっていて浅黒い腕が特徴的だ。

この拳から繰り出されるげんこつは千冬姉の威力と大差が無い。もう喰らいたくない威力だよな。

合掌して食べだした俺たちを満足げに見ながら厳さんは次の料理に

取り掛かった。

「でよう、一夏。鈴と、ファースト幼馴染に再開したって?」

食事の合間に弾が話を振ってくる。というか蒼崎と飯を食べるのはこれが初めてじゃないか?

「ああ、箒の事が」

「ホウキ? 誰ですか?」

「主人公の幼馴染だよ。ポニーテールに巨乳といううらやましい属性持ち。ちなみに剣道の全国大会優勝者だよ」

「ちなみにもう一人の幼馴染は鈴な」

「ああ、あの」

なぜか箒の話で蘭の持っている箸にひびが入って俯き加減になる。鈴の話になると僅かに表情が硬くなる。名前が似てるから同族嫌悪でもあんのか? でも箒は全然違うよな。

「ああ、蘭ちゃんに報告。今は別の部屋だけど、一ヶ月半、主人公は箒ちゃんと同じ部屋で過ごしてました。ちなみにラッキースケベもあつたよ。例をあげるならシャワー上がりのタオル一枚の箒ちゃんと出くわしたりー」

ガタッ!

蘭が突然立ち上がり、椅子が転がって大きな音をたてる。

「同じ部屋！？ タオル一枚！？」

「ど、どうした？」

「そつだよ落ち着け」

弾に向けて敵さんの恐ろしい視線が向けられる。どこぞの配管工のよつに弾は縮こまる。

相変わらず敵さんは蘭に甘いみたいだ。俺たちが椅子を転がしたらお玉が頭に飛んでくるか包丁が鼻先をかすめる。やべ、思い出したら鳥肌が。

「一ヶ月半同棲してたんですか！？」

「そつだよ。出来るなら男同士の部屋がよかったんだけどな」

ほんと蒼崎と同じだったら精神をすり減らさずに済んだのに。なぜか隣でダラダラという音が聞こえる。弾、なんでそんなに汗を？

「兄い、知ってましたよね？ ゆっくり聞かせてもらいましょうか？」

「……俺、これから喜色と親睦を深めるために遊びに行くんだ」

「では夜に。……決めました」

蘭は弾から目を離し決心したよつにつぶやく。何をでしょうか。

「私、IS学園に入学します」

「え？ は？ ハアッ!？」

ビュッ スッ

弾の耳を包丁が掠めて髪がパリリと落ちる。弾はフリーズする。

「蘭の学校ってエスカレーター式の超有名校じゃなかったか？」

「私の成績なら余裕です」

「あ、IS学園は推薦、ないぞ。ていうか今恐怖で死ぬかと思った」

弾の取り得でもある素早いリスボン。最近よく叩かれるから意外と欲しいスキルだ。

「兄いと違って、私は筆記で余裕です」

「で、でも……そうだあそこ実技あったよな!? な？」

「ん、ああ。そこで適正がないヤツは落とされるらしい」

「ちなみに一人倒したら天然チートの千冬ちゃんが完全武装ででてくるよー」

その試験を元に入学時のランキングがつくられるらしい。というか千冬姉が天然チートって。いや、反対とかじゃなくて逆にしつくりくるな。

「千冬さんが、ISで完全武装？ 勝てっこねえじゃん」

「……」

蘭がなにか紙を取り出して弾に渡す。喜色も一緒に覗き込む。

「げえっ!？」

「IS簡易適性試験……判定A……」

「問題はすでに解決済みです」

おお、かつこいい。一回でいいから言ってみたいよな。

「凄いね。主人公は適性がBだったからよかったね。蘭ちゃん勝ってるよ」

「喜色はどうなんだ？」

あ、それは俺も気になる。蒼崎は自分のことを全く話さないからほとんど知ってることがないし。

「ん？ 僕の適正？ Sらしいよ。あ、このカボチャおいしい」

「え？ S？」

「うん、S。IS生みの親直々の測定だから間違いは無いんじゃないの？」

カボチャをつつきながらどうってことはないみたいに答える。適正

「Sって世界に両手の指で足りるだけしかないんじゃないかなかったか。」

「そ、それですね、私が受かったらいろいろお願いしますね」

「おう、もちろんだ」

仕切りなおすような蘭の言葉に安請け合いでの返事をする。

「絶対、絶対ですからね！」

俺に強く何度も念を押して頷くとニコツと笑い素早く食器をまとめて立ち上がる。

「それでは、これで」

そのまま食器を片づけて蘭は立ち去っていった。
なんで服を着替えてたんだろう。

「そろそろ外いこうぜ。ここにいたら包丁がびゅんびゅん飛んでくるからすげえこわい」

弾の提案に俺たちは同意する。もう皿にあったのはたいらげだし、いつまでもここで話しているってのも包丁が飛んできそうで怖い。

「それで何処行くの？」

「あそこでいいだろ。なあ、一夏？」

「あそこか。いいぜ」

青崎は俺たちの言っているあそこがわからず首をかしげている。まあ、今日で蒼崎の事をもっと知れるだろうな。蒼崎との話の話題が少しでもできるといい。学園じゃ常にどこかに行ってるし。俺は今後の良好な交友関係のために気合を入れるのだった。

翌日の朝、山田先生の口から驚きの言葉が飛び出した。

「今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名！」

「『えええええええっ！？』」

突然の発表にクラス中がざわめく。そりゃあ、転校生がいきなり現れたんだから驚きもざわつきも、腰抜かしたりもするよな。二人も来るんだから。ていうかなんで分散させないの？

教室の扉が静かに開いた。転校生が教室に入ってくる。

「失礼します」

「……」

二人の転校生を見て一瞬で静かになる。

それも当たり前だと思う。
だって二人のうちの一人在男だったんだから。

8話目 一夏の同級生（後書き）

弾がISを動かせてもいいと思う今日この頃。
専用機はあと三話くらいだと思われ。

以下、どうでもいい独り言
宿題終わってないiiiiiiiiiii！ ヘルプミー！
まあ、いいや。夏休みに墓参り以外どこも行かなかったなあ。
ああ、またあの暑い日々が始まるというのか……。

9 話 目 転校生くる！ ふたり！（前書き）

ご都合主義発動！

どんな無茶も可能に！

副作用としてあとにつなげにくくなる！

9 話 目 転校生くる！ ふたり！

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生のシャルルはにこやかに一礼する。

一夏も喜色もクラス全員があっけにとられていた。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」
「」

お人よしそうな顔、中世的な整った顔に濃い金髪を首の後ろで束ねている。体はスマートですつと伸びた足が格好いい。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああ つ！」

クラスを中心を起点として歓喜の叫びは一瞬で伝達する。一夏と喜色は耳をふさいで鼓膜を保護している。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「織斑くんの無自覚系と蒼崎くんの不思議系に続けて！」

「地球に生まれてよかった~~~~！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

仕事で黙れと言ったというよりも、こういう十代女子の反応が鬱陶しく面倒くさそうに千冬がばやく。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから！」

もう一人の転校生は忘れることがきわめて難しい容姿だった。

伸ばしっぱなしの腰のあたりまである白に近い銀髪。左目に医療用などというものではなく軍人が使うような黒い眼帯。開いている右目は赤色。

身長はシャルルより小さいが、気配はまるで軍人だった。

「……」

少女は腕組みをして騒いでいる教室の女子たちをくだらなそうに見ていたが、すぐに逸らし千冬に向けていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。ここでは私は教師でお前は生徒だ」

「了解しました」

短く答えるとラウラは手を体の真横につけ、押しをかかとで合わ

せて背筋を伸ばす。その様子はまるで軍人。どう間違っただとしても軍関係者であることは間違いない。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……………」

クラスは沈黙。クラス全員が続きを待っているが、ラウラは名前のみを口にして黙ってしまう。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

真耶撃沈。泣きそうな顔をしている。
その時、一夏とラウラの目があった。

「貴様が……！」

つかつかと靴を鳴らし一夏に近づく。

「おーい何やろうとしてんのかなー？ 殴るぞコラ？」

ガッ！

ラウラの平手打ちが一夏に当たる瞬間に喜色の足が腕に当たる。
蹴られたラウラの腕は上に跳ね上がる。

一夏は状況が理解できず何度も瞬きをする。

「……………え？」

「貴様、なにをする！」

「それはこっちのセリフでしょうが。初対面の人を殴ろうとしたやつと言葉じゃないよ」

クラスは何が起きているか理解できず一夏、喜色、ラウラの三人を見るだけにしている。真耶はまだ撃沈したままで涙目。唯一千冬だけが頭を押さえている。

そのまま喜色とラウラは数十秒睨みあう。ラウラが一方的に敵意をむき出しにして睨みつけているだけだが。

「くっ！ 織斑一夏。わたしは認めない。貴様があの人弟であるなど、認めるものか」

そう言い来た時と同じように靴を鳴らして一夏の前から立ち去っていく。空いている席に座り、腕を組んで目も閉じる。組まれた腕の指先がラウラの心境を表すかのように忙しく動いていた。

「あー……んっ！ ではHRが終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散」

千冬は手を叩いて行動を促す。一夏はなにがあつたかまだ理解できていないが授業に遅れると鬼の出席簿が落ちてくると、このまま教室にいと女子と一緒に着替えなくてはなくなるので喜色とともに更衣室へ走って向かおうとした。

「おい織斑、蒼崎。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「はい」

「君が織斑くんで、君が蒼崎くん？ はじめまして僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ」

「女子と一緒に着替えたいなら別だけどねー」

千冬は二人にシャルルを任せるとそのまま去っていく。シャルルが自己紹介を始めようとするが一夏は手を取り走り出す。

「男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めになれてくれ」

「まあ、僕みたいに走りながら服を脱げて、あらかじめISスーツを着てるならそれほど急ぐ必要は無いけどね」

「なっ！？ 蒼崎お前……」

一夏が横を見るとそこには制服を脱ぎながら走っている喜色があった。しかもかなり早めに走っている一夏に並走しながら。さらに今は階段を駆け下りている。

「ああ、転校生発見！」

「しかも織斑くんに蒼崎くんと一緒！」

HRが終わり各クラスから生徒がわらわらとあふれ出る。三人は捕まるわけにはいけない。捕まったら最後、遅刻して鬼教師の特別カリキュラムが笑顔で待っているのだから。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

「きゃああっ！ 見て見て！ 手！ 手繋いでる！」

「蒼崎くん制服脱いでるんだけど！？」

「どこどこ！？ ……なんだISスーツ来てるじゃない」

「な、なに？ なんでみんな騒いでるの？」

状況がのみこめず、シャルルが二人に戸惑いながら尋ねる。

「そりゃ男子が俺らだけだからだろ」

「……？」

「いや、いISを動かせる男って、今のところ俺らしかいないんだから」

「あっ！ ああ、うん。そうだね」

そうだったと頷くシャルルをちらりと見ながら一夏たちは走り続ける。

「よッし、到着」

空気が抜ける音がして、扉がスライドして開く。一夏が時計を見ると授業開始五分钟前。時間は切羽詰まっている。

「時間ないな！ すぐに着替えちまおうぜ」

「だからISスーツ先に着とけって言ったのに」

「いや、言っていないからな！」

一夏が制服のボタンを一気に外しＴシャツを脱ぎ捨てた隣で喜色は制服を丁寧に畳みだした。

「わあ！？」

「？」

「……ところでさ、シャルルちゃんって本当に男？」

「え！？ ど、どうしてそう思うの！？」

突然の喜色の言葉にシャルルは戸惑い、一夏は怪訝な顔をする。シャルルの目を見つめて喜色はだつてと続ける。その横で一夏は着替えながらさりげなく耳を傾ける。

「だつて高校生っていう年齢にしては喉仏がないし、声が高い。それに足の出てる位置が男にしてはちょおっと外側すぎる気がするんだ」

「あ、あは、あははは。よく言われるんだ。女っぽいつて。僕は男だよ」

「あれ？ そう？ ごめんごめん嫌なこと聞いた？」

「大丈夫。気にしてないよ」

「そう？ 僕は蒼崎喜色。仲良くしてね。それじゃあ、僕はもう行

ってるよ」

プシュツと音がして扉がスライドして開く。開いた扉から喜色は実習が行われるアリーナに向けて歩きだした。

喜色が出ていったのを見てシャルルは大きく息を吐く。ふと、自分に視線が向けられた気がして後ろを振り向く。

「……」

「うーん……」

一夏がシャルルのちょうど腰辺りをマジマジと見つめていた。

「織斑くん？ どこを見てるの？」

「いや、言われてみると確かに外側に見えないこともない気が……」

「……僕は男だからね」

「おう、了解だ」

シャルルのジト目に気まずそうに一夏は顔を逸らす。

そのままゆっくりと準備をしていた一夏とシャルルに千冬の出席簿が振り下ろされるのはわかりきったことだ。

転校生が転入して数日。

「はー終わった終わった」

一夏は寮の自室に向けて歩く。

白式の所有者の登録書類を書くために職員室へ行っていたのだ。枚数は多かったものの名前を書くのがほとんどだったため、さして時間は必要なかった。

「ただいまー。つて、あれ？」

先に戻っているはずのシャルルが見当たらない。その代わりにシヤワールームから水音が聞こえてくる。

（シヤワー中か。そういえばボディソープが切れたって言ってたな）
クローゼットから予備のボディソープを取り出し洗面所へ入る。
もちろん男同士なので遠慮はしない。

（蒼崎と飯食ったことないんだよな。今から誘ってみるか）

ガチャ

一夏は首を傾げる。シャルルはシヤワーだし、部屋には俺がいる。誰が入ってきたんだ？　とここまで考えて思いつく。

（シャルルが扉を開けたのか）

「あ、ちょうどいい。これ、替えの」

「い、い……、いち、……か？」

「え？」

シャルルが顔を出すと思っていた一夏の前には女子がいた。

金髪碧眼ですらりとした体は足が長い。胸はくくらいだろうか。

一夏は自室のシャワールームにあらわれた全裸の女子から目が離せない。

「きゃあっ！？」

我に返り胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

「ぼ、ボディソープ、お、置いとくから」

「う、うん」

一夏はシャワールームの扉のそばにボディソープを置いて洗面所を出る。

（胸、結構あつたな……）

洗面所から出た一夏が考えるのはいま、シャワールームであったことばかり。しかし考えているとどうしてもそちらに思考がそれる。頭を何度も振って煩惱を振り払おうとする。

ガチャ

精神統一をする一夏には扉を開く音がよく聞こえた。

「あ、あがったよ……」

背中から聞こえた声は紛れもないシャルルのものだった。

「……」

「……」

すでに三十分はこのままだろうか。一夏はいい話の切り出し方を考えるが何一つ思い浮かばない。シャルルもどう切り出せばいいか思いつかない。

コンコンガチャ！

ノックと同時に扉が開けられる。返事をする暇もなく、扉を押さえる暇もなかった。

「一夏ちゃん、シャルルちゃん、親睦を深めるためにご飯食べに行こ……う………よ？」

喜色が飛び込んできた。珍しく一夏を名前で読んでいる。

「……」

「……」

「……えーと、失礼しましたー。ごゆっくり」

ガチャ

一夏とシャルルは突然の出来事に思考停止。喜色は静かにフェードアウトしていった。

そして二人の耳に喜色の話し声が聞こえてくる。

『ねえねえ、織斑一夏の部屋ってどこだったけ？』

『いきなりどうしたの？』

『寝ぼけてるー？』

『織斑くんの部屋ならいま蒼崎くんが出てきた部屋だよ』

『そこだよそこ』

『なにかあったの？』

『みんな、大変だよ！一夏ちゃんが部屋でおん』

一夏は素早く行動する。シャルルは女の子だった。性別を隠してIS学園に入学するということは、なにか理由があるのだろうと考えて。今ここでシャルルが女の子ということがばれたらその理由が聞けなくなる。

扉を蹴破り廊下に飛び出る。喜色は扉の目の前にいた。口を塞ぎ、部屋に引きずり込む。扉に鍵をかけておくのも忘れはしない。

「……
「なのことにゃんにゃんしてるー！」」

「ふう、危なかったな。男装してたのがばれると拙いんだろ？」

「うん……」

「あれ？ シャルルちゃんじゃないか」

「うん……」

「なぜか主人公の部屋にワープしたみたいだけどみんなに話してるね！ 女の子といちゃいちゃしてるって！」

「ちょ、ま、待て！」

また廊下へ出ようとする喜色を一夏は羽交い締めで引きとめる。

「……僕はね、愛人の子どもなんだ」

「は？」

「え？」

シャルルは突然自分の過去を語り出す。一夏は無意識に腕の力を緩め聞くことに意識を集中する。喜色はやれやれと首を振りながら床に座り話を聞く体制をとる。

「それもデュノア社社長のね。二年前にお母さんがなくなったときに引き取られたんだ。それでES適正値が高くて非公式にだけテストパロットをやることになったんだ」

思い出したくないことを話すシャルルの顔は何かを我慢しているようにも見え、一夏と喜色も無駄に口を開くこともしない。

「父に会ったのは二回だけ。話すことは何回かあったけど。いつもは別邸で暮らしてたんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは驚いたなあ。本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って殴られたんだよ。母さんも言ってくれてたらあそこまで驚くことは無かったんだろうけどね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルの声は乾いていて笑っていない。

一夏はどこからか怒りが湧いてくる。それをこらえるために渾身の力で拳を握りしめた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「ああ、そういうこと。なるほどね」

「え？ どういうことだ？ デュノア社はISシェアの第三位だろ？ それに蒼崎は何が分かったんだよ」

一人納得する喜色に一夏は首をかしげる。

「じゃあ主人公は企業がISの開発にかかる費用をすべて自社で賄えると思ってるの？」

「え？ 賄えないのか？」

「無理に決まってるじゃん。一機開発するのに億単位の金が動き回るのに国からの支援が無いと何もできないんだよ。それで、まあ面倒くさいところは省略するけどフランスにとって第三世代IS開発は何より大事なことなんだ。まあ、国防っていう建前があるけど金

が無い国は最初の開発段階で有利な位置に立たないと、それはもう目も当てられないことになるんだ」

フランスは欧州の総合防衛計画『イグニッションプラン』から除名されている。そして、いま欧州では第三次イグニッションプランの次期主力機の選定中だ。

トライアルに参加しているのはイギリス、ドイツ、イタリアのみで実用化の点ではイギリスが一步リードしているが、まだ完成には程遠い。

そのためにイギリスからはブルー・ティアーズがドイツからはシユヴァルツ・レゲンが実稼働データをとるためにIS学園へと送られてきた。

「それで、デユノア社も第三世代を開発していたんだけど、データも時間も全くなって形にならなかったんだ。追い打ちをかけるみたいに政府から予算を大幅にカットされて次のトライアルで選ばれなかったら援助を全てカット。さらにIS開発許可も剥奪するって通達が来たんだよ」

「なんとなく事情はわかったけどどうして男装ってことになるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに」

シャルルは二人から視線を逸らして、吐き捨てるように続ける。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能な使用期待と本人のデータをとれるだろう……ってことだよ」

「それは」

「そうだよ、白式のデータと盗んで来いって言われてるんだ。でも一夏と蒼崎くんにもばれちゃったから僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は潰れるか他企業の傘下に入るだろうね。僕には関係ないことだけどね」

諦めた顔で言い切るシャルルを一夏と喜色は見ていた。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと嘘をついてごめん」

深々と頭を下げるシャルルの肩は小さく小刻みに揺れていた。これからの自分の処遇についてか、一夏たちに幻滅してほしくないという気持ちのせいかな、このように謝って済まそうとしている自分が嫌になっているのか、それはシャルルにしか分からないが、喜色は肩の揺れを見るなり一夏に声をかけていた。

「一夏、僕の部屋からノートPC取ってきて。すぐ見つかるから」

「いきなりどうしたんだよ。自分で取りに行けば……」

「いいから!」

追い出すようにして一夏にPCを取りに行かせた喜色はシャルルに話しかける。

「……急にどうしたの? 一夏を部屋から追い出したりして。僕に何かする気なの? いいよ、別に何しても。もう、面倒だしね」

「それでいいの?」

「は……?」

気の抜けた声を上げるシャルルに再度問いかける。

「本当に、それで、いいのか?」

「よくないけどどうしようもないんだよ。もう面倒なんだ」

「……もう一度だけ聞いておこうか。妾の子どもって馬鹿にされて、他人みたいな父親に利用されて、男装してIS学園に来てもすぐばれて、牢屋にはいる。そんな人生で本当にいいの?」

「……」

「……」

「いいわけないよ……」

顔を上げたシャルルの顔は真っ赤になり目には今にもこぼれそうな量の涙をためていた。

「それならどうしてそのまま流れに身をまかせようとするの?」

「じゃあどうすればいいの? 僕には権力も、身分もお金も何もないんだよ。どうにかできるならどうにかしたいよ!」

「ならどうにかすればいい!」

大きな声が聞こえ、シャルルが振り向くと扉の前に一夏がいた。

一夏はほとんどを聞いていた。喜色の部屋は一夏の部屋から往復しても三十秒もかからない。

ほとんどを聞いて、シャルルを自分と重ね合わせた一夏は感情を露わにする。

「親が子どもになにをしいいなんてことがあつてたまるか！人の生き方を親が邪魔をする権利なんかあるわけがない！白式の機体データや俺のデータなんかシャルルがどうにかなるならいくらでもくれてやる！友達の1人も救えずに男をやってられるか！」

感情があふれだす。止めることが出来ず思ったことをそのまま口にしてしまう。

「それに！特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない！本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする！」

口を乗っ取られたみたいにすらすうと言葉が出てくる。これは使える。この言葉で一夏の頭は急に冷えてくる。

「この学園にいれば三年間は大丈夫だ、それだけあれば方法なんかいくらでも見つけられる！」

「一夏……すごいね。国を相手にするっていうことだよ？」

「いくらでもかかってこい！全部跳ねのけてやる。それに、仲間だっているんだ」

「ふふ、頼もしいね。それじゃあ、少しだけ厄介をかけるね」

シャルルが軽く笑う。表情はまだ少し硬いがぱっと見て気付くようなものではなく、明るい笑顔だった。

「それで、主人公？　ぼくのノートPCは？」

「ああ、これだろ？　だけどこれがどうしたんだ？」

喜色はノートPCを一夏から受け取り電源を入れる。いきなりの喜色の行動を読めず一夏とシャルルの顔の眉間には何本かしわが入る。

「ちよつと人を一人社会的に潰そうと思って。それとフランスの大企業のトップを取り替えようと」

「そんなことができるのか？」

「出来るからやろうとしてるんだよ。まずはどうやって陥れようかな」

喜色は軽快にキーボードを叩く。十秒もしないうちにディスプレイを二人によく見えるように向ける。

「これって……」

「そ、最近流行りのマフィアとの繋がり。もちろん裏では物凄く黒いことをやってた事にするよ」

「でもこれくらいじゃ足りないんじゃないか？」

さらにキーボードを叩く。

「それなら児童ポルノの製造、所持もお付けします！ シャルルちゃんの父親のPCにはその類のものを突っ込んでおくよ？」

声高らかに話す喜色はいいのかという確認のためにシャルルの顔を見る。

「あ、あはは……」

シャルルは苦笑いをしていたが止める気はなく目はもつとやれと語っていた。

喜色はマスコミ向けと政府向けの二つに分けて捏造した証拠を送りつける。さらに手持ちのハッキングツールの中で一番強力で凶悪なものを起動。デユノア社社長のPCに『お子様は見ちゃ駄目よ』なファイルをいれまくる。

「さてさて、あとはISの開発許可を譲渡させなくちゃね」

「え、そんなこともするのか？」

「当たり前だよ。そうしないとシャルルちゃんがISを持てなくなるよ？ 拡張装備も届かなくなるし、コアの行方は何処だって大騒ぎになるよ」

「そ、そうなのか」

「んーどこがいいかなあ……潰れそうなところはダメだし大きすぎるところもダメだし結果が出せそうにないところもダメだし……」

適任な会社が見つからず空いている指で床を叩くがいい案が出てくるわけでもなく、決めることができず時間がたっていく。一夏とシャルルはにこやかに談笑。役に立たない。

ピロンツ！

PCがメールの着信を知らせる。

「ん？ 誰？ ……げっ！」

「どうした？」

「メールみたいけどなんでそんな声を出すの？」

着信音に気付き一夏とシャルルがPCを覗き込む。ちょうどいいと呟きシャルルに場所を明け渡す。

PCのメールを見て戸惑いの声を出す。

「ねえ、これって……」

「シャルル、読んでくれよ」

「うん……」。

『やつほーみんなの アイドル束さんだよー。きいくん随分困っているみたいだねえ！ 優しい束さんが助けてあげるよ！ 束さんはデユノア社の傘下中でのトップの会社がいいと思うな。束さんが言うんだから間違いないよ！』

いまきいくんはデユノア社の開発許可を譲渡させようとしてるんだよね？ 天才の束さんにはお見通しなのだよ（ズビシィッ！）

その会社に開発許可を譲渡させたら添付ファイルを送るといいよ！
束さんが考えた最強の第三世代機の設計図があるんだけどそれを
その会社に束さんからってことで送っちゃて！ あの会社の人は普
通より上の頭を持つてるからすぐに第三世代が作れると思うよ。そ
れに私が設計したISなんだから性能は余裕で現行のISをぶっち
ぎるよ！ それじゃあまた今度、具体的には海で会おうね！

P.S.

きいくんの専用機はもう少ししたらできるみたいだからもうちょ
っとがまんしてねー

by みんなの アイドル束さんより（キラッ

」

だって……」

長い。無駄に長い。非常に長い。

喜色の額には青筋がいくつも浮かぶ。顔の筋肉は引きつり目元が
ぴくぴくと動く。

「その会社つてのはキサラギって名前みたいだな。なんで日本語？」

「知るか。あいつの言うとおりにするのは癪だけど……いい手が無
かったし仕方ないかな」

キーボードを叩きデュノア社のIS開発許可をキサラギ社に譲渡
したという証拠を捏造する。デュノア、キサラギ、政府。三つの捏
造が終わるなり喜色はその場限りのメールアドレスをつくりファイ
ルを添付し、短文とともに送る。このメールはデュノア社社長の
スキャンダルとなる。

これでシャルルのもつISのコアはキサラギ社の物となる。シャ
ルルもデュノア社のテストパイロットではなく、キサラギ社のテス
トパイロットになった。

「はい、終わり。シャルルちゃんはキサラギ社のテストパイロットになりましたー。しばらくしたらそのISは第三世代になるかもね」

パタンとノートPCを閉じながら話す喜色の顔は何故か心の底から安堵したという表情で、一夏とシャルルはそろって首を傾けていた。

「さて、そろそろ飯食べに行こうぜ。蒼崎も誘いに来てくれたんだろ？」

「そうだけでもっと楽しそうなおことがあったから頭から吹っ飛んだ」

「それじゃあ僕は後から行く」

コンコン

ビクビクビクッ！

「一夏さん、いらっしやいます？ 夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

三人が揃って体が跳ね上がる。

「一夏さん？ 入りますわよ？」

今のシャルルを見られるのはとてもまずい。今のシャルルを見ればどんなに鈍感で鈍い人でも女だと分かるだろう。

「あ、どうするの?」

「どうすればいいの?」

「とりあえず隠れば……」

「まった! 居留守でやり過ごせば……」

「そ、それで行こう!」

なにか対応策を考えればいいのに三人が息を殺して扉を見つめる。ノブに手をかける音がする。鍵をかけたかどうか分からず出来るのはただ願うだけ。

その手がかけられたノブがゆっくりとまわされる。

ガチャ……ガツ!

「あら? 居られないのかしら。もう食堂へ行かれていますの? まさか、あのお二人が一緒に……こうしてはいられませんわ!」

どこかへ駆け去る足音が聞こえ三人は止めていた息を緊張とともに吐き出す。

鍵が掛かっていなければどんな恐ろしい事になっていたかと声には出さず思う。

「あゝー緊張したー」

「箒じゃなくて良かった。あいつだったら鍵を壊して入ってくるぞ」

「……まって！ 篠ノ之さんの話し声が聞こえる」

扉に耳を当て外の音を確認していたシャルルが喜色と一夏に同じように耳を扉に当てるようジェスチャーでしめす。

「……かさん……は……堂……にはいま……」

「いや………見当た……」

「……では………屋に？」

声の主は歩いているのだろうか声が徐々に鮮明に聞こえてくる。

「……あ、そうだろう………刀で扉を………」

「……大丈夫………られるの……」

足音は部屋の前で止まる。外でシユランという綺麗な音がしてドアノブに切れ目が入る。鍵が破壊されたとしか考えられない。

「一夏！ なぜ居留守を使うんだ！」

「一夏さん！ なぜ出てくれなかったのです？」

一難去ってまた一難。布団に潜り込んで誤魔化そうとするシャルルの横で一夏は必死に言い訳をする。
今日も織斑一夏の部屋は騒がしい。

私の居場所は常に闇だ。

いつ頃から闇にいるのかなんてもうすでに覚えていないがどうせ生まれたときから闇にいるのだろう。人は光の中でしか生きられないと言われている。それは間違いだ。私の居場所は常に闇。闇で育ち影で生まれた。それは過去も現在もこれから変わることは無いのだろう。

私の名前はラウラ・ボーデヴィツヒだ。だがそんなことはどうでもいい。名前など識別番号だ。固体番号だ。ただの文字の羅列だ。なんの意味もない。世間では名前は大切といわれるが私にはなんの意味もない。

ただ織斑千冬に呼ばれるときは心が高揚する。血が沸き立つ。肉が騒ぐ。あの人の存在と強さが目標で自分の存在理由。

一目見たときからその姿のありように心が見とれた。私はこうなりたいと常に思うようになり、目が覚めている時も夢でも思うようになった。

自分が重ね合わせたただ一人の人物の名前を汚すやつが許せない。織斑一夏を排除する。IS学園に来た目的の一つ。絶対に遂行してみせる。

あの私の腕を足で止めた男。 あいつは何かを隠している。 あいつはどこかおかしい。 ただの男にこの拳を遮られるほど軟弱ではない。 織斑一夏とそれなりに親しいようだが邪魔をするなら排除する。 絶対に遂行してみせる。

9 話目 転校生くる！ ふたり！（後書き）

遅くなりましたあああ！ 学期初めは忙しくて……。テストとかテストとかテストとか。でもストックが一つ出来たよ！

物凄く読みにくいですね。精進します。

どこか矛盾があつたら指摘をお願いします。

以下、どうでもいい独り言

steins gate フェイクエンドキター！ もう一回原作を最初からやろう。

さて、専用機の名前は何にしよう。誰か格好いい厨二溢れる案を出してくれないかなあ（チラッチラッでもしっくりこなかったらどうしよう。そのときは僕が厨二溢れるようで溢れない名前にしよう。

タイガー＆バニー一週遅れだけど面白くなってきた。マーベリックのいぼになにか仕掛けがあればいいのに。

10 話目 転校生は過激（前書き）

やはー矛盾しまくってる気がするぜ！
ああ！ 見捨ててブラウザバックしないで！

10話目 転校生は過激

「あー面倒くさい。トイレが三つしかないなんてどこの女子校？」

喜色は廊下をゆっくりでも速くもないスピードで歩く。次の授業が千冬ならば教室からトイレまで行き帰り全力疾走をしなければならぬが次は真耶の授業。焦る必要はない。

（というか専用機はいつ来るの？ いい加減待ちくたびれたよ）

いつも考えることはたわいもないどうでもいい話で、今日はいつ来るかもわからない専用機のことのようだ。

なぜ束が自分に専用機が与えられることを知っていたのかが若干気になるが、どうせハッキングでもしたのだろう。今現在束の前にセキュリティーなど水に濡れたティッシューパーよりも脆い。気にすることはないと喜色は一つ欠伸をする。

「なぜこのようなところで教師など！」

「やれやれ……」

角を曲がろうとすると聞き覚えのある声が二つ聞こえてくる。出歯亀根性いっぱいに角からそうつと覗き見る。

見てはいけないという理性とこんなところで話してるんだから聞いてくれることだと囁きかける欲望の戦いは一瞬でついた。

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

覗き見た視線の先にはラウラ・ボーデヴィツヒが織斑千冬にむけて懇願していた。

今聞いた限りでは千冬の現在の仕事について不満や思いの丈をぶつけているようだ。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の人間など共感が教えるに足る人間ではありませんせん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど」

「そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」

ラウラの言葉を遮って千冬が出した声は冷たくラウラは言葉が出せない。

千冬は腕を組む。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

声が震える。目の前にいる人物との力の差を知っているのと、自分が尊敬し、憧れている人に嫌われたくない。二つの恐怖。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……………」

千冬は声色を元に戻しラウラをせかす。一言も喋らず早足にラウラは去っていく。

千冬は超人的な身体能力を持っている。すぐそこに隠れている人の気配など簡単にわかってしまう。

「その男子。盗み聞きか？ 随分と面白い性癖だな」

「千冬ちゃん、盗み聞きじゃないよ盗み見てたんだよ！」

「……はあ。お前に先生と呼べと言うのは諦めた。ほら、さっさと戻れ。遅刻するぞ」

「次は千冬ちゃんがいらないから遅刻しても大丈夫なんだよ」

バシン！

「次の授業に私も行きたくなくなってきたな」

「わかったよー走るから叩かないで」

喜色は走りだそうと足に力を入れる。

「ああ、蒼崎」

「ん？」

「フランスのデュノア社の社長が逮捕されてIS開発許可がキサラギ社に移っていたんだが、何か知らんか？」

「知らないなあ。知らないよ。知ってるわけがないよ。デュノア社社長のパソコンに違法なファイルをつっこむことなんてこれっぽっちもしてないよ！」

白々しい態度で公にされていない逮捕理由をペラペラと話す喜色はワザと話しているのか、それとも本当に知らないと言っているのか。

千冬はさっさと行けというように手を追い払うように振る。

「放課後に私のところに来い。ほら遅れるぞ」

千冬は用は済んだと背を向けて歩き出す。それを見て喜色はゆっくりと歩き出す。

当然授業には遅刻。

そんな自分の授業は受けたくないのかと涙目になった真耶を目にしながら喜色は授業を受けるのだった。

「それでデュノア社になにをやった？ 向こうでは社長はロリータコンプレックスだペドフィリアだと根も葉もない噂が流れているらしい。警察もあそこまで証拠が揃っていては見逃しようがないと異例のスピード逮捕らしいぞ」

「ざまあ。僕は権力をもった調子にのった人間が大嫌いなんだ。その証拠をバラした人はもつとやってほしいよね」

一つの部屋の中で二人は話す。中には苦虫を噛み潰したような顔の千冬とは対照的にニコニコと笑っている喜色が向かい合って座っている。

「ここは盗聴対策は万全で校長と理事長からの命令でここには人は近づけないようにしている。ほら、起承転結、事実を詳細かつ簡潔に述べる」

「しかたないなあ、ここから話すことは誰にも言ったら駄目だよ？」

「ああ」

小さくうなずく千冬を見て何から話したのかと考え始める。

「シャルルちゃんが女の子でここに居れるようにデュノア社社長を社会的に殺すことにしたんだ。以上、終わり」

「待て。デュノアが女だからといってなぜデュノア社社長を社会的に殺すことになる」

喜色の説明は確かに簡潔だ。過程をぶっ飛ばして結論だけを述べている。だが、簡潔に言っただけで詳細に述べろという部分をこれっぽっちも満たしていない。これだけの説明でわかるのは一を聞いて百を知るような天才にしか理解できないだろう。

というか普通の人間が理解出来るわけがない。出来るのならばその人は天才だろう。

「え？ わかんない？」

「わかるか。わかってたまるか。私はどこそのウサミミ女ではない」

「……まったくしょうがないなあ。主人公がここに居させたいって言っただけもあるけど本人がここに居たいっていったからだよ」

「ああ、そういうことか。デュノアをここに留まらせるにはISがないといけない。だがデュノアの枷となっている一夏とお前のデータを盗むのを止めさせるため、元凶のデュノア社社長を潰して開発許可をキサラギ社に譲渡させた？」

「そういうこと。で、あのウサミミはどうにかならない？」

「無理だ」

「無理だよねえ」

「「はあ……」」

2人そろってため息を深々とつく。
喜色がところどころで話題を変える。

「あのウサミミの考えることが全くわからないんだけど。なんか第三世代の設計図を送ってきたんだけど。ぱっと見たけど現行ISの性能を余裕でぶっちぎるほどだったんだけど」

「あのウサミミ……！　また余計なことを！　第三世代のトライアルが始まったばかりだというのに、百式に続いて！」

「まあ、天才の考えることを凡人が理解しようとするのが無理なことでよね」

「は、笑わせる。ISの参考書を一週間足らずですべて覚え、教師に参ったと言わせるお前が凡人？　腹がよじれるからやめてくれ」

鼻で笑われた喜色は傷ついたと肩を竦め、目元を拭う振りをする。

「それで何故かウサミミが僕の専用機がもう少しで届くって言うってたけど、まさか一、二枚噛んでないよね？」

「いや、聞いたことはないが」

「織斑先生！　転校生が！」

扉が大きな音を発てて開かれポニーテールが部屋に飛び込んでくる。

「篠ノ之、この部屋がある意味がわかっているのか？」

「すみません……。そんなことより！　ラウラ・ボーデヴィツヒが、セシリアと鈴を……それに一夏が……」

部屋に飛び込んできた筈は反省したように謝るがなぜ部屋に飛び込んだのかを思い出す。

ガタツ！

「……何かあったようだな。蒼崎、ついてこい。何かあったらお前も動けよ」

「え、ちょ、僕も？　というか説明プリーズ」

「いつまでもノロノロするな」

一夏の名前が出ると即座に千冬は立ち上がって喜色の首を引っ張る。喜色は抵抗する事も出来ず連れ去られていった。

「おおおおおっ！」

セシリアと鈴をいたぶるラウラの口元が愉快そうに口を歪めるのを見たとき、俺の中で何かが切れた。

白式を展開すると同時に雪片二型を使い零落白夜を発動、勢いを付けてアリーナを取り囲むバリアを斬りつける。

零落白夜はバリアを軽々と斬り裂き、バリアに出来た隙間をすり

抜ける。

零落白夜を発動したまま瞬時加速を行う。二つの同時使用はエネルギー消費が半端じゃなく、シールドエネルギーがガリガリと削られると千冬姉や蒼崎も同じように言っていたけれど今は悠長そんなことをしている場合じゃない。

「その手を……離せ！」

「ふん、絵にかいたような馬鹿だな」

振り下ろした雪片が突然動かすことが出来なくなる。なんで、どうやって、完全に死角からの攻撃だったのになんで反応出来た？

『ISはハイパーセンサーのおかげで360°を見渡せるから死角なんてないんだよ。だからいつもと同じ感覚で戦ってたらすぐに死角にまわりこまれるよ』

蒼崎の言葉を思い出す。そうか、こいつの言動を見ていると軍人みたいだし、蒼崎もそんなことを言っていた。それならば死角から繰り出した攻撃に反応したのも当然だろう。

「なんだこれ！ 体が急に！」

俺は宙に固定されたように指の一本さえも動かすことが出来なくなる。眼帯で隠れている右目が俺を見つめているように錯覚する。シールドエネルギーの斬量も少なくなってきたのか、零落白夜のエネルギー刃が消失していく。

「見え透いた攻撃、戦場で敵を目の前にしての混乱……敵ではないな。消えろ」

肩に装備されている大型のカノン砲が回転し、砲口を俺に向ける。

ラウラは軍人だ。殺すことなど躊躇はしないだろう。くそ！

「一夏っ、離れて！」

俺の背後からシャルルがアサルトライフルを2丁構え、銃身をラウラに向けて引き金を引く。

「む……雑魚が。鬱陶しい」

俺を見つめていた右目が逸らされ、体がいきなり動けるようになる。

おそらくシャルルが時間稼ぎをしてくれるだろうから俺はラウラの傍に倒れているセシリアと鈴を抱きかかえる。

すぐそばではシャルルがラウラをうまく俺たちから引き離している。

（瞬時加速で一気に離脱する！）

エネルギー残量を見ると瞬時加速が一回行えるかどうかの量だった。

後のことは後で考えればいい！今はラウラから距離を取るのが最優先だ。

背中にあるスラスタがエネルギーが取りこんで圧縮し、一気に放出する。爆発的な加速力を持って世界が歪み、ラウラの傍から離脱する。

「一夏、二人は！？」

「う……一夏……？」

「無様な姿を……お見せしてしまいました……」

「喋らなくていい。大丈夫だ、意識はある。今すぐ死ぬようなことは無い」

セシリアと鈴を抱えた俺を援護しながら喋るシャルルの手にあるアサルトライフルの銃身は休むことなく弾丸を吐き出し続ける。その弾丸をラウラは避けて、防いで俺に使った動きを止める力で凌いでいたが攻勢に出ようと身をかがめる。

「面白い。その男と一緒に潰してやろう」

瞬時加速を行うようだ。このままじゃ二人を守ることとはできない。二人を床に寝かせ、カウンターを狙おうと雪片を身体に隠すように構える。

「行くぞ！」

「ちくしょう！ 急ぎ過ぎなんだよ！」

ラウラのISのスラスターがエネルギーを放出しようとし、俺は一瞬で近づいてくるであろうラウラに向けて雪片を横に薙ごうとしたそのとき俺の前とラウラの前に影が割り込んできた。

ギンッ！

金属のぶつかり合う耳に不快な音を出してラウラは加速を中断させられ、俺が薙いだ雪片も途中で止められた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れるんだ」

「千冬姉!？」

「やあ、フラスコベビー。元気? って元気すぎるくらいか。しかし軍人が力をふるう場所を間違えるとはね。千冬ちゃんがそう教えたの? だとしたら千冬ちゃん lowest の教官ってことになるよね。それでも獣じゃなくてひとなんだから言葉で解決しようとは思わないの?」

「貴様、何故私の生まれを……!」

その二つの影はISを装備しておらず、ISスーツも来ていない。だけど、千冬姉の手には170センチメートルはあるつかというIS用近接ブレードで、蒼崎は右手に持った甲龍の落ちていた双天月牙でラウラの手刀を受け止め、ブルーティアーズのインターセプターを左手に握りいつでも投げられるよう構えてる。

二人ともが普通、生身では持つことさえできない武装を軽々と振りまわしている。千冬姉は超人じみているからまだ分かるけど、蒼崎はちよつと信じられない。

「模擬戦をやるのは勝手にしろ。だが、アリーナのバリアを破壊するのは無視できん。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらう」

「教官がそう仰るなら」

「あ、さすが軍人、冷静になるのが早いね」

ラウラは素直に頷きISを解除する。アーマーが粒子になりはじけて消える。蒼崎も構えていた武器をおろすが手放したりはしない。

不意を突いてくるって考えてるのか？

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな」

「あ、ああ」

確認を取るのではなく既に決まったことの確認。つい生返事で返してしまう。

「教師にはハイと答えろ」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

俺は蛇に睨まれた蛙のように縮こまってしまう。仕方ないじゃないか、有無を言わせないというか嫌といったら強制的にうんと言わせる目で見えてくるのだから。

千冬姉はアリーナを見渡し大きく声を張る。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

強く叩いた千冬姉の手からは銃声のような音が聞こえ、アリーナに響き渡った。

10 話目 転校生は過激（後書き）

最近やっとラウラの良さが分かってきたような気がしないでもないです。

さて、うちの主人公は何者なのかなあ……。

次はもう少し早く投稿できるはず。というか、こんな感じで話を進めていいのか疑問に思う今日この頃。

以下、どうでもいい独り言

steins;gate が楽しみすぎる。早く一週間がたたないかなあ。

カラオケにこの前強制連行されたでござるの巻。

みんなが知ってそうにない曲ばかり歌ってたらみんな知っていたでございます。

ちくせう。なぜ強制連行されたのに一本調子と言われなければならなかったでございますかああああ！

シメでスカイクラッドの観測者歌ってやったぜ

11 話目 専用機（前書き）

やつはー専用機だぜい

詳しくは描写してないのでみなさんの妄想力で補完してください。
みんなの想像力が試される！

11 話目 専用機

織斑先生と専用機のことを話した後、ボーデヴィツヒさんにやられていた2人が気になって保健室の扉を開けた僕の目に映ったのは、喜色に体をつつかれて悶絶するセシリアと鈴の二人だった。

「……なにしてるのさ」

「あ、シャルルちゃん。今ISのダメージレベルがこなのに学年別試合に出ようとする二人を懲らしめてるの」

そう言ってまた二人の体ツンツンとつつき始める。セシリアと鈴が本当に痛がってるんだけど大丈夫かな。

「あ、蒼崎い……あんだ、治ったら見てなさいよ……ヒグツ!？」

「あ、蒼崎さん……あなた、楽しんでませんか……ヒイ!？」

「楽しんでいる? そんなことないよ。君たちを引き留めようとする口実で二人をつついてその反応を楽しんでいるなんてことは無いからね!」

「蒼崎、自白してる自白してる」

一夏の忠告に大きな動きと共にしまったと喜色はいう。
楽しそうだなあ。

「とうかなんでラウラと戦ったんだ？　いつもの二人なら無視し
 そうなのに」

「それは……」

「イロイロあるのですわ。そう、イロイロ」

ひん

「どうせボーデヴィツヒちゃんに主人公を馬鹿にされたんでしょ？
具体的には種馬って」

喜色は二人の耳元で話していたから最後あたりは聞こえなかったけど、それなら納得だね。

二人とも顔を真っ赤にしてるから図星みたいだし。

「ああ、そつか。一夏格好いいもんね。二人とも一夏がすむぐつ！」

「つっ！」

.....

二人に口を一瞬で塞がれた。　　というかそんなに痛いならじっとしていなさいけないのに。　　本人には知られたくないみたい。

！-下下下下下

「ん？　なんだこの音」

「なんか福袋を買いに走る四、五十のおばさんたちの走る音みたいな……」

「喜色、それはないよ」

遠くから聞こえる音に僕たちは顔を見合わせる。

ガラッ！

「織斑くん！」

「蒼崎くん！」

「デュノアくん！」

『私と学年別試合のペアを組んで！』

「……………」

「……………」

扉を開けたのはこの学園にいる女の子たちだった。でも、二年生や三年生はいなくて一年生だけがいる。

そっか学年別試合はペアなんだ。この間に襲撃があったからなのかな？ もし同じようなことがあったら一人だと危険だから二人組になったのかな。

「えーと、悪いなみんな！ 俺はシャルルとペアを組むんだ、蒼崎か他の人をあたってくれ！」

「えーもう組んじゃってるのかー」

「残念だよー」

「男同士……」
「ジュルリ……」

最後あたりの人はなにを考えてるの！？ 僕は男装してるけど女だからね。

ふと思い出して喜色の方をしてみる。

「……………」

ジリッジリッ

いつの間にか僕たちの近くからは遠く離れた窓際にジリジリと追いつめられてる……。さっきからチラチラ僕を見てるけどゴメン、無理。あそこに飛び込む勇気はないよ。

「さあ」

「蒼崎くん」

「私と」

「ペアを」

「組んで！」

「なんでホラー！？ 助けて主人公！」

あそこに飛び込むなら織斑先生の出席簿を受けた方がいいかも。
僕が首を横に振ると喜色の顔には汗が滴り落ちる。

「ぐ……………」

『ぐっ？』

「…… Good Luck!」

『あ、待てー!』

後ろの窓を開け喜色は外に飛び出す。ていうかいまの英語の発音
すごくよくなかった？

「ふはははは！ いつまでも俺を主人公としか言わない罰だ！
…ゴメンナサイ」

僕とセシリアと鈴のジト目に耐えきれなくなったのかすぐに謝っ
てくる。謝るなら言わなきゃいいのに。

……でも、こういう騒がしいのもなんかいいよね。後ろも騒がし
くしてるし。

「織斑先生……」

「ん？ どうした天才からISが届いたような顔をして」

いつもと同じように決まり切った時間にデスクワークをしている

と山田先生が困惑というか迷っているというか判断がつかないと言った顔をして私に声をかけてくる。

「いえ、天才からではないんですけど蒼崎くんのISを持ってきたという人が……」

蒼崎のIS？ ああ、近々来るとか言っていたな。蒼崎の話聞く限りあのウサミミが関わっているようだし万全の体勢でいないと何が起こるか分からん。

「わかった。私がいこう」

「え、えっと、お氣をつけて！」

何故山田先生は戦場に行く人を見送る顔をするのだろうか。

「お待たせしました。IS学園教師の織斑千冬です」

「待つなんてとんでもないです。モンドグロッソ優勝者を間近に見ることができて光栄です。機会があればぜひその身体を調べさせてほしいものです」

山田先生が言っていたのはこの事か。いやらしい目つきでは無く研究者の目で見てくるやつは久しぶりだな。

防諜対策の取られた部屋にいたのは見た目は私と同年代であろう男だった。

「ははは、それは勘弁したいものです。それで今日来られたのは蒼崎喜色の専用機の搬入と聞きましたか」

「ええ！　我が社の全てを使い、篠ノ之博士からのいまだ世に公表されていない技術を使い、試行錯誤を繰り返し、二週間完全徹夜で篠ノ之博士には劣りますが一般的には天才と呼ばれる私を含める五人の魂とも言えるものが詰め込まれたISを持ってまいりました！」

「そうですか。蒼崎喜色は呼んだほうがよろしいですか？」

突然立ち上がり熱く語り始めた男の目元には濃い隈がある。二週間完徹とは恐れ入る。

これは蒼崎のことであるからあいつもいたほうがいいだろう。

「いえ、その必要はないです。私どもとはISの通信で連絡が取れるようになっておりますので結構です。私はISを持ってきただけです、まだ研究があるので」

それでは、と立ち上がりフラフラと男は部屋から出ていく。研究……か。束のようなやつだな。

しかし一つのクラスに専用機が五機……いや鳳がいるから六機か。六機もあれば戦争も可能なレベルだ。それになぜ委員会は私のクラスだけに専用機持ちを入れてくる？　何か目的でもあるのだろうか……。

まあいい。私は一夏が無事であればそれでいい。一夏が大切にしているものが無事であればそれでいい。む？　あのガキどもも大切にしていたな……。むう……。これが姉離れというものか？

「蒼崎くん蒼崎くん！」

「あれー？ どーしたんですかー？」

俺が蒼崎と食堂に歩いていると山田先生が走ってきた。おお、素晴らしい揺れですね。どこがとは言わないが。

最近は蒼崎も結構一緒にいるようになったし、入学した時みたいに近寄りがたい雰囲気はそれなりに少なくなった。他の女子とも結構話すようにもなった。表情を隠すようにニコニコしてるのは変わらないけど。

「はあ、はあ、はあ」

「落ち着いて落ち着いて。僕は逃げないから」

ふむ、息荒く、顔を赤くして胸に手をあてる山田先生もいいな。げふんげふん！

「え、えつとですね、蒼崎くんの専用機が」

「来たの！？ さあ行こう！ 専用機が待ってる！ あ、主人公も来る？」

「お、おう」

勢いに押されてつい頷いちまった。というか目がキラキラしてプレゼントを貰う直前の子どもみたいな感じがするな。いままでそういうことが無かったのか？

まあ、蒼崎の専用機も見てみたいしついていくか。

「何これ！ 凄い！ かつこいい！」

「これは……格好いいな」

「気にいって貰えたか。よかったよ」

ピットの中央には全身装甲の２メートル５０センチは超えるかという巨体のＩＳが静かにあった。濃いグレーに所々に白と黒のラインが入っている。そのＩＳの横にはワイルドに顎鬚を生やしてオールバックの中年のおっさんが歯を見せて笑っていた。

「あんたがこれを作ったの？ スペックとか特色とか詳しく教えてほしい」

「俺のほかの後四人いるぞ。スペックや特色だったな。まず見てのとおりこれは全身装甲だ。篠ノ之博士が送ってきた未知の技術にとっても頑丈な装甲があっただんでな、ここは防御を完璧にしておこうとなってるな」

「篠ノ之？ 束？ 技術……コジマ技術か！」

ああ、まただ。またこの蒼崎の肌を刺すような威圧感。あのクラス対抗戦のときと同じような威圧感。蒼崎は『コジマ技術』という言葉にアレルギーみたいに過剰に反応する。何があったのかはまだ教えられないけどなにかあるんだろ……。

男の人も慌てて何かを空間ディスプレイに映し出す。

「落ち着いてくれ。篠ノ之博士から取り除く方法が送られてきている。見てみる」

「あの技術は不完全だ。戦闘に耐えうるようなものじゃない」

「ああ、分かっている。一度シミュレートしてみた。激しく動いた後は何パーセントか有害物質が取り除かれていなかった。ならば、さらに改良すればいいじゃないか。こちらには大天才には及ばないが天才が五人もいるんだ」

「……続けて」

蒼崎は真剣な目でディスプレイを見つめ続ける。俺が口を挟める空気じゃないな、黙っていよう。千冬姉も黙っているし。

少し前にコジマ粒子の有毒性を聞いたけど凶悪すぎる。核の数百倍なんて馬鹿な俺でもヤバいと分かる。

「不完全な点を全て洗い出した。ここと、ここと、ここだ。俺達でもやっと気付けたところだ。一人では気付けなかっただろう。そして改良を施した。さらに同じ有害物質除去装置を五重にし、外側にはグレートウォールの装甲を使った。これを突破するのは今稼働しているISが一斉に攻撃しても無理だ。この俺が断言する。不可能だ」と

「……信じるから。裏切らないでよ」

「ああ、大丈夫だ。このISは既存のものの攻撃、防御、機動性、耐久性、作戦継続能力など全てを軽々と越える性能だ。これに乗れるんだ、悪い話じゃないと思うぜ」

これを最後に男は口を閉じ蒼崎にISに乗るよう目で訴えてかけている。蒼崎はゆっくりとIS近づき後ろに開かれたところに手を入れたところで動きを止めて振り返る。

「このISの名前は何？」

「ああ、忘れてたな。『アンサーテインリイ』だ」

「ふうん『不確定』なのか『頼りない』なのかどっちなのかな」

「嫌なら自分で付け替えればいいさ」

システム起動 プログラム初期化……コンプリート 搭乗者の個人情報登録……完了

以降、操縦者と認定します。機体名『アンサーテインリイ』から変更しますか？ ……NO。機体名『アンサーテインリイ』に固定。プログラム最適化……少々時間がかかります。そのままお待ちく

ださい。音声ファイルメッセージがあります。再生しますか？
……YES。篠ノ之束からのメッセージを再生し……NOを連
打しないでください。

『やつほー束さんだよー元気？ 束さんは元気だよー。どうやら
ISは届いたみたいだね。そのISは私からの命令も拒否するよう
になってるから私からも介入できないから安心してね！ あ、でも
コア・ネットワークはそのままだからねー。それじゃあ適正化のた
めにこの前のISの劣化版送るから戦ってね。コジマは使ってない
よ。もうしばらくしたらまた会えるから待っててね！ 具体的に
は海で会おうねー』

「……」

メッセージは以上です。六時の方向から敵機複数接近。アリ
ーナに出た場合600秒後に接敵します。

装備を選択してください。……標準モード。性能を制限しますか
？ 制限なしではまだ機体に振り回されると予測します、五十パー
セント制限することを推奨します。……性能制限五十パーセントに
設定。

目の前に次々と現れるウィンドウに表示される選択肢を戸惑いな
がらも喜色は選んでいく。ISの中は意外と狭苦しくなく、ちよう
どいい。全身装甲で視界は狭いと思われたがハイパーセンサーが起
動しており360°全方位を見渡すことが出来る。

有害物質除去装置は正常に作動。有害物質は0パーセントで
す。プライマルアーマー正常に作動。ブースター問題なし。チェッ
ク項目オールクリア。武装展開。左腕にはライフル、右腕にはブレ
ードを展開。

左手にはライフルが握られ、右手には手の甲に刃がまだないブレードが展開される。ブレードは攻撃の際に出現するのだろう。

ブースター点火。

戦闘準備完了。あなたの戦いに幸あらんことを。

ブースターから光がほとばしり甲高い音を出してアンサーテインリイはピットから飛び出していった。

その場に残された三人は何故飛び出したのか分らず顔を見合わせていたが千冬の端末に通信が入る。

『織斑先生大変です！ この間のISがまた強襲してきました！ そちらの方には避難してもらって織斑くんはいつでも出撃できるよう準備をしてください』

「……いや、必要ない」

『ふえ？』

「いま蒼崎が迎撃にいった。足止めくらいなら出来るだろう」

「そうだ、私たちが作ったISが無人機に負けるとでも？」

「私の弟は一機にやられたが？」

「ぐっ！？」

一夏のところに言葉の槍が刺さる。

「それはただ単に弱かったただけだろう。その弟が」

「ぐふっ!？」

「ククク、私の弟が弱いと言うことか？」

「フハハ、事実だろう？」

「ククククククククク」

「フハハハハハハ」

「ハッハッハッハッ!」

千冬と男がいきなり高笑いを始める横で一夏は心の傷の部分を押さえており復活にはもう少し時間がかかりそうだった。

11 話目 専用機（後書き）

いまはまだ専用機は詳しく描写する気はありません。
次は戦い。すぐ終わります。

ストックが結構出来たので一気に投下します。

以下、どうでもいい独り言

steins;gate 見終わった。最後はインパクトが足りなかった気がするけど23話が凄すぎただけだと思う。

エースコンバット体験版始まった。やりたい。やりたいけどPS3がないのよおおお！ 中古のxboxが1万ちょいで売ってた。買ったほうがいいのかなあ。

god eater 2 発売！ PSP！ 予約決定いやっふーいでキャラの絵をみたらFFになってた。なにがあつたのさ。もちろんリンドウさんとジーナさん出るよね？

12話目

あつと驚け目を開け（前書き）

戦闘……むりぽ

12話目 あつと驚け目を開け

モニターの向こうに空中に立つようにして静止する蒼崎の専用機『アンサーテインリイ』は静かに敵が来るのを待つてゐた。となりでレーダーを見ていた山田先生が声を出す。

「レーダーに敵影確認！ 1……2……3……6機！？ 多すぎます至急専用機持ちに出撃準備を！」

「6機！？ あんなのが6機もいつぺんに来るのか！？」

俺と鈴の2人がかりで足止めしか出来なかったのにそれが6機も来るなんて……。

無意識に待機状態の百式に手を添える。

「待つんだ。それは必要ない。アンサーテインリイだけで十分だ」

「え？」

おっさんの言葉に俺と山田先生の言葉が重なる。

いくら高性能だったとしてもそれは無理だと思い千冬姉を見る。

「……………」

「千冬姉……それ塩……………」

「何故塩がここに？」

「織斑先生、それ織斑くんが戦ったときもでしたよね？」

「コーヒーを飲もうとしていた千冬姉がスプーンに取っていたのは塩。誰がなんと言おうが塩。千冬姉らしくない失敗だな。っていうかセシリアと戦ったときも塩を入れてたのか。」

「……あ、やっぱり心配なんですよね？　ね？」

「千冬姉、俺のときも塩を入れたのか？」

ギリリッ！

「いたいいたいいたい！」

「あうあう……」

「山田先生私は言いましたよね。からかわれるのは嫌いだと。一夏も私はからかわれるのは嫌い」と知っているだろう？」

「わかったからアイアンクローはやめてくれ！　頭が変形しそうだから！」

「次はない」

千冬姉の手が頭から離される。うー、頭歪んでないかな……。ふと横を見ると山田先生も頭をチェックしていた。……同士よ！

「それでなぜISS1機で足りると言うんだ？　それなりに理由があるのだろう？」

「ああ、無いのならほかのヤツに任せるさ。折角の初陣だ、黒星は縁起が悪い」

ほうほう、ISの調子を見るためにもここにいるんだな。
続けてと三人で促す。

「まあ、ゆっくり話すとしよう。そら、来たぞ」

「あ、数に変わりはありません！」

アンサーテインリイが動き始める。

まずは手慣らしとしてか先頭のISに向かってブレードを一閃。

「は？」

「え？」

「ええ！？」

「どうだ？　まだ実力の一割も出していないぞ。あれはレーザーブレード。一瞬しかエネルギー刃を展開しない代わりに莫大な威力を生み出す。燃費もいいぞ」

蒼崎が切り裂いたISは上下真つ二つに分かれて爆発した。え？

無人機？

……威力ありすぎだろ！？　あれがバカス力繰り出されるなんて悪夢じゃないか。

出合い頭に1機落とされて敵ISは少し動きが遅くなるがすぐに戻る。蒼崎を一斉に狙い始める。

「さあ、次だ。機動性だ」

敵ISの右腕から一斉にレーザーが撃たれる。この前のようにキラキラした物質はないらしい。よかった。

撃たれたレーザーが蒼崎に当たる瞬間、蒼崎の姿がそこから消えた。瞬間移動ではないと思う。消える直前に姿がぶれていたから。確証はないけど。

「どこに行った？」

慌ててモニターを見つめると遠くに蒼崎が豆粒のように見えた。
一瞬である距離を？

「フッフッフ……これが瞬時加速のように無駄なエネルギーを使うことなく瞬時にブースターを使い距離をとるクイックブーストだ」

「クイックブースト……。エネルギーを使わず瞬時にあの距離を移動するか……」

「おや、攻撃するようだ。見てろ……目をむくなよ……」

姿が消え、蒼崎を探すISの後ろからライフルの弾丸が着弾する。弾丸はISの胴体を貫通し、地面に大きな穴を開ける。

それが頭に二発、胴体に二発、各四肢に二発ずつ撃ち込まれISは墜落する。

「ちなみにあのライフルだが、性能でいえば一番下のランクだ。量子化されている中にはもっとすごいヤツもある。……が、使うことは無いだろうなあ」

どこか寂しそうに言うおっさん。一番下であのレベルなら最上級はどんなものなんだろうか。

残りは四機。俺が戦ったときはもっと追いつめられていたのに短時間であそこまでやるとは。

「次は防御だ」

「シールドがあるが？」

「そんなもの篠ノ之博士が作ったISの前では何の意味もない」

今度は時間差攻撃を始めている。蒼崎はクイックブーストとか言うので避けてるけど少しずつ回避が遅れてきている。当てられてしまっ……。

「あっ！」

山田先生の声がでた瞬間蒼崎はついに被弾してしまった。だけど蒼崎が落ちてくる様子はなかった。俺のときは掠るだけでヤバそうだったのに。

「さあ、見る。あれが実弾には無敵を誇るシールド、プライマルアーマーだ。コジマ粒子を空中に散布、固着させて生み出してるんだ。レーザーにも多少は耐えられるぞ！ ISスポーツのルールにはシールドエネルギーを増やしすぎるのは禁止されている。だがしかし！」

ビクッ！

おっさんが突然大声を出したから俺たちは驚いて飛び上がりかけた。千冬姉は眉を動かしたただけだったけど。

「だがしかし！ 別のエネルギーでシールドをつくってはいかんとは何処にも書いていないじゃないか！ 俺たちはならばと思いついた！ 新しい動力を持ってきたのでシールドを作ればいいじゃないかと！ 篠ノ之博士の寄こした技術を流用し、プライマルアーマーを造らせた！」

「確かにそのようなルールは無いが……普通のISは性能を伸ばすことだけに視野をおいているからそのようなことを考えるやつはいないのか……」

「だろう？ 今までない事をするから新しいと言われるんだ！ そして全身装甲など考えたやつはいなかっただろう？ そして絶対防御が発動した後の事を考えた人はいないだろう？ 俺たちは絶対防御が発動したとしても操縦者の生命を守るため見たことのない理論の装甲を全身に使った！ 操縦者が死ぬことは無い！」

ものすごい熱く語ってるけどモニターの向こうでは蒼崎が必死に戦ってるからな？ ものすごい頑張っているからな？

モニターの向こうでは蒼崎が敵ISの攻撃をクイックブーストとか言うのでビュンビュンかわして、もうほとんどクイックブーストを使わずに避けてる。

「あまり手の内を晒すのはよくないな。それでは、目をしっかり開いておけよ？」

蒼崎は自分が四機の敵ISの中心に来るように立ちまわっていた。そんなことをしたらいつせい攻撃をされると思っただけ……

「さあ、ちびるなよ！？」

カッ！

突然蒼崎から光が溢れ出る。轟音がし、マイクはブツリと壊れ、モニターからは光が逆流する。

「なんだ！？　なにがあった！」

「ふええ！？　また敵襲ですか！？」

「ハッハッハッ！　今のもアンサーテインリイの攻撃の一つだ！
驚いたか！」

イタズラが成功した子どものように声をあげるおっさんの声を聞いて、塞いだ目を恐る恐る開ける。

うわ、目がチカチカする。どんな攻撃があんな光を出すんだ。クラスター爆弾を使ったとかじゃないよな？

「モニターは……ちつ。カメラがやられているか。一夏、プライベートチャンネルで問いかけて見る。おい、いまのはなんだ」

「あーマイクも壊れちゃってます……」

『あーびっくりしたー。オペレーション通りにやったらいきなり爆発するとか』

千冬姉の言葉に応えるようにピットに蒼崎の声が響きわたった。バッとおっさんを見るとニヤニヤとしながら手に持ったボタンを押す。

空中にディスプレイがでて、空に静止する蒼崎を映す。見る限りISに損傷はない。よかった。ひどいことにはなっていないみたいだ。

「蒼崎、無事か？」

『あ、千冬ちゃん？ 無事だよ、というか傷一つ無いよ。すごいねこれ』

「ハッハッハッ！ 傷なんぞついてたまるか！ 自分の攻撃で自滅してどうする」

このおっさん殴りたい。なにがあったかくらい教えてくれないのに。

「あ、敵IS全機墜落してます。えーと、ボロボロです……」

「すげえ……こんな簡単に倒せるなんて……」

「ふん、お前にも出来ることだ。簡単にな。蒼崎、最適化は終わったか」

あ、まだ初期設定のままだったんだな。いや、待て。一つ引つかかるぞ。

「えっ！？ 初期設定であんなに動けるのか！」

『うーん、なんか残り時間がまだ50ほどあるんだよね。分じゃなくて時ね』

「なんだそれは……」

「なあ、おっさん。どういうことだ？」

「お、おっさん！？ いや、まあいい。今までに前例のないISだからな。なんとも言えんよ」

前例が無いって全身装甲の有人ISは初めてだろうけど適當すぎる気がする。

アンサーテインリイは戦っているときとは比べものにならないくらい遅いスピードでピットに戻ってくる。あの無人機のISを6機も相手にしたんだから労らないとな。

アンサーテインリイの稼働状況を見ていた男は表立って喜びはしなかったが、心では狂喜乱舞をしていた。

いきなり降ってわいたISの開発、未知の技術。技術者としてこれほど興味をそえられるものはない。科学者としても興奮させられた。見たことのない兵器に見たことのない理論、考えたこともない構想。二週間の徹夜など気にもならないほど最高だった。

寝不足で瞼はもう閉じそうで気を抜けば寝てしまいそうな状況だ。

だが、そんな眠気などアンサーテインリイが動くのを見たときから次元の彼方へ吹っ飛んでいった。他人が考え、まとめた技術でもそれなりに改良は加えた。シュミレートでは完璧に出来ていたが、実際はどうなるか分かりはしない。

それがどうだ？ 蓋を開けてみればどうだ。悠々と空を駆け、素早く走り、攻撃するISが男の目に映った。

男は興奮で息も忘れそうだった。アンサーテインリイは本来のIS技術は殆ど使っていない。ハイパーセンサーや武器の量子化程度だ。未知の技術がこのISの主体だ。今のISが強いと言う風潮を打ち崩すことができる一歩にもなる。

男には今の世の中は非常につまらなく感じる。なぜ？ 簡単な話だ。ISの開発は難航、新しいことをしようとせず、同じことだけをやり続け失敗する。つまらない。非常につまらない。この未知の技術を公表すればもっと素晴らしい開発競争が見られるのではないか。素晴らしい。さっそく実行に移そう。

ここまで考え思い出す。この技術はどこからきたか。篠ノ之博士からだ。あのアンサーテインリイの操縦者も知っているようだった。バラせば私は堀の中、最悪三途の川のむこうだ。どうやら楽しいことは出来ないようだ。ならばどうしようか。ならば新しい兵器を作ろうではないか。そしてそれがどう転がるかはわからないが楽しいことには違いない。

「ククク……フハハハ……」

部屋には男が高笑いをしながら頭の中では新たな案をうだみしていた。

12話目 あつと驚け目を開け（後書き）

オーバースペックテラワロスwwww

何故が開発したおっさんが黒幕っぽくなる不思議。黒幕にする気はないのに。

性能は制限してるし大丈夫だと見た！

ああ、なぜそんなにコジマ粒子の煌めきは美しいの？

以下、どうでもいい独り言

god eaterがFFすぎる。ハンマーとランスどっちか？

ランスで突撃しかないでしょう！

機動型のフェンリル支部みたいなのが出てたけど 型ってつく機械とかって凄くカッコイイと思う。

リンドウさんでるかなあ？ ソーマでもいいよね。大穴でオウガ・ド・マスクとかが出てきたらガチムチのおっさんキャラでプレイする。なにが楽しくておっさんの尻を見てゲームしなければならぬのか。

中国が永久機関を開発したっていうスレを見つけて、クマーのAA貼ろうとして見てみたら野菜ジュース吹いたwwww

アームに磁石をつけて車の前方に鉄板をつけるとかwwwwww

磁石は永久に磁力が弱まらないなんてあるわけが無いのにwwww

W
W
W

明日も更新する予定です。

13話目 少し、話してみようか（前書き）

予約投稿するつもりが予約出来ていなかったの巻。

12話が今日の午前零時投稿予定でした。

というわけで追加投下するでござる。

13話目 少し、話してみようか

「SHRを始める。号令」

キリツ！ キヲツケ！ レイ！

いつものIS学園の朝、一年一組の教室ではいつものように千冬の号令でSHRが始める。軍隊のように動きがきびきびしているのもモンド・グロツソで優勝しドイツで特別教官と務めていた千冬が担任だからであろう。クラス全員欠席もなく、教室に声が響いた。問題は特に起こることなくSHRは順調に進み、最後に真耶がなにか言うことはありますかと千冬に視線を向ける。

「あー、そうだな、蒼崎の専用機が先日届いた。ちなみに機体名はアンサーテインリイ。コアはの所属は一応あるが、まあ建前のようなものだ。諸君はまだ若い。専用機があるのが無かるうが違いはさほどない。量産ISで専用機に喰らいつけるのは蒼崎が証明した。せいぜい励め。あるいはあのモンド・グロツソを制覇できるやもしれん。以上だ。号令」

キリツ！ キヲツケ！ レイ！

号令が終わり教師の二人は授業のために教室を出て行った。それを見届けた生徒二人が一夏と喜色の机に近づく。言うまでもなくセシリアと箒の二人だ。

セシリアは専用機を持ち始めた喜色にむけて突撃し、箒はどうでもよさげに一夏のそばによる。

「蒼崎さん、専用機を持ったというのは本当ですよ!？」

「本当だよ。まだ一次移行も終わってないけどね」

「ということは今この場には無いのですわね？」

喜色は首を軽く振り自分の首を指差す。首もとには二つの鎖が見えた。一つは先にメモリがついてある。喜色が肌身離さず持つものだ。セシリアは疑問に思う。

「なぜ二つチェーンがあるのです？」

「あ、ごめん、こつちだよ」

二つある鎖の内一つ摘んで持ち上げる。鎖の先にはドックタグのような板がついており、板には何かが刻まれている。

「『unequal world』……不平等な世界、ですか？
それに文字にもチェーンが巻かれてる意匠が……。どっという意味
ですの？」

「さあ？ 僕にとっては特に意味はない。どうでもいいことだよ」

「それより蒼崎はもの凄かったよな」

意味深いような言葉を言う喜色を見て首を傾げたセシリアを見て、一夏が話に入ってくる。

「なにがですか？」

「ああ、セシリアは居なかったんだよな。蒼崎がISを装着したときにクラス対抗戦に乱入してきたISが来たんだ」

「まあ、なんてことが！ それを蒼崎さんが一人で倒したのですね！」

「そうなんだよ。機体も格好よかったけど動きとかも凄かったんだ。もう最初からハイスピードでさ！」

手を動かしながらとか凄さを伝えようとする一夏の言葉をセシリアは聞き逃さなかった。一人白熱する一夏にセシリアは待ったをかける。

「ちょ、ちょっと待ってくださいます？ あのISは複数機いたんですの？」

「六機いたんだよ。あれ、言ってなかったっけ？」

聞いてないですわ！
と思うセシリアだが彼女は淑女だ。はしたない真似はしない。

「六機もですか！？ それでは二、三年生のかたが援護しましたの？」

「いや、蒼崎だけだ。もう、圧倒的だったんだ。いきなりブレードで一閃したんだよな！。格好よかったぜ」

「単騎で戦われたのですか！？ それはどうやったんですの！？」

話が若干、噛み合わずお互いに首を傾げる。困った顔をする二つ

に喜色は助け舟を出した。

「この間アリーナで爆発があったの知ってる？ あれ、その時の影響なんだよね」

「え？」

「は？」

気の抜けた声を出すセシリアと箒。喜色が使ったプライマルアーマーは余波だけでも風が吹き荒れ、建物がいまにも倒れそうな程軋んだ。

事情を知らない生徒の間では強襲をかけたテロリストを千冬が殴りとばした音だという噂も流れている。プライマルアーマーが使われた直後、どこぞの17代目当主が何事かと偵察に来たりしたがそれは別の話。

「あれはIS1機が起こしたことだよ」

「なっ！？」

「……面制圧兵器でも使ったのか？」

「えーと、蒼崎なんだったっけ？ あ、あ、あさ」

「アサルトアーマーね。あれでも威力は絞ってるんだよ。9割くらい。それでも半径10メートルはあるんだよね」

「きゅ、9割……」

「アッハツハツ、安心して大丈夫だよ。千冬ちゃんに使用を控えるように言われたから」

大きく口を開けて楽しそうに笑う喜色とは対照的に三人は目を見開いている。ISが世界最強の兵器だとしても明らかかなオーバースペックだ。もし自分に向けて使われたらと考え、三人とも体が震えてしまう。

「千冬ちゃんもひどいよねー。ピットに戻るなり使用を控えろだつてさ。おかげで普通の装備しか使えないじゃん」

「で、では、馬鹿みたいに威力の大きいものは無いのですわね？」

「うん、ないよー」

「それならばわたくしと戦ってくださいる？ この間のリベンジを果たしたいのです」

「あ、セシリア、ま……」

アサルトアーマーにそれほど威力があるなら、アンサーティンリーの装備は普通のものと思い、セシリアはリベンジを果たそうとする。一夏が忠告しようとするが、時すでに遅し。

「いいよ。それより真耶ちゃんから聞いたんだけど、千冬ちゃんがコーヒーに塩を入れてたって本当？」

「織斑先生がコーヒーに塩を入れた？ なにかの間違いじゃないか」

「そんなことを間違えるなんて……織斑先生にも人間らしいところ

があるのですわね」

「ああ、俺も目をうたが……」

仲良く話す四人に近づく黒い陰。陰は静かに近づき何かを持った腕を勢いよく振り下ろす。

パパバンツ！

「痛い！？」

「きゃ！？」

「いつ！」

振り下ろされた何かは出席簿で、出席簿の持ち主で人の頭をポンポン叩く人は千冬しかいないと喜色は叩かれたと分かった瞬間に抗議の声を出す。

「僕の頭はポンポン叩いていいものじゃないんだよっ！ 千冬ちゃん！」

「ふん、教師の呼び方を忘れているんだ、衝撃で思い出してもいいと思わんか？ ほら、貴様ら席に戻れ」

パンと手を叩く千冬を見た生徒は我先にと席に着く。喜色のジトツとした視線を感じながらも満足そうに教室を見渡す。

「山田先生、授業を」

「あ、はい！」

わたわたとしながらも真耶が教科書を読み始める。クラスに欠席は無くいつも通りの光景で、響くのは文字を書く音だけだった。

昼休憩、珍しく一夏たちと一緒に食事を取らなかった鈴音が、屋上のベンチに背を預けて空を見上げる喜色を発見した。
日頃から喜色にからかわれてしまう鈴音はここが仕返す場面だと静かに、こっそりと息をとめながらゆっくりと近づく。

「蒼崎、あんた専用機持ちになったらしいじゃないの、え？」

「……誰？ 鈴音ちゃんじゃないか。あ、あれ？ どうして肘でうりうりーってやってくるの？」

「気にすることは無いわよ。日頃の仕返したもの」

ふん、と満足げな顔で喜色の身体を見つめる。喜色は自分の顔ではなく身体が見られていると気づき、腕で身体を隠すすぐさをする。

「な、何見てるのさ！ きゃーおーそーわーれーるー」

「誰が襲つか！ 襲うんなら一夏を襲うわよ」

「え？ ふーん……ふーん……ふーん……プッ！」

「笑うんじゃないわよ！」

「痛い！？」

喜色から漏れた笑い声に、つい鈴音は拳を振るう。その顔は怒っているみたいだが真っ赤で怖くもない。

鈴音は胸倉を掴み、喜色をガクンガクンと前後左右にゆする。

「いい、あんたは何も聞いてない！ いいわね！」

「わ、分かったから揺らすのやめてー！」

「……ふう。一夏に言っちゃダメだからね！」

「まあ、鈴音ちゃんが主人公を好いてるのは分かり切ったことだからどうでもいいんだけど、なんで僕をジッて見てたの？」

ひとまず落ち着いて一息をつく。絶対言つなと指を指しながらいう鈴音に、さきほどの行動の意味を尋ねる。

「あー、あんたが専用機持ちになったって言うからどこにあるのかわかって」

「なんだ、つまんない。ああやだやだ。ここの生徒は何かあれば二

言目にはISばかり。もっと楽しい会話をしないのかなあ」

「あなたにとって楽しい会話って何なのよ。っていうかあなたって
いう言い方めんどくさいわね」

他の専用機持ちと仲良くするのもいいだろうと喜色の隣に腰掛け
る。何なのよと問われた喜色は数秒ほど考え込む。

「なら好きに呼びなよ。楽しい会話……か。そうだね、家族の話と
か聞いていると楽しくなるよね」

「それなら喜色って呼ぶわ。他人事を聞くのが楽しいの？」

他人の家族の話などどうでもいいし、気にすることでもない。と
いうのが普通の人の考え方だろう。ただ、喜色は良くも悪くも普通
ではない。

「楽しいよ。あーこんな家族もあるんだなーって。いままで聞いた
数は片手で足りるけどね」

「それ、少なすぎない？」

「しょうがないよ、僕と話してくれる人なんて片手で数えられるく
らいだったからね」

「だった？」

鈴音は何かを含んで話す喜色を疑問に思う。自分のことを話さな
い喜色にしては珍しく、疑問に大きく首を縦に振る。今日は天気も
いいから舌もよく回って、固い口も弛んだのだろうか。

「だって殺されたんだから。あの女に。ま、それも四年くらい前だけど」

「あ、ごめん……殺された？ そんなニュース聞いたこと無いわよ？」

「大丈夫。気にならないから。知らないのも当然だよ。大陸の違法な研究所にいたからね。死のうが死ぬまいがそこにいたっていう証拠がないからね」

何か普通ではない雰囲気を意識ではなく、本能を感じ取りすうつと背中を流れる汗を鈴音は知覚する。夏は近いがまだ涼しいし、今居るのは影だ。汗が流れたのは決して暑いからではないはず。

「違法な研究所？ どういうこと？」

「んー……簡単にいうと表には出せないことを研究するところ」

「違うわよ。喜色は何者ってことよ」

「それは秘密。いつかは話すよ。結構グロッキーだし、聞かないほうがいいかもしれないけどね」

喜色の口調も表情も、いつものように一夏と話すように軽い。鈴音は傷つけないように、傷つけないようにと言葉を選びながら話す。

「あんたはなんで表情を隠すようにして笑うのよ。つらいならつらそうな顔すればいいじゃない」

無理に決まってる。自分は一夏みたいに人の心の動きに敏感じゃない。どうしても直球になってしまう。

「……えー？ 隠してないよ。つらいことなんて全然ないよ？ 笑ってるかなー？」

喜色はペタペタと顔に触れて表情を確かめようとした。それを鈴音はチラリと盗み見た。

「自覚無いの？ 教えといてあげる。喜色は常に表情を隠してるし、感情に起伏が少ないわ。というかあんたが悲しんだりするところを見たことがない。もうちょっと子どもみたいに振る舞ってもいいんじゃないの？」

「アハハー子どもがどんな風に振る舞っているかわかんないんだよー」

「ほら隠さない。また笑ってる」

鈴音は目敏く指摘をする。指摘された喜色はうつ、と声を漏らして普通の表情に戻そうとする。

「……鈴音ちゃんってさ」

「なによ？ 変なこと言ったら殴るから」

「なんかあの人に似てるんだよね」

「あの人？」

あの人は誰だろう？ 鈴音は少し考えてみる。千冬さん？ 一夏？ 山田先生？ それとも、もう死んだって言う人？

「そう、用もないのに話にきて、いつの間にか人の心に入り込むような人。いろんな話をしてくれたし、たくさん話を聞いてくれた。と言っても僕が話すことはほとんど無かったんだけどね」

「ふーん……。その人は優しかったのね」

「とっても優しかったよ。それに凄く綺麗だった。見た目も、心も。僕みたいな化け物にもにこにこしながら話してくれたから」

「……」

鈴音はこういう時の自分の少ない語彙が嫌になる。一夏ならそこからどんどん心に入り込んでいくだろうに……。気の利いた言葉を返すことも出来ず、横目で喜色を見てみる。

「でもね、時々話していると顔が泣きそうになってたんだ。なんでだろうね？」

横目で見た喜色は今まで見た表情を隠すようにして笑うのではない、昔を思い出して心から笑っているように見えた。

「……さあね。心に残ってるならそれが思い出って言っくんじゃないの？ 私はよくわかんないわ」

「思い出かぁ。その思い出もいつか消えちゃうのかな？ 記憶を保存できたらしいのにな」

「薄れてしまうのが思い出なのよ。ずっと覚えてるならそれはただの記録でしょ？ ……さて、そろそろ授業だし、私は戻るわ。喜色もサボったら駄目よ」

いい答えを返せた気がする。そう思いながら勢いをつけて立ち上がる。時計を見ると授業開始五分前だ。

サボりそんな雰囲気の喜色に一応注意しておく。

「確かにそうだね。もっともだ。ちなみに次は千冬ちゃんがいるからちゃんと出るよ」

「そう。あ、今度模擬戦しなさいよ」

最後の言葉は聞こえていても聞こえていなくてもどっちでもいい。どうせ授業で戦うだろうから。

屋上への扉を閉めるときに見た喜色は来たときと同じようにベンチに背を預け、空を見上げていた。ただ、一つ違うのが喜色の表情が少しだけ柔らかくなっていた。

「初めまして。シャルル・デュノアです」

「初めましてだ。『シャルロット・デュノア』」

「……」

「ああ、心配しなくてもいい。別にとって食おうなどと考えてないさ」

「どうして僕の本名を知ってるんですか」

「篠ノ之束さ。第三世代の設計図とともに搭乗者データも送られてきたよ」

「篠ノ之、束？ あの篠ノ之束？」

「そうさ。大天才・天災・変人・確保不可能・IS開発者の篠ノ之束さ」

「どうして……」

「知らないし知ること出来ぬだろうし、知る気もないさ」

「なにがしたいんですか」

「簡単なことだよシャルルくん。篠ノ之束が第三世代の設計図を送ってきた？ 知るか。我らは他人の考えたものなど不要。ISは我らが全て構成する。ようやくコアが手に入ったのだから」

「BT兵器？ AIC？ 衝撃砲？ 展開装甲？ 知るかそんなもの。既存の、既に理論があり、興奮しないものなど何の魅力もありはしない。我らを満たすのはロマンのみ！」

「……え？」

「取り扱いの出来ない大砲を気合いで使うのは心が踊る。その大砲の火薬を嗅いだのならばさらに心が踊る。

二丁拳銃など懂れる。現実では不可能、合理的ではない、話にならない。だからこそ懂れるのだろう。

武装がブレード二本だけ。素晴らしいじゃないか。それだけでもう失神しそうだ。それで敵を倒したのならば失神確実だ。それで負けたときは砕けそうな程歯を食いしばるだろう。

生身で使うための技を機械に乗って行う。不可能ではない、なんのために科学があるのか。それを実現させるためだろう。

搭乗者に過大な負荷をかける代償に莫大なパワーを手に入れる。血肉が沸き立つだろう。それでこそロマンだ。

ドリルは穴を掘るもの。当たり前だ。穴を掘るために開発されたのだから。だがそれを武器にするなど誰が考えるだろうか。それでこそロマンだ。

パイルバンカーの炸薬の臭いなど嗅ぐだけで失神するだろう。絶大な威力。極小の射程距離。素晴らしい。素晴らしい！素晴らしい！！それでこそロマンだ！！」

「え、いや、ちょ、あの……」

「女性で例えるとするならばルビーだ、サファイアだ、オパールだ、金だ、銀だ、ダイヤモンドだ。滅多に無いものならとても興奮するだろう。それだよ。その興奮を我らは科学に求めるのだよ」

「えっと、その……」

「待ってたまえ、シャルロットくん！ 女性のキミでも興奮するであろうISを作ってくるぞ！ 大体性別など関係ないのだ！

興奮するものには興奮する。それが真理だ！

[illegible]

素晴らしい機体を作り上げようではないか！　ファーハッハッハッハッハッハッ！！」

13話目 少し、話してみようか（後書き）

この話はいい出来。

鈴音がヒロインみたい！ でも違うよ！

それで主人公の過去を少しバラす。鈴音は誰にも話さず、IS学園で知っているのは本人と千冬と鈴音だけ。
どうせすぐに専用機持ちはみんな知る予定。

そしてシャルロットのラファール魔改造フラグ建設完了。
でも活躍はかなりあと。

自信を持ってこの科学者は変態だと言える。

以下、どうでもいい独り言

t i g e r & a m p ; b u n n y 見終わった。

おじさんなんで降格してるんですか。

終わり方がものっそい二期に繋がられる終わり方だった。

二期はルナさんと楓ちゃんのコンビだよね？ ね？

P V の伸びがわるいなあ……

やっぱりタイトルに魅力を感じないとか？

まさか面白くないとか？

まあ、気にする必要は無いんですけど。ただ自分の妄想を書き殴ってるだけだし。

ぜ、全然寂しくなんかないもんっ（チラッ

P・S・

ネギまが……書けない！

千雨ちゃんまじ強敵

14 話目 トーナメント初戦（前書き）

ストックこれで打ち止め

14 話目 トーナメント初戦

織斑一夏とラウラ・ボーデヴィツヒの一悶着から数週間。蒼崎喜色の専用機が届いてからも数週間。二人が居るIS学園は少しばかり騒がしくなっていた。

IS学園では今日から一週間、トーナメント戦が行われる。例年とは違いペアを組んでの試合であるので、パートナーとの息の合わせようが勝利への重要なキーになることは間違いないだろう。

一夏と喜色は更衣室でISスーツに着替える。男子生徒は三人しかいないので、ここの更衣室は貸し切り状態だ。その代わりにどこかの更衣室では定員以上の生徒がいるので女子生徒は狭苦しい思いをしている。

一夏はISスーツに着替えながら喜色に話しかける。

「しかし、驚いたな」

「なにが？ 僕としては主人公の鈍感さにいつも驚いてるけど」

「蒼崎がラウラとペアを組んだことだよ。ていうか俺は鈍感じゃない」

「確かに驚いたよ。あの時の喜色少し怒ってたでしょ。それなのに組むとは思わなかったよ」

「なんかラウラちゃんが余ったから組めって言うてきたんだよ。…よっ、と主人公が鈍感じゃなかったら全人類が超感覚持つてることになる件について。ねえ、シャルルちゃん？」

喜色はISスーツを着終わった。首もとに待機状態のISをかける。ドックタグのような形状に二つの単語、鎖の意匠。数週間前と変わったところはない。

「つと、ふーん……専用機持ちが余るなんて珍しいこともあるんだな」

一夏もISスーツを着終わる。一夏の右腕には待機状態の百式がある。ふう、と一息をつき観客席を映し出すモニタに目を向ける。モニタにうつったのは各国の政府関係者、研究員、企業のエンジニアなどなど滅多に揃うことのないであろう顔がたくさん見ることが出来た。

「うわ、テレビで見た顔がたくさんあるんだけど」

一夏の呟きにシャルルと喜色もモニタに目を向ける。

「ああ、気をつけておかないと誘拐されるかもね。ISを動かせる男なんて貴重な研究材料だからね」

「それはないよ。ここには国家代表もいるし、候補生もたくさんいるし。それに何より織斑先生がいるからね。ISに乗ったのを見たことが無いけど、乗れないってわけじゃないからね」

「千冬姉って、IS用の武器を生身で振りまわすんだぜ？ 千冬姉専用に学術上の分類を作っている気がする」

「学術名、超人チフーユって？ 僕もそれくらいなら出来るんだけど」

「ああ、喜色も振りまわしてたね。片手で」

「よし、いまから蒼崎の学術名は超人チフリーユだ」

シャルルと一夏、喜色は数週間でも言葉に表せないほど打ち解けている。それもシャルルと一夏の訓練に喜色が参加し、戦ったからだろうか。親友への近道はまず喧嘩だという人もいるがあなたが間違っているのではないだろうか。

本来、例年通りならば既に対戦相手は決まっているのだが、ペアを組んでの対戦に変わったためトーナメント用のプログラムに不具合が生じ、前日に発表されるトーナメントは今日の今朝から生徒と教員がくじという初歩的な方法でトーナメントを組んでいた。

更衣室でISスーツに着替えて談笑しながらトーナメント表の発表を待つ三人に緊張という文字は何処にもないように見えた。

「あ、決まったみたいだ」

「ホントだ」

観客席をゆつくりとカメラを切り替えながら表示していたモニタがトーナメント表へと切り替わる。それを見た一夏はつい思考を停止し、モニタを穴があくほど見つめる。

「は？」

「なにこれ」

「これ絶対千冬ちゃんが仕組んでるでしょ」

一年の部Aブロック一回戦

『織斑 一夏 & シャルル・デュノア VS ラウラ・ボーデヴ
イツヒ & 蒼崎 喜色』

アリーナに立ったラウラと喜色の二人の間には見ることはできないが、あると確信できる不可視の壁があった。仏頂面のラウラといったものようにニコニコと笑う喜色のコンビはうまく合っていないように、あっている雰囲気があった。

相手の一夏とシャルルに向けて飛びだすまで残り1分を切ったとき、それまで目を閉じていたラウラは瞼をあげて、喜色に向けて命令をする。

「私が全てやる。貴様は後ろで見ていろ」

「はい却下ー」

「聞こえなかったようだな。貴様は後ろで見ていろ」

「だから君は弱いんだよ。強さは叩き伏せるだけじゃダメなんだよ」

「ふん、強さは力だ他になにかがある。まあいい。織斑一夏は私が貰う。怖気づいたのならデュノアも私がやる」

ラウラは鼻息をし、当たり前のように答えると喜色はやれやれと言ったように溜息をついた。

「まあいいけどこれはチーム戦だからね、頭に入れといて。僕も負けたくはないからね」

20秒前です。用意してください。

組んでいた腕を解くとぶらりとラウラの腕は自由になる。

「一戦目であたるとは貴様も運が悪いな、織斑一夏」

「は、運が悪いのはどっちかな。負けそうになっても泣きだすなよ」

まだ始まっていないというのに闘志があふれ出す二人の頭にこれはチーム戦ということは頭から抜け落ちている。二人は獰猛な笑みを浮かべた。

「でもよ」

「どっちでもいい」

「叩きのめす」

試合開始！

けたたましいブザーが鳴ると同時に一夏は瞬時加速を使いラウラの懐に向けて飛び込む。一夏とラウラの技量の差は素人と軍人、比べ物にならない。実力差がある相手に傷を与えるのに必要なのは思いもしない攻撃である。ならばどうすればいいか。一夏は開始早々に一撃を加える気でいた。

「うおおおお！」

「やはり、間抜けか」

ラウラは右腕を一夏に向ける。眼帯の奥にある瞳も一夏に向けられる。

（A I Cが来る！）

A I Cとはアクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称でありP I Cを応用して作られた慣性停止能力である。慣性を停止するということはかなりのアドバンテージとなる。それは相手の動きを止められること他ならない。だが、どんな兵器、武器にも弱点は必ずある。例にもれずこのA I Cは発動するために多大な集中を必要とする。つまり、ラウラ程度の技量では攻撃をよけながらA I Cを発動することはできない。

「……くっ！」

「もう終わりか？」

ラウラのI Sの肩部分に装備されている大型のカノン砲が回転し、

砲塔が一夏を捉える。開始直後のピンチ。体は動かせない。普段の1対1ならここで既に詰みだ。だがこれは2対2の勝負、まだまだ詰みには程遠い。

真横から実弾が飛来するのをハイパーセンサーが感知した。ラウは即座にA I Cを解除して回避する。

「一夏、まだ大丈夫だよな？」

「やーごつめんねーラウちゃん。一人でやるって言ってたから1対1で戦ってたよ。助けはいるー？」

「大丈夫だ、余裕だ！」

「……いらないと言った！」

「あつ、そう」

数秒間のインターバルを挟み、また自分の前に居る敵に集中する。ただしシャルルと喜色は相方の様子も気にしておく。

「さあ、続けて行くぜ！」

「やれるものならな！」

開始直後に二人だけで戦いを始めた一夏とラウラだが、残りの二人は開始直後から全力で戦うという真似はしないようだった。

「さっすが主人公。いきなり突っ込んで行くとはね」

「あはは、まあ一夏だから……ねっ！」

直後、シャルルの手にはアサルトライフルが展開され一瞬で照準、引き金を引く。喜色に向けて発射された弾丸は着弾する瞬間に目標を見失い、そのまま直進する。

「不意打ちってひどくない？」

「避けといて言うことじゃないよ」

性能制限……70パーセントを制限します。装備選択……標準。追加武装はミサイルです。

喜色が操るISの速度が比べものにならないほどゆっくりになる。同時に右腕部にはブレード、左腕部にはライフルが装備され右肩に4連ミサイルポットが展開された。

「あ、主人公早速ピーンチ！」

「やらせないよ」

シャルルのアサルトカノンがラウラに向けて火を噴く。そのままラウラに向けて照準を向ける。

「一夏、まだ大丈夫だよな？」

「やーごつめんねーラウラちゃん。一人でやるって言ってたから1対1で戦ってたよ。助けはいるー？」

「大丈夫だ、まだ余裕だ！」

「……いらないと言った！」

「あつ、そう」

ラウラの前には二人がいて、喜色の視界内には誰もいない。ここで喜色が奇襲すればここで勝負は終わるかもしれない。しかし、ゆつくりと動く喜色は装甲の上から頭をかいだ。

「まだまだ！」

喜色が頭を掻く間もシャルルのアサルトライフルは弾丸を吐き続ける。時折一夏の斬激をも混ぜて決定打を食らわそうとする。

「シャルル、このまま行く　っ！ー！」

突如、横から飛んできたレーザーをハイパーセンサーが感知し、一夏はスラスターを吹かしてレーザーをかわした。

レーザーが飛んできた方向を見ると案の定、喜色がライフルをこちらに向けて立っていた。

「いやーごめんねー？　なかなかいい戦いで観戦しようとしたんだけど、千冬ちゃんに怒られちゃってさー。ラウラちゃんもごめんねー？　千冬ちゃんの命令だから仕方ないよね」

いつもと変わらない調子の声が聞こえるがそれは恐いことだ。普通、人間は武器を持つと個人差はあるが好戦的になったり口調が変化したりする。だが喜色の声を聞いた限りではいつもと同じ平常心のようだ。

いつもの掴めない考えで何をしてくるかわからない。

一夏たちは集中的に攻撃し、戦力を減らそうと頷きあう。

『喜色はダメだ。牽制しながらラウラを先に倒そう』

『わかったよ。目の前だけに気を取られないでね!』

「なにを話してるかわからないけど僕はラウラちゃんに手を出すな
って言われてるからね。過剰に攻撃はしないよー」

「……ふん、それでいい」

喜色はゆつくりと空に飛び、流れ弾などが飛んでこない場所へと移動する。一応というようにスナイパーライフルを展開しておいた。シャルルはそれを視界の隅においておきながらも、既に突撃していった一夏を援護するために両手に展開した銃器に新しく弾を込めた。

「ふわぁ……織斑くんとデュノアくん、ちゃんと連携がとれてますねー」

「デュノアが合わせているからあそこまでやれるんだ。本来ならすぐにやられても仕方がない」

モニターを見て、驚いたように息を漏らした真耶に千冬はフンと鼻を鳴らした。

「でも蒼崎くんとボーデヴィツヒさんは……」

「ああ、連携をとる気もないらしいな。蒼崎は隅で構えているだけだしな」

「でもなんでそんなことを……。あのISの武装ならすぐに決着が着きそうですけど」

「ラウラが言ったのだろっな。手を出すなどでもな」

「あ、転校してきたときのことを解決しようとしてるんですかね？」

思い出したように尋ねる真耶には視線を向けず、千冬はいや、と答えた。

「モンド・グロッソの事だろうな。あいつは思う節が有ったのだろう。それにまだ強さの意味を取り違えている（蒼崎がなにか言ったようだがな）。」

「え？　　なんですか？」

呟くような小さな声を真耶聞き取れず聞き返すが、千冬はそれに答えずモニターを見つめ続ける。見つめたモニターには一夏が零落白夜を発動させたのが見えた。

「ほら、零落白夜が来たぞ」

一夏の必殺技と言えるだろう零落白夜を発動させたことで観客席が沸き立つ。歓声が二人が居る部屋まで響いてくるほど大きな歓声だ。

「あ、本当ですね！ うまく行きますかね？」

「どうだろうな。蒼崎もあそこを狙えばいいのにな」

「まったくです！ 蒼崎くんは今度補習です！」

ブンブンと怒る真耶を横目に千冬はモニターを見る。表面は冷静だが内心ではハラハラしているのだろう。指が小刻みに動く。幸い真耶が気づくことはなく、千冬はモニターを見つめ続ける。

「これで！」

「ふん、貴様では私にさわることにすら不可能だ」

一夏は零落白夜を発動させラウラの懷に飛び込もうとするがAICを使用されて動きが止まる。

「不可能だと言ったのが聞こえなかったか？」

「さて、それはどうかな？」

肩のカノン砲を一夏に向けると後ろから肩を目掛けて大量の弾丸が飛んできた。すぐさま回避を行い後退する。

「あめえよ！ これはチーム戦だぜ！」

「いくよ！」

後退したラウラの背後にはすぐそこにシャルルが大型のショットガンを二丁展開していた。ラウラの腹部に銃口を当て零距离からトリガーを素早くマガジンから弾が無くなるまで引く。

「クッ！」

「おらあああああ！」

ラウラが逃げた先には示し合わせたように一夏が武器を振りかぶっている。AICが使えないと判断したラウラはワイヤーブレードで一夏の腕を縛りつける。

「あ、ラウラちゃんそれ駄目だ……」

「うるさい！ 黙っている！」

喜色の忠告を無視してまたカノン砲を発射しようとする。一夏はしてやったりと笑みを浮かべた。

「やっと捕まえたぜ……シャルル！」

「了解！」

「貴様、くっ、離せ！」

「断る」

ワイヤーブレードを一夏から解いて逃げようとするが一夏が自分でワイヤーブレードを掴んでおり身動きがとれなくなる。

シャルルは急接近し、ラウラの腹部に何かを当てた。

「この状態なら外さない。第二世代威力最強を体で味わうといいよ」

「おかわりもあるから遠慮すんなよ！」

シャルルが構えているのは一般的にはパイルバンカーとよばれる武器だった。このパイルバンカーは普通のものとは一味違う。通称『灰色の燐殻』とよばれるこれは従来の使いきりで単発の物とは違い、連続で繰り出すことが出来る。つまり、高威力の攻撃を連続で叩き込むことが出来るのだ。全てがクリーンヒットすればISを簡単に強制解除されることが出来る。

「やああああ！！」

炸薬が爆発し杭がラウラの腹部へ食い込む。シールドエネルギーで身体は傷一つないが衝撃は殺せずラウラが苦痛の表情を浮かべる。

だがまだシールドエネルギーは無くなっていない。『灰色の燐殻』の最大の特徴である連射機能を活かし、シャルルは新たに炸薬を装填する。

「まだまだ行くよ！」

「うぐう……こうなれば！」

ワイヤーブレードが一夏に絡みついてほくことが出来ず、身動きが取れない。一応パートナーでもある喜色もいるが手を借りる気はない。ならば織斑一夏だけは、とラウラは腹部に走る激痛を耐えながらもカノン砲を一夏に向け、ワイヤーブレードを射出する。

「織斑一夏！ 貴様だけは倒す！」

「なっ！？」

追加で射出したワイヤーブレードを一夏の四肢に絡みつかせ、身動きを取れないように拘束する。シャルルが慌ててまた炸薬を爆発させ杭を打ち込むが、このくらいならまだ耐えられると歯を食いしばり我慢する。

「くらえええええ！」

「一夏！？」

さらに打ち込まれる杭。その衝撃がラウラの体に伝わるのと、一夏にカノン砲の砲弾が当たるのは同時だった。度重なる瞬間加速と零落白夜の使用で少なくなってい白式のシールドエネルギーにとどめを指すには砲弾の威力で十分だった。

シュヴァルツェア・レーゲンはパイルバンカーの連撃によりバチバチとショートし、出てきた紫電は強制解除の通知にも見えた。

だが、異変は突然表れた。

14 話目 トーナメント初戦（後書き）

バトルはむりぽ

次の更新は一週間くらい後を予定。

え？ 主人公の専用機がちーと？ さあ？ お、俺はなんにも悪

くねえ！ キャラが暴走したんだ！

さーで、次の更新はヴァルキリートレースシステム戦。

15 話 目

V T シ ス テ ム (前 書 き)

バ
ト
ル
だ
よ
！

だ
め
だ
め
だ
よ
！

15 話目 VT システム

彼女は氣に入らなかった。不愉快だった。その手で殴りつけてやりたかった。彼女が尊敬し目標にしている織斑千冬。その弟が氣に入らない。

考え方が。

目の光が。

脳天気な性格が。

その存在の仕方が。

氣に入らなかった。その弟の姉はなによりも立派だというのに腑抜けた顔が腹が立つ。

彼女は氣に入らなかった。不愉快だった。自分と同じような生き方なのに心を隠すような男が氣に入らなかった。

腑抜けた顔で笑う顔が。

彼女の目的の人物を守るようにする態度が。

同じような経験をしているはずなのに何も思っていない考えが。

強さは一つではないと言う顔が。

氣に入らない。彼女はシンパシーを彼に感じた。だが氣の迷いだと切って捨てた。なぜか？ 簡単な話だ。彼女は強さは攻撃力だけだと考え、彼は強さは複数あると最近考え出したからだ。

人間とはこんなものだ。氣に入らないから氣に入らない。腹が立つから腹が立つ。そんなものだ。

（私は負けるのか？ …… 負けるわけにはいかない！）

彼女には母親も父親もいない。母はフラスコ、父はいかれた科学者だからだ。

彼女は生まれるなり戦闘のための知識を覚えさせられた。彼女は優秀だった。だから実験体にされた。『越界の眼』の実験体にされた。

結果を言えば失敗。彼女は軍の部隊最強の座から転がり落ちた。落ちこぼれの烙印を押され後ろからは嘲笑と侮蔑が降りかかった。彼女は閉じこもった。自分の殻に。

「君が噂の落ちこぼれか。元部隊最強。遺伝子強化試験体か」

「……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。重要なのは君が私の訓練を受けることだ。なに、心配することはない。私が教えるんだすぐに部隊最強に戻る」

織斑千冬に彼女は出会い最強に返り咲いた。だが彼女はそんなことは興味がなかった。

彼女は憧れた。在り方に。強さに。信念に憧れた。彼女は望んだ。

この人のようになりたい。

と心から望んだ。

ある時彼女は千冬に尋ねた。『なぜそんなに強いのか』と。千冬は見たことのない優しい笑みを彼女に向けた。

「私には弟がいる」

「お……とつ……と?」

「あいつを見ていると直感で分かるんだ。強さとはなにか。なんの為にあるかな」

「……フラスコベビーの私には理解できません」

「フラスコベビーは関係ないさ。そして今はわからなくてもいい。日本に来たならあってみるといい」

千冬はさらに優しい笑みを浮かべた。彼女はその笑みにも憧れた。同時に心がなぜかざわついた。

数年後、彼女は日本にやってきた。数年ぶりに会った千冬は彼女に同じような事を言った。

「まだ強さがわかってないみたいだな。私の弟にあってみるといい。それと、もう一人の男もあって損することはないだろう」

もう一人の男をスニーキングしてみたがなにか分かることもなかった。男を見ているとイラついた。

千冬は強さと攻撃力は違うと言った。彼女には分からなかった。だから彼女は織斑一夏を叩きのめすと決めた。そうして千冬に真実を教えようとした。

（力が欲しい！）

（力が欲しい！）

そう願うと彼女の心の奥底で何かがうごめいた。何かは彼女に問いかける。

「汝、力を望むものなり。変革を望め。破壊を尽くせ。さらなる力を求めよ……」

その問いかけに彼女は間も置くことなく答える。

（寄こせ！ あるなら寄こせ！ さあ、早く寄こせ！ 私は、あの男を潰す！ 力を……寄こせ！）

D a m a g e L e v e l …… D
M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t
C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r
V a l k y r i e T r a c e S y s t e m …… b o o t

ヴァルキリートレースシステム起動

「あああああああ！」

ラウラの突然の絶叫とともにシユヴァルツエア・レゲンから電撃が放たれシャルルの身体が吹き飛ばされた。百式を強制解除されていた一夏は気合で顔を上げ、何が起こったかを確かめる。

「ぐ！？ いきなりなに！？」

「山田先生！ 織斑先生！ 不味いよ！ 今すぐ観客を避難、シールドのレベルを引き上げて！」

『蒼崎、何があつた！ カメラが壊れて状況が把握できない！』

一夏がやられ、シャルルが灰色の鱗殻を打ちこんだときから一切を見ていた喜色は明らかな異常を感じ取り、千冬たちに通信をする。通信をしながらもISを強制解除された一夏を守るため、一夏の前に立つ。

「わかんない！ シャルル、一夏は無事！ ラウラ・ボーデヴィツヒの無事は不明！」

『要領を得ていない！ はっきりしろ！』

「いや、だから！ ……なに、あれ……」

『どうした！ おい！』

取りみだす喜色はISの理論を覆す光景をその眼にして自分の目を疑う。視線の先にはシュヴァルツェアレ ゲンがあり、そのISは装甲がとけ、液体のように姿を変えながらラウラの身体を包みこむ。一夏、シャルル、その光景を見ていた人も一つの言葉を思ふか口にする。

「なんだ、あれは……」

ISは初期操縦者適応と形態移行のときにしか変形出来ない。篠

ノ之束が言ったことだ、間違いはないだろう。

それなのに彼らの目には変形するISが映っていた。

溶けた装甲はいきなり変形し、形をつくる。ゆっくりと地面に降りたISの装甲は最小限のアーマーのみで頭部にはフルフェイルスの奥にはセンサーの赤い光が見えた。片手には何かを握っている。

「雪片……」

一夏はその刀を見て息をのむ。それはかつて千冬が振るった刀でありその刀に酷似していた。彼が見間違うことは無い。その刀を間近で目にし、それが振るわれるところを見ていたのだから間違うことなどない。

一夏は身体に鞭を打ち駆けだす。黒いISに向けて。

「うおおおおおお！」

「主人公！？」

駆けだした一夏を止めようとするがその手は届かず宙をきる。

ISは解除され武器は無く、拳だけで殴りかかろうとする一夏にISは武装を中腰に引いて構え、間合いに入るまで静止して一夏が間合いに入るまで待つ。

間合いに一夏が入るなり一気に刀を振り切る。

「それを持つなああああ！」

「なにしてたんだこの馬鹿！」

「ぐう！？」

切り裂かれるはずの一夏は突如後ろに引つ張られ鼻先を刀が掠る。引つ張った喜色はすぐさまISから距離を取る。だが、一夏はまた殴ろうと駆けだそうとする。

「なにしてんだ馬鹿！ 死ぬぞ！」

「あれを振っていいのは千冬姉だけなんだ！」

「意味が分からない！ ISもないのに死ぬだけだ！ 千冬ちゃんはそのんなに取り乱したりはしないよ」

「……あ、ああそうだな、そうだったな」

頭を冷やすことができ、ある程度落ち着いた一夏は黒いISを観察する。黒いISは動かない。なにか理由があるのだろうか。飛ばされていたシャルルが復帰する。

「これはどういうことなの？ いきなりこんなになって……ボーデヴィツヒさん！ ボーデヴィツヒさん！」

「おい、お前！ なにしてんだよ！ なんで千冬姉の雪片を使ってるんだよ！」

「……」

一夏とシャルルの呼びかけにも反応しないISを見て喜色はぽつりと眩く。

「見込み違い。所詮は獣。人の言葉も解さん……か」

「獣？」

「いや、なんでもないよ。一夏、下がって。シャルルも」

「嫌だ。」

一夏を後ろに押しやり前に出た喜色を一夏は手を掴んで引き止めた。喜色は怪訝な顔で振り返る。

「なんで？ 展開はできない、武装は刀一本、技量は初心者、意地だけは一人前。おまけに絶対防御がちゃんと発動するかわからないのに？ 死にたいの？」

「それでも俺は！」

「理由は？ 真つ当な理由なら考慮しないこともないよ」

「……あれは千冬姉のなんだ。千冬姉のデータだ。なのに千冬姉を使ってるんだよ！」

「千冬ちゃんのデータ？ 他人が人の技術を使うってこと？ ……」

「……ああ、VTシステム。それなら尚更行かすわけにはいかないね」

「なんでだよ。張り倒してでもいくぞ」

一夏は怒りを露わに拳を握り込む。今にも殴りかかるような雰囲気だ。喜色は飄々とした態度で話す。

この状況を作り出した元凶はその場に微動だにせず立っている。武器に反応して迎撃する自動プログラムなのだろう。

「だって千冬ちゃんだよ。勝てるの？　　ISも展開できないのに」

「勝てる勝てないじゃないんだよ！」

「知ったことか。戦力外だ、引け」

冷たく言い切る喜色の言葉は一夏の背筋を大きく震わせた。フルフェイスのはずなのに冷酷な視線が一夏を捉える。無意識に一夏は一步下がる。それを見た喜色はふん、と鼻を鳴らした。

「ようするに一夏は千冬ちゃんのデータを盗られたのと、それに飲まれたラウラちゃんが気に入らないんだよね？　　大丈夫だよ。あれは破壊し、ラウラちゃんは助けるから」

その言葉と突風をあとに喜色は黒いISに向かって飛んでいった。

「忠告は無駄になったか。さあ、やろう」

喜色はトリガーを引く。前回と同じようにレーザーが飛び出す。もちろんそこからはずっと引きっぱなしだ。

黒いISは自分に向かって飛んでくるレーザーを手に持った刀で斬りつけた（……………）。

「ええー？　　千冬ちゃん、ちょっとおかしくない？」

斬られたレーザーは全て二つに分かれ黒いISの後ろに着弾した。

着弾したレーザーは壁や地面にぶつかり爆発する。

黒いISは攻撃してきた喜色を敵と認定し、攻撃体勢に移る。

「瞬時加速！？　そんなの聞いてないよ！」

ISは瞬時加速を使用する。喜色と距離を詰める間に居合いをするように腰辺りに刀を構えた。

ただ居合いと侮ってはいけない。居合いの達人の反応速度は0.5を軽くきる。後手に立ったとしても余裕で相手を倒すことができる。その神速をもつ居合いが先手を打ったとしたら。つまり、喜色は絶賛大ピンチと言うことだ。

「んなわけないじゃん」

ISが居合いの間合いに入り、今刀を抜こうとしたとき喜色はクイクブーストで横にかわす。ISは大きく刀を振り抜き僅かに隙ができる。喜色はそこを見逃すことなくトリガーを引く。

レーザーを見てもISは回避をしようとしなない。それどころかまた居合いの構えをとる。

「なにやってんのかな」

喜色は首を傾げる。そのまま見ているとISは肩部分に申し訳程度についたスラスタが大きく開きそこからレーザーを取り込んだ。

「え？　んな馬鹿な」

瞬時加速の仕組みはエネルギーを外部から取りこんで圧縮して放出し爆発的な加速力を得る。要するにエネルギーさえあればどこから取りこもうがどうでもいいのだ。いまISがやったようにレーザ

ーを取りこんで瞬時加速を行うことも理論的には可能であるし、過去に千冬が実際にやって見せた。

そしてエネルギーを得たスラスターは圧縮し放出する。またしても居合いで斬り込んだ。だが、コンピュータは同じことを何度もするかもしれないが喜色は二回も同じことはしない。

「そう同じ手は普通使わないよ」

再度クイックブーストで後ろに移動し、ISの居合いはまた空振った。また僅かに隙が出来る。喜色はそこに向けて今度はトリガーを引かずもう一度クイックブーストを行う。前方に向かって。

クイックブーストの推力で喜色は一気に刀を振り切ったISに向かって距離を詰めた。

「多少早いけどこれで終幕！」

ブレードのある右腕を左から右へと一閃。切り裂かれたISは紫電を発し、動きを止める。

喜色が切ったのはVTシステムを制御する部分とラウラを包み込んでいた部分のみだ。ラウラにけがなどは無い。

外殻の中から出てきたラウラは眼帯がとれて右目が見えていた。だが意識はほとんどなく、すぐに目を閉じ意識を失う。

それを見て喜色はぽつりと呟く。

「やっぱり放つてはおけないかなあ……最後まで敵対心丸出しだったら簡単だったんだと、あんな顔されたらねえ」

喜色は倒れる直前のラウラの表情を見ていた。そしてどんな表情だったかわかるのは喜色のみだ。

15 話目 VTシステム（後書き）

ラウラの心中はもう少しあとにやるつもりです。あそこは時間がわかにくいんです。

瞬時加速ですが、千冬なら簡単にやりそうな気がするんですよ。敵の攻撃を利用することを。
バトルはうただですがご勘弁を。

以下、どうでもいい独り言

随分と朝が寒くなつて毛布にくるまっています。なのに日中は結構暑い。おかげで風邪気味。

次は更識さんが出るよ！ どちらかはあえて言わない。

16話目 生徒会長（前書き）

どうやら

この二次創作は

面白くないようだ

16話目 生徒会長

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため 』

「……………」

「……………」

食堂。一夏と喜色は向かい合って座り何も話さない。二人の前にはそれぞれが頼んだ学食があった。その横でシャルルが我、関せずと言ったように一人パスタを口に運ぶ。

「……………」

「……………」

「あー美味しい。二人も食べたらずらっ やっぱりトーナメントは中止かあ」

三人はついさっきまで教師たちから、主に千冬と真耶から事情聴取を受けていた。ラウラは意識が無いため不参加だった。

事情聴取が終わるなり一夏と喜色は食堂に向かう。一言も話さない二人に愛想をつかしたシャルルはもういいやと、二人に何かあったのかを尋ねるのをやめた。

「……………で、なんではぶててんの？ 主人公は」

「……蒼崎が頼みを聞いてくれないからだろ。転校してきたときから」

「何の話？ 主人公に戦わせなかったことでしょ？」

喜色は一夏が話さないのはあの時、自分が戦わせなかったことだと思っっている。あの時あれほど、ISに生身で殴りかかるほど我を忘れていたのだから。

「それはどうでもいいんだよ。いや、どうでもよくないけど。俺が言いたいのは……」

「言いたいのは？」

拳を握り込む一夏に首を傾げる喜色、無視を決め込んで黙々と食べるシャルルを見て、話しかけようとする猛者はいない。

そして一夏はバツと立ち上がり人差し指で喜色を指差す。

「蒼崎がいつまでも主人公としか言わないことだよ！ なんて事情聴取のときも主人公なんだよ！ 山田先生がー々困ってただろ！ いい加減一夏って呼べよ！ それがいやなら織斑でもいいから名前で呼んでくれよ！」

「やだ」

即答である。なにか信念でもあるのだろうか。

「なんでだよ、箒や鈴音やシャルル、拳げ句には千冬姉も名前で呼ぶなのになんで俺だけ主人公っていう有象無象の呼び方なんだよ！」

「えー、だって主人公じゃん。弾ちゃんの言うとおりそのイケメンフェイスで女の園にいて、ハーレム構築中の主人公のほかに誰が主人公っていうのさ」

「ほらモブキャラっぽい弾さえも名前で呼んでる！　誰がハーレム構築してるんだよ！　名前で呼んで見ろよ！　さあ、レッツスピーク！」

「主人公」

うがー。頭を振り回す一夏を見てシャルルは小さく溜め息をついた。実はシャルルも一夏がはぶてているのは戦わせなかったからだと思っていた。だがどうやら勘違いだったらしい。

その横で一夏は喜色に詰め寄る。

「なんか恨みでもってあるの！？」

「ふふん、無いよ」

ふつと鼻で笑った喜色を見てまたうがー。暖簾に腕押し、柳のようにのらりくらりと答える喜色は楽しそうだ。

と、そこにフラフラと箒が一夏に近づいてきた。顔を真っ赤に問いかける。

「い、一夏！　この前のお前の部屋の前の約束だがっ」

「ん？　この前……？」

「わ、私が優勝したら付き合っという話だ」

「いいぜ」

「ほ、本当か!？」

箒は一夏に詰め寄り興奮しながら問いかける。それに対して一夏は何を当たり前のことを言っているというような顔で答えた。

「そのくらいお安い御用だ」

「え？ お安い御用？」

「おう、買い物に付き合うくらいな」

「ほら、見てよシャルルちゃん。これが主人公じゃなかったらなにが主人公だって思うよね」

「確かにね。わざとやってるのかって思う時があるよ」

突然動きを止めた箒を不思議そうに見つめる一夏の横で二人は話しあう。

喜色は同意を求めるように言い、シャルルはそれに同意する。

「そんなことだろうと思ったわ!」

「ぐえっ!？」

腰のひねりを入れたほればれするような勢いの正拳突きが一夏の鳩尾にミラクルヒットする。だが、篠ノ之箒はここで手を止めるわけがない。

足を大きく振りかぶる。

「ふん！」

「ぐほあ！？」

またしても蹴りは綺麗に決まり一夏の鳩尾に追撃をかけた。二連続鳩尾にヒットしたダメージは決して軽いわけがなく一夏はその場に倒れ込む。倒れ込んだ一夏を一瞥し箒はドスドスと食堂を去っていった。

「ほらね、言ったとおりでしょ？」

「本当だ。僕も今度から主人公って呼んでみようかな？」

「そ、それだけはやめてくれ。頼むから」

懇願する一夏にシャルルはニコリと真意のわからない笑みを浮かべた。

「あ、そうだ、ISにオープンチャンネルとプライベートチャンネル以外に通信手段ってあった？」

「うーん、聞いたことがない……いや、もしかして相互意識干渉かもしれない」

「そ、相互意識干渉？　なんだそれは？」

まだ痛む腹部を撫でながら少し回復した一夏は聞き慣れない単語に首を傾げた。

「IS 同士の情報交換ネットワークの影響で操縦者同士の波長があと起こるらしいことだよ」

「ふーん、また頭の痛くなりそうな話だな。でも蒼崎、なんでそんな話を？」

「まあ、気になったんだよ」

「ふふーんそうかそうか」

「いきなりなに？」

一夏はニヤリと意地の悪い笑みを顔全体に広げる。

「その相互意識干渉の相手ってラウラ・ボーデヴィッヒだろ。ふっふーん」

「さ、さあね？ 真実は僕のみぞ知る、だよ」

「なにを話したんだなにを？ ほらとつと白状するんだ」

オラオラと催促する一夏から逃げようとするがささずシャルルが回り込んで逃げ道を塞ぐ。

残念！ 喜色に逃げ場はない！

「い、いや、ただ強さはなにって聞かれたただだよ」

「へ？ なんだそんなことか。蒼崎はちょいちょいラウラを気にかけてたみたいだけど違ったみたいだな」

「そんなことないよ！　僕がラウラちゃんを気にかける？　あ
りえないよ！」

「ダウト。目が泳いでる」

「あ、あはははははははは」

笑ってごまかそうとする喜色をジト目で一夏とシャルルは見つめ
続けるが笑い続けるばかりで埒が明かない。一夏がこうなれば、と
シャルルに作戦を教えようとする。

そこに一人小さな人影が三人に近づいてきた。

「三人ともここにいたんですね。さっきはお疲れさまでした」

「あ、麻耶ちゃん。いいところに！　なにあつたの？　あつたんだ
よね？　あるんでしょ！？」

「蒼崎、逃げられると思うなよ。山田先生こそずっと書いてばかり
で疲れませんでした？」

ちようどいいと話を必死に逸らそうとする喜色に一夏が釘をさし
ておく。麻耶は胸を張り、えへんと答える。

「大丈夫ですよ。私はああいう地味なことが得意なんですよ。それ
ですね、蒼崎さんの言うとおりいいことがありますよ！」

「いいこと？」

「はい！　今日から男子の大浴場が解禁です！」

わーいと両手を上げ万歳をする麻耶の胸の部分に一夏の目はくぎ付けになる。そんな一夏をシャルルが冷たく見つめる。その視線に若干居心地が悪くなり咳払いをして目を逸らす。

「本当ですか？ 来月からだとばかり思っていました」

「今日、ボイラー点検があつたんですよー。それで点検はもう終わってるので男子の三人に使ってもらおうと織斑先生がおっしゃられたんですよ。もともと生徒は使えない日ですからねー」

「よっしゃあ！ ありがとうございます！」

麻耶の両手を一夏は握りしめる。わたわたと慌てる麻耶の横で喜色がぼそりと声を漏らす。

「シャルルちゃんがいるのに？ どうするのさ」

「あ…… 本当だ。どうしようか」

「どうかしましたかー？ ほら、着替えを取りに行ってきてください。私は脱衣場のまえでまっていますからー」

二人でボソボソと話す喜色とシャルルを見て首を傾げたが用件を伝えた麻耶はすたすたと食堂から去っていった。

「それじゃ、また後で」

そう言って部屋に入ったシャルルと一夏を後にして喜色は寮監室のとなりにある部屋の前に立つ。

「ん？」

部屋の前に立ち喜色は違和感を感じた。確証は無かったが直感的に違和感を感じた。とりあえず部屋に入ってみることにした。隠し持った武器をいつでも取り出せるようにして音をたてずに扉を開ける。

部屋を見回すが特に異常は見つからない。

「（気のせい？ 少し警戒しすぎか？）」

一応シャワールームをのぞき込んだがやはり誰もいない。吐息をつき警戒することを止めて足音を立てないように歩くのも止める。いつもと同じようにベッドに向けてダイブする。

「とう！」

「……きゃっ」

「え？」

飛び込んだベッドは小さく驚いた声をあげた。それだけではなく喜色の顔には布団ではない、別の柔らかい感覚がする。

慌てながらも体は冷静に動く。右腕に隠し持ったナイフを素早く振り下ろした。

「あら、怖いわねえ。おねーさん怖い人は嫌いよ?」

「……ちっ」

振り下ろしたナイフは扇子によって止められる。扇子によってナイフを受け止めて傷一つない扇子は、はたしてどんな素材でできているのだろうか。

「初めまして。今日来たのはあなたに聞きたい」

「……」

自己紹介をしようと話した彼女から喜色は距離をとる。彼女が身につけている服はシャツのみであった。喜色が着地したときに床が音を立てる。彼女がいる場所からほんの三步の間合いしかない。

「侵入者か。目的は……まあ、俺かISだろうな。居場所を奪われてはたまらん。悪いが死んでもらうぞ」

足に力を入れナイフを構えて飛びかかる。床がへこむ。

「あら、聞いた話とは……随分っ! 違うわね」

その鋭い一撃を彼女は受け止めるのではなく受け流し、隙の見える脇腹に脚を振る。喜色は不安定な体勢だが空いていた左腕で防ぐ。骨がぶつかり鈍い音をたてる。

「聞いた話が全てではないということだ。良かったな。また一つ偉くなったぞ」

「わー嬉しい。それにしてもいきなり襲いかかってきたのは何故？」

「言う必要があるか？ まあ、教えてやろう。……死にたくないからだよ」

「嘘ね。死にたくないからって言うてもいきなり人を殺す人なんていないわよっ」

喜色が持っているのは殺傷力の高いナイフ、彼女が持っているのは戦いには向くことのない扇子。このままではやられる、と彼女は喜色を押し倒して危険を減らそうとする。

「くっ！ ……この！」

「ほら！ そんな危ないものなんて離しなさい！」

「離れたらお前が使うだろ！ 俺はまだ死にたくない！」

「使わないわよ！ 危ないでしょ！」

ごろごろスンドンゴロンゴロンボタンバタ

上へ下へと入れ替わり立ち替わり纏れ合う。二人は自分が優位に立つ事に必死で立てる音はすでに部屋の外まで響き渡るほど大きくなっていた。

部屋の外まで音が聞こえたならそれを聞いた人は疑問に思うことが普通だ。その音を聞いて扉をたたく人がいた。

「……さっきから音がすごい……けど、大丈夫？」

必死な二人は扉越しに開かれた声に気付かず、ドタバタと音をたて続ける。

「この……あつ」

「フフフ、ようやくゆっくりと話せるわね」

「……話す？ 脅迫の間違いだろう？」

喜色は手からナイフを奪われ腹の上に乗られる。悔しそうな表情で唇をかむ喜色とは対照的にしてやったりと口角を吊り上げる彼女。

彼女の名は更識楯無。IS学園生徒会長で国家代表をつとめている。楯無というのは更識家当主の名前だとか優秀な姉に劣等感を感じる妹がいるがいまは話す必要はないだろう。

彼女は先日アリーナであった爆発の原因をつきとめるためにその日のアリーナ使用者の喜色の部屋に潜り込んだのだ。

まさか喜色がベッドにダイブし、人がいると把握したとたんにナイフを突き刺してくるとは思わず、彼女の心臓は今激しく胸を打っていた。

「あら、素直に話せばおねーさん、優しくするわよ？」

「残念だが何故男なのにISを動かせるかなんて知らんぞ」

指を突き出し不規則にうねうねと動く様子に喜色の顔が引きつる。その顔が引きつる原因の楯無の顔は満面の笑みを浮かべていた。

「（どうしよう……急にバタバタし始めた……）」

彼女は寮監室の隣の部屋から聞こえてくる音に困惑していた。

彼女は更識簪。更識楯無の妹である。特徴としてあげられるのは眼鏡型の投影ディスプレイだろうか。

アリーナで異変が起こり、部屋で待機していた時に隣から突然、人が暴れるような音が聞こえてきたのだ。彼女は少し様子を見るつもりで扉の前に立ったがいつまで経っても音が止む気配はない。

今までこの部屋から大きな物音がする事など無かった。だからこそ心配なのだ。

「（侵入者……はないよね。IS学園だもん……でも、……もしかしたら……）」

簪は悩む。ここでなにがあつたか確かめるか、放っておくか。

「（……あ、静かになった。見てみようかな?）」

突然物音がしなくなる。簪は何があつたのか気になってしかたがない。何か非日常的なことが起こっている気がした。彼女は好奇心を満たすために勇気を振り絞る。

「さつきからうるさい、けど、何かあった……の？」

一応ノックをしたが返事がない。ならば突入しかあるまい、と扉を開けた。

「……え？ ……え？」

「さあ、言いなさい。……あら？」

「知らんと言っている、だ、ろ……う？」

扉を壊す勢いで開けた簪は目の前の光景が信じられず、信じたくなく扉を一度閉める。

パタン、ガチャ

「これは、夢？ 幻覚？」

簪は目の前の光景を信じたくなかった。なぜか？

自分の姉がシャツ一枚で男の上に跨っていたから。表情を見ると注視しなくてもわかるほどに顔が赤い。跨られた男の顔も赤い。

彼女が倒れると予想するのは容易いことだった。

16 話目 生徒会長（後書き）

シリアルが続いていたので少し柔らかめのギャグっぽい話をえ？ ギャグじゃない？

…… またまた。御冗談を。

分かってるさ自分に文才なんてないことぐらいいいい！

それで、楯無姉妹登場！

なんか違和感が半端ない。

以下、どうでもいい独り言
特になし

あれ、別に書く必要なくね？

17 話目 生徒会長の相談（前書き）

サブタイトル 詐欺

17 話目 生徒会長の相談

寮監室の隣の部屋。喜色の部屋には三人が向かい合って座っていた。一人は部屋の住人の喜色である。もう二人は更識姉妹である。眼鏡型投影ディスプレイをかけているほうが簪、シャツ一枚に扇子を広げているのが楯無だ。

喜色はこめかみを押さえながら確認する。

「僕の部屋に入り込んだ理由はアリーナでの爆発の原因を調べるためで、侵入者とかじゃなくて生徒会長の義務として入り込んだと？」

「そういうこと」

楯無の語尾にハートマークでもつきそうな口調に喜色の口角がピクピクと動いた。

「え……でもどうして、馬乗りに……？」

「「言わないでいいから」」

喜色と楯無の声が重なり合う。そのときのことを思い出したのか楯無の顔に少し赤みが差す。自分の妹に男の上に跨り、頬を染めていたところを見られたからだろう。

「まず一つ。不法侵入って言葉、知ってる？ 二つ目、なんでベツドに隠れてたの？ 三つ目、どうしてさっきと違ってそんなによそよそしいの？」

「ファーストインパクトは大事だと思わない？」

「ファーストコンタクトって大事だと思わない？」

しれつと答える楯無に喜色は呆れたような表情をうかべる。

「で、なにしに来たの？」

「この前アリーナで爆発があったでしょう？　その原因を探りに来たのよ。その日アリーナを使ったのはあなただけだったし」

「ああ、なんだ、そんなこと。千冬ちゃんに聞けばよかったのに」

首を傾げ続きを待つ楯無に専用機のことを説明する。

アンサーテインリイ、アサルトアーマーを詳細は伏せて話した。流石、生徒会長といったところか、全身装甲やコジマ粒子の非常識さに目を見張る。

その横で簪が興味津々で耳を傾けていたのを喜色は知っていたが、聞かれても損失はないと知らない振りをする。

簪は何か思うことがあったのか突然立ち上がり部屋に戻る。

「……私は、戻るけど、あまりうるさくしないでほしい。……それじゃあ」

「あ、ちよつと、簪ちゃん！」

かけ出て行った簪を引き留めようと楯無は声をかけるが、すでに遅く扉はボタンと音を立てて閉められた。

「……ああ」

「なんかいろいろ有るみたいだけど、喧嘩したの？」

ぼつりと漏らした声に喜色は話しかけた。彼女はしばらく黙っていたが、何か自分たちの隙間を埋める打開策を出してくれるかもしれないと淡い期待を持つ。

「どこから話したらいいのかしら……そうね、私がロシアの国家代表ということは知ってるかしら」

「え、なに？　重い話？　自分のことで精一杯なんで結構です」

「い・い・か・ら・聞・き・な・さ・い」

どうでも良さに顔を逸らした彼を楯無は腕力で顔を自分に向わせる。

「織斑くんの専用機に掛かりっきりのせいであの子の専用機は実質開発中断状態になっているの。それに私への劣等感もプラスされて専用機を自分で作るって言い出してね……しかもたった一人で作るうとしてるのよ。私だってたくさんの人に手伝ってもらったのに」

「ふーん」

「他に反応はないの？　生徒会長が悩みを打ち明けているっていうのに」

「いやいや、僕になにが出来るって言うのさ。一般常識の欠けてる僕に言ってもねえ？　ま、こういうのを提供するってのもあるけ

ど？」

ジト目で見つめられながら喜色は机に安置されているノートPCに首に掛けたメモリーを差し込み、何度かクリックとスクロールを繰り返す。何をしているのかと楯無が後ろからディスプレイを覗き込む。

「……ねえ」

「あら、どうかしたの？」

「当たってるんだけど」

「当ててるのよ」

椅子に座った喜色の後ろからのぞき込むということは必然的に体の一部が当たることになる。この場合は喜色の首もとに楯無の豊かな胸が押しつけられている。おいちよつと替われ。

「ま、嫌な感触じゃないからいいけど。……こんなのを渡すことを口実に話す機会を作ってみる？」

「ナニコレ」

楯無が片言になるほどのスペックを持つ銃、それは喜色のISの性能制限を解除した出力には及ばないが、現行のIS武装を越える性能を持っていた。具体的に言えば十発ほど命中すれば勝てるという性能は個人が持つにはあまりにも大きすぎるものだ。だが楯無は今黙っておくことにする。まだ喜色が危険な人物だと確認したわけではないから。

「専用機を作ろうとしてるんでしょ？　ならそれを渡してお姉ちゃんすごい　ってなるかもよ？　あ、これ天災の考えだ」

「いや、明らかにオーバースペックよ、それ。第一に簪ちゃん、私と目を合わせてくれないのよ。本音から様子は聞いてるけど……」

「それなら地道に近寄れば？」

「ああん、冷たいのね」

打つ手なしと表示していたデータを閉じ、クルリと振り返る。楯無はどうしたものかといつものように考え込む。

「他に手段が無い……ことも無いけど？」

「なにか問題があるの？」

顔を少ししかめる喜色に藁にもすがる思いで聞き返す。それほど更識姉妹の関係は亀裂が入っているのだ。

「確実にというか120パーセント惚れる……」

「え？」

「絶対にその人の前だと顔が真っ赤になってしおらしくなる」

「いや、そういうことじゃなくてね」

「もう世界が収束するというか運命というか、デレッデレになる」

「それってまさか……」

喜色は大きく頷き楯無の考えを肯定し、その更識姉妹の関係を修復することのできる人の名前を口にする。

「そう、全男性の敵、女性の天敵、歩くフラグメーカー、鈍感神、その鈍感さに涙を流した女性は数知れず。 名前は……… 織斑、一夏だ……」

「ダメよ！ 簪ちゃんが彼の毒牙にかかるなんて認められないわ！」

捻り出すようにして言った名前を聞くなり楯無は却下する。喜色が言っていることは実際に真実なのだから本当に困るのだ。

「えー他にどうしようもないよ」

「……そうね、最終手段として覚えておくとするわ」

絶望する一歩手前の表情でフラフラとした足取りで部屋を出ようとする楯無に後ろから声がかかる。

「ま、非常識な僕でもいいなら何時でも話とか愚痴なら聞くから好きなきに来なよ。次はお菓子と漫画くらいならあるから」

「そう、気が向けば来るわね。それじゃ」

ニコリと笑いかけて喜色は顔が赤くなる。楯無はそれを見てさらに笑みを浮かべて部屋から出て行った。残された喜色は一言もらず。

「いままでいやらしい笑いだったのに素で笑うとか……不意打ちすぎるよ」

彼女は考える。

強さとはなんだろうか。

彼に力は強さではないと言われた時から考える。

力ではないのなら強さとはなんだろうか。

『知るわけないじゃん。まあ、力つてのも間違いじゃないと思うけどね』

ならば何故あの時私の強さを否定した。

『いや、僕も昔は叩きのめすのが強さだと思ってたんだよ』

いまはどうなんだ。

『強さっていう答えは一つだけじゃないって思ってるよ』

お前の答えは何なんだ？

『うーん、今は守り抜くってことかな。居場所と約束を』

居場所？

『そう、居場所。僕でも安心して行られる場所。一夏が篝ちゃん、鈴音ちゃん、セシリアちゃん、シャルルちゃんに追いかけて僕がさらにガソリンを投げ込む。そんな風に過ごせるような場所を守る抜くことだよ。ああ、そこにラウラちゃんがいるのも悪くないね。約束の事は教えてあげない』

何故私がそこに入る？

『え？ 入りたくないの？』

別に……

『なんで？ 楽しいよ？ 僕と一緒にいても何にも言わない人たちだよ？』

私の存在意義は戦うことだけだから……

『じゃあさ、他の意義を探せばいいじゃん。人生は長いんだから』

でも

『ま、逃げるのは無理だと思うよ。千冬ちゃんに一夏がいるから。それに……』

それに？

『僕もいるからね』

「う、あ」

ラウラの意識が深い場所から浮かび上がる。優しい光が目にはすのを感じてゆつくりと目を開ける。

「気がついたか」

自らが敬愛する人物の声が聞こえた。

「何が……あつたのですか？」

「全身に無理な負荷がかかり筋肉疲労と打撲がある。無理をするな」

自分を見つめる赤と金の瞳を見て千冬は彼女が何があつたか聞くまで全身に走る痛みをこらえ続けると悟った。

「機密事項だが……。IS条約で禁止されているVTシステムが以前のISに積まれていた」

「……」

「様々な条件と操縦者の意思……いや、願望と言ったほうがいいか。それらが揃うと発動するようになっていた。学園がドイツ軍に問い合わせている」

ラウラの手はシーツを握り締め、視線は安定せずに揺れ動く。

「私が……望んだからですね」

あなたになることを。そして力を。

口には出さなかった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「はいっ!？」

突然の声に驚き顔を跳ねあげる。千冬の顔はいつも見ていたように自信に満ち溢れている。

「お前は誰だ? 何故存在している?」

「わ、私は……」

「答えられないのならそれでいい。自分の名前も存在意義も答えも自分で探せ。ああ、逃げることは許さん。逃げるならば四肢くらいはもらっていくぞ」

ニヤリと唇を吊り上げ、言うことは言ったと踵を返して出て行く千冬の背をただ見ていることしかラウラはできなかった。

しばらくそのままでしたが不意に笑いがこみ上げてきた。

「ククク……卑怯すぎるじゃないか。教官だけでも無理なのにあいっ
つがいるなんて……無理に決まっているじゃないか」

扉がたたかれる。

「まあ、長い人生だ。じっくりと決めていけばいい。なにせ……」

こみあげてくる笑いを必死にこらえる。

「ラウラちゃん……あり、起きてる」

「お前もいるんだからな。なあ、喜色？」

17 話目 生徒会長の相談（後書き）

なんぞこれ。

ラウラが夢見る乙女になりそうな……。

生徒会長もすぐに再登場の予定！ 楯無の口調に違和感。誰か教えてほしいなあ（チラッチラッ

さて、二巻もこれで終わりました。え？ ラウラのチューが無い？ んなことチェリーボーイの自分が書けるわけじゃないですよ。まあ、したことはしておく予定ですが。なにを、とは言いません。

さあ、三巻の予定ですが、覚えてます？ 喜色のISはまだ適応化が済んでいないことを。いろいろと非常識な喜色のISですが、さらに非常識になります。超非常識です。そして三巻といえば束さんの出番ですよ。伝わっているといいんですが、喜色は束に対し非常に敵意を持っています。喜色の過去のことも挟みます。

ネタバレにもならないネタバレはここまでで、感想とお気に入り登録ほしいなあ。

18話目 ある日の一部（前書き）

久しぶりの更新

18話目 ある日の一部

織斑一夏の朝は早い。5時には既に起きており、その日の授業の予習をする。

今日もいつも通り椅子に座り教科書とにらみ合いながら予習をする。

「瞬時加速は……エネルギーをどうするんだっけ」

はかどっているとは言い難いが。だがそれでも十分だ。予習は覚えるものではない。その日に行われる授業がどんなことをするのか理解するというのが大事なのである。

例えるなら人の話を聞く際にまずどのようなことを話すかを言うて話を始めるのと、いきなり本題に入るのでは話の把握のしようがとても違ってくる。

一夏がそのことを知って行っているのかは定かではないが、決して悪いことではない。

6時。寮が少し騒がしくなってくる。生徒たちが起き出す時間帯だ。一夏は固まった筋肉をほぐしながら制服に着替える。いつもなら着替えたあとは食堂へ朝食をとりに行くのだが、今日は少し違ふようだ。

「うわあああああ!？」

朝の静かな空気を破るのは一夏ではない別の男の声。その声は寮中に響き渡った。

「な、なんだ!？」

自分は叫んでいないしシャルルの声はここまで低くない。第一にシャルルの本当の性別は女だ。とすると、この声を出した人物は一人しかない。

一夏は寮監室の隣の部屋に向けて走る。

「喜色! どうした!」

走って向かう部屋は喜色の部屋。申し訳ないと思いつつも絶叫するほどのことがあったようなので、扉を蹴り開ける。

部屋に飛び込んだ一夏は目にうつった光景に驚愕する。

「む? 織斑か。まだ朝も早いうちに人の部屋に突入するとは礼儀がなっていないな」

「朝早くに男の上に裸で跨っているやつに言われたくない!」

ベッドの上には泡を吹いて気絶している喜色とその上に裸で跨っているラウラがいた。

ラウラは失礼なという表情で少し眉間にシワをよせた。

「細かいことは気にするな。夫婦とは包み隠さないものなのだからな」

「誰と誰が夫婦だって?」

「私と喜色に決まっているだろう。他に誰がいる」

フンと鼻を鳴らすラウラを見て一夏はため息をつく。

「はあ、あのな、ラウラと喜色が教室でキスをしたのは見たけどな女の子が思春期の男の部屋に入るのはマズいってわかるだろ？」

「なにがマズいのだ？」

首を傾げるラウラは嘘や一夏をからかっているようには見えず、本心から言っているようだ。

1ヶ月ほどと思春期の女子と一夏が言える話ではないが、なにがマズいかを説明しよう和一夏は唇を湿らせる。

「思春期ってのは大人に近づく時期だったり異性を意識し始める年だったり、体つきも男は男らしく、女は女らしくなる時期なんだ。考え方も変わってくるし、異性に興味を持つ。言いくいけど邪な考えもしてしまう。ここまで言えば俺が言いたいことはわかるよな？」

「さっぱりわからん」

即答である。にやけもせず本当に意味が分からないようなラウラを見て一夏はがっくりと肩を落とす。

今度千冬姉に教えるように言おうかと考えるそばでラウラはもぞもぞと気絶した喜色の横に潜り込む。

「だからそれが駄目なんだって！」

「織斑、ボーデヴィツヒなにをしている」

「げっ！」

話に通じないラウラに困った顔を向ける一夏の後ろから聞き覚えのある声がした。

ゆっくりと振り向くとジャージを着て顔に不機嫌ですと表示を貼り付けた千冬が扉の横で腕を組んでいた。

「い、いや、千冬姉、俺は喜色の声が聞こえたから……」

「ふん、おかげで目が覚めたよ。して、ボーデヴィツヒは何故裸で男の部屋にしかも布団に入って添い寝をしている」

「夫婦は包み隠さぬものだからです」

「千冬姉、一から話さないと理解できないと思う。さっき俺も説明しようとしたから」

「……そのようだな。で？」

先ほどと同じように首を傾げるラウラを見て千冬はこめかみを押さえたため息をつく。そしてまだ気絶している喜色にギロリと目を向ける。

「こいつはいつまで寝ている。いつものコイツなら部屋に忍び込むと起きるんだがな」

喜色を見ながら首を傾げる彼女は以前この部屋に忍び込んだことがある。忍び込んだ際は気配も音も消していたが何故か喜色がナイフを持って飛びかかってこられた。もちろん実力行使で叩きつけてノックダウンさせたが。彼女が疑問に思うのは自他ともに認める強者である自分が忍びこんだときは気付いたくせに、大きな音を開けて入ってきた今日は飛び起きもしない喜色の事だ。

「本当に何者なんだろうな、コイツは」

「え？ 喜色は喜色だろ？」

「私の嫁でもあります」

「……まあ、いいか」

微妙に噛み合わない一夏とラウラを見て千冬は少し口を釣り上げた。

「蒼崎、いい加減に起きろ」

「いたあああ！？」

どこから取り出した出席簿を喜色に振り下ろす。小気味よい音とは正反対の喜色の悲鳴が寮に響き渡った。

「ふーん、ラウラちゃんが裸でいたから気絶、ねえ？」

生徒会室には二人の男女がいた。一人は紅茶を飲み、一人はお茶

を啜る。二人の目の前には超高級菓子の詰められた箱がある。

「それってちょっと純情すぎるわよ？」

「よし、楯無ちゃんが起きたら隣に全裸の男がいたらどうする？」

「握りつぶすわ。おねーさん、上品だからナニがと言わないけど」

「ヤバい。いまキュツてきた。目が本気だった」

キラリと目を光らせた楯無をみて喜色はある部分が縮まる感覚を覚えた。

「やあねえ、冗談に決まってるわよ。冗談」

「ダウト。まあいいや。なんで呼んだの？」

本来生徒会室には生徒会役員以外は入室することはできない。今日は生徒会役員はおらず、いるのは楯無と喜色だけだ。学園最強の生徒会長がいる部屋に盗聴器を仕掛ける人がいるわけもなく、扉の前で盗み聞きをしようとする人もいない。よって今この部屋は内緒話や聞かれたくない話、聞かれてはならない話をするにはうってつけの場所だ。

「あら、わかってるんじゃないの？」

「さあ？　僕は呼ばれたから来たただだよ。適応化の時間を減らしてね。」

最後の一文を聞いて楯無は少し目を見開く。

「あら？ アナタのISが来たのは1ヶ月くらい前よね？ も
うとつくの昔に済んでいてもいいと思うのだけど」

「うん、僕も予想外だったよ。ISを装着した時間じゃなくて装着
して戦わないといけなかったからね」

ISの専用機は世の中に二つと無い単一品だ。適応化のしかたも
様々だ。喜色のISは適応化に必要な時間は50時間。だが、一つ
どうしようもなく面倒くさい条件があった。

『表示された時間は稼働時間ではなく戦闘時間とする』
つまり、戦った時間が50時間でないと適応化は完了しないのだ。

「ふーん、随分と個性的なISねえ。おねーさん、ちょっと調べた
くなっちゃった」

甘ったるい声で耳を、手を組み腕で胸を寄せて喜色の視覚を攻撃
する。一夏あたりなら二つ返事で差し出すだろうが普通の人間とは
一つ二つどころではなく、二桁単位で違う喜色は目を逸らしながら
箱に入った和菓子を口に入れる。

「あー流石更識。出てくるものが全てが凄いね」

「あら、そっけない」

何ともないように見える喜色だがそんなことはない。表面上は何
も思っていないような態度をとっているが心臓は激しく脈打ち一歩
気を抜けば鼻から血液が飛び出す寸前だ。

意外とシャイボーイなのである。

「それで、なんで呼んだの？　また妹ちゃんの相談？」

「今回は簪ちゃんのことじゃないわ。あなたのISのことよ」

和気あいあいとした空気がピシッと張り詰める。それを感じ喜色も目を楯無にむける。

「アンサーテインリイがどうかした？　コジマ粒子が漏れ出した？」

「報告にあつた超有害物質ね。大丈夫よ、それはないわ。ただね、もう疲れたのよ」

「なにが？」

疲れたと言う楯無の目元をよく見るとうつすらと隈があつた。言われてわかる程度の物だが疲れていることにはわりはない。

「あなたと織斑くんのISの所属についてよ。もうおはようからおやすみまでひっきりなし」

世界に二人しかいない男のIS操縦者。一人はすでに単一能力がワン・オフ・アビリティ発現している。しかもブリュンヒルデと同じ単一能力が。さらにブリュンヒルデの弟である。見る人が見ればカモがネギを背負って火のついた鍋に入っているように見えるだろう。

もう一人はこれと言った特徴はないがISが異常だ。ISの生みの親『篠ノ之束』が開発した技術（本当は違うのだが）を使い、篠ノ之束ほどではないが天才たちが手掛けた渾身の力作だ。腹を空かせたライオンの前にシマウマが火に焼かれながら自分で塩と胡椒を

かけているようなものだろう。

「えーそれだけのことで呼んだの？」

この二人の所属は決まっていない。決めようとすらしていない。いかなる権力も無効になるIS学園でもこれには辟易していた。

「……それだけの、こと？　ごめんなさい、おねーさんちよつと耳の調子が悪いみたい」

しかもその矛先はIS学園生徒会長の楯無に向かう。ただのIS学園教師に話してもしかたないという理由で。

「だって主人公は千冬ちゃんの弟だよ？　千冬ちゃんが盾とか最強すぎるよ。僕だって建て前はあの女が開発したことになってる技術を使ってるんだよ？　機嫌損ねたらその国のISが壊れるかもね」

「……！　それだっ……！　それだっ……！　まさにっ！　圧倒的な切り札っ……！」

「ほらそんなことでしょ？」

「ええ、そうね。そんなことだったわね。これでジャイアニズム満々のあの国を黙らせられるわ！」

憑き物が落ちたようにすっきりとした笑顔を見せる楯無はどこかの国に恨みがあるのか、背中に炎が見えるような気がするほど何かに燃え上がっていた。

「それじゃ、僕は帰るね。合宿も近いし適応化させとかないといけないから。ばいばー……い、っ!？」

「あら、まだ話は終わってないわよ？」

用は済んだと退散しようとする喜色の制服の襟が引つ張られ、カエルが潰されたような声が出る。せき込みながらも振り向くと腰に右手を当て左手には開いた扇子をもった楯無が一人。扇子にはでかでかと一文字。

『次』

「えー？ 簡潔ってところはいいいけども少し女の子らしくしたら？」

「更識頭首に女の子らしさなんて必要ないのよん」

「女の子なのね。確か対暗部用暗部だっけ？ 大変だね。暗部ってスパイのことでしょ？ 007みたいなのはいるの？」

少し目を輝かせる喜色。やはりスパイだとかアサシンだとかは男の心を擽るのだろうか。

「いるわよー。未来から来たロボットみたいな人もいるわよ」

「T-1000型の？ ならエッ イオさんもいる？」

「その人はいないけどその人の祖先っぽい人ならいるわよ」

「マジで？ ヤバいものすごく会ってみたい」

「また今度、機会があればね。今日あなたを呼んだのは簪ちゃんの件よ」

流れかけた話を取り直す。喜色は眉を顰める。

「今日は簪ちゃんの話じゃないんじゃない？ 生徒会長が嘘についていいの？」

嫌そうな顔をして喜色はさらにISの適応化の時間が潰れたと思う。嫌そうな顔をした喜色を見ても楯無はさり気なく無視をして話を続ける。

「今の私は生徒会長ではないわ。簪ちゃんの姉の楯無としてここにいるわ」

「そんなことを言っても他人から見れば生徒会長更識楯無なわけで」

「姉のくせにその妹に避けられてたら世話ないよね」

「ぐっ！」

痛いところを突かれたのか胸を押さえる。

「何年話してないかも聞いてないし妹ちゃんのこととかわかんないしい？」

「ふっ……的確に痛いところばかり突いてくるじゃないの……」

今にも吐血しそうな表情で胸を押さえる。喜色は今さっき立った椅子にもう一度座り、新しくお茶を注ぐ。

茶菓子をパクリと一口食べてため息をつく。

「で？　その妹ちゃんとうしたいの？　仲良くなりたいの？」

「そうね、一緒に出かけるくらいかしら……」

「どこに？　IS研究所とか？」

喜色は少し温めのお茶を飲む。

「簪ちゃんとIS研究所……。簪ちゃんの真剣な眼差し……。それでいきましよう！」

吹き出す。

「ブブツ！？　え、本気で言ってるの？」

「汚いわねえ。本気よ。帰りの車で肩に寄りかかる簪ちゃんが簡単に想像できたわ」

吹き出したお茶を拭いながら思わず口が開きっぱなしになってしまふ。原因の楯無は頬を若干染めながら自分の体を抱く。そこまでみた喜色はもう、投げ出すように眩く。

「だめだこりゃ。カリスマはすごいけどコミュニケーションがダメだ」

「家についたら簪ちゃんを揺すって起こしたら眠そうな目で「おねえちゃん？」って……。キヤーツ」

暴走。妄想が一人走りし手が着けられない。

喜色はお茶を飲み干し茶菓子を食べて席を立つ。楯無が気づく様子はなく、暴走は止まりそうにない。

「まあ主人公にでも話してみなよ。それじゃ、僕は水着買いに行くからばいばーい」

大きめの音をたてて扉は閉まる。未だに楯無は暴走を続ける。

「ベッドに運んであげたら服を離してくれなくてそこからなし崩し的に……キヤーツキヤーツ」

……しばらく放っておいても平気だろう。

数時間後、生徒会室に入ったのほほんとした子も流石にその状態も理解できなかったらしい。

18話目 ある日の一部（後書き）

大変申し訳ない。アーマードコアフォーアンサーやってました。ウインディさんが強い強い。何度失敗したことか。虐殺ルート？無理。今はフラジールでアンサラ撃破をば。簡単に言うが無理。というかステイシスがかなり使いやすかったり。バズーカをBFFの突撃銃に変えてやってます。

さて、次から三巻に入ります。と言ってもリアルがかなり忙しくなるので超 不定期更新になると思います。
見てくれる人がいるといいなあ。

あ、主人公のISがやっと適応化します。三巻中で。

19 話目 波乱の予感（前書き）

シリアル。シリアスにはどうやってもできない……
なぜ？

19 話目 波乱の予感

「やあ、久しぶり」

「おう、久しぶりだな。待ってたぜ」

臨海学校を間近に備えた真夏のある日、喜色は暑い日差しが降り注ぐ中クーラーの効いたバスを乗り継ぎ弾の家に来ていた。

家の前で待っていた弾は暑いのは勘弁と喜色を手招きし実家が経営する食堂に入る。

そこそこ涼しい食堂の片隅に二人は座る。

「最近どうよ。なんか変わったことあったか？」

「あったよ。VTシステムっていう千冬ちゃんの動きをトレースするプログラムが暴走したり」

「千冬さんの動き？ あの人第一回モンド・グロッソ優勝だろ？
どうやって事態を収めたのさ」

さらつと機密事項を話す喜色に機密事項であることを知らない弾はその強さを想像したのか、眉間にありったけのしわを作る。

「僕が倒した」

「ダウト」

「なんで!？」

「いや、喜色ってそういうことが起きても自分に関係ないなら無視しそうだし」

「いやいや、何を隠そう絶体絶命だった一夏ちゃんを助けたのは僕です」

「はいはいそういうことにしとく。で、一夏はなんか進展したのか？」

弾は軽く受け流しIS学園に行った親友の近況を知りたがる。妹も親友に惚れているため早く特定のあいてを作って妹を諦めさせてほしいのだ。

だが、現実は無情だ。

「ぜーんぜん。寧ろさらに増えたよ」

「はあ!？ あいつまだ増やすつてのかよ……。なんでだよ。この前、クラスにはもう惚れそうなやつはいないって言ってたじゃねーか」

「転校生が来たんだよ、しかも二人。一人は大企業社長の娘。一人はIS部隊の隊長。千冬ちゃんが少しイライラしてたよ」

「なんだその豪華な転校生は。それで二人ともか？」

「いや、社長娘だけだよ。隊長の方は特にないな」

弾は中学生の時のように頭の内からがんと打ちつけられるよ

うな痛みを感じる。また増えたのかと胃も痛み始める中で二人ともが惚れなくてよかったと少しだけ安心する。

「あ、蒼崎さん、来てたんですか。今日一夏さんは……」

「来ないよ。新しく惚れた子と楽しくデート中」

とそこヘラフな姿の蘭がやってきた。名前を覚えていてもらったのが嬉しかったのか喜色の機嫌が少しよくなる。

喜色とは反対に一夏が今日はいないと知り、がつくりと肩を落としたが続いて聞こえた喜色の言葉に素早く反応する。

「新しく、惚れた？　この前もついないつて言っただじゃないですか！　ああ、またライバルが……」

「ちなみに社長の娘だってよ。もうあいつは諦めとけよ　痛い痛い！」

弾の頭にアイアンクローが炸裂。身をよじり逃れようとするが逃れられない。

「ああ、僕っ子で気遣いもばっちし。勝ち目ある？　あるわけないっ！」

喜色の頭にアイアンクローが炸裂。時刻は丁度昼時。食堂にいる客は何事かと三人を見つめる。

「あります！　来年IS学園に入るんですから！」

「……本気で言ってるの？　本気で言ってるんだったら少し話さ

なきゃならない」

「う……」

突然口調が変わる。今までのように軽い話し方ではなく、冷たい声色。突然の豹変に蘭は怯んでしまう。

「君は」

「喜色、待て。ここじゃ迷惑だ。みんなこっちを見てる」

喜色が周りを見渡すと食堂の客の殆どが自分たちを見ていた。

「俺の部屋で話そう。蘭もいいな」

弾が珍しく蘭に有無を言わさない口調で言う。蘭もそれに気圧されてうなずく。

「よし喜色、続きを頼む」

弾の部屋に移動しそれぞれがそれぞれの場所に座った。喜色は腕をくみ指を小刻みに動かしている。蘭は不満げな表情を隠そうともしない。

「……君はIS学園に入学しようとしている。そうだね？」

「そうだって言ってるじゃないですか」

「ならIS学園の目的は何か言ってみてくれ」

「ISの操縦者や技術者の育成です。いかなる権力も」

話を途中で遮り喜色は新たに質問する。

「ああ、そこまでいい。ちゃんと分かっているようだ。だがISの主な使用目的は知っているか？」

「宇宙空間での活動です。絶対防御やハイパーセンサーによって……」

「そこだ。そこを間違えているんだ。現在ISの殆どは何に使われているかわかるか？」

蘭は喜色に怪訝な視線を向けたが喜色はただ答えるのを待っている。

「……宇宙開発に決まってるじゃないですか」

「違うね。ISの実に9割が軍事力として扱われている。知ってた？」

既存の兵器を凌駕する力、絶対防御により操縦者はほとんど死ぬことはない。この特徴により本来の目的である宇宙開発とは違う、軍事力の要にISはなっている。過去を振り返ると宇宙開発の裏には戦いがあるとはいえ、今の状態はやりすぎだ。

喜色は二人に答えると目を向けた。

「あ、ああ。一応は、な」

「で、ここからだ。軍事力のISを動かす操縦者の所属は自然と軍になる。しばらくしたら世界が大きく動く。偵察、戦闘、破壊、虐殺。簡単に効率よく行うには必ずISは優先的に使われる。なにが言いたいかわかる？」

「操縦者は戦わなければならないってことだよな」

「そうだな。ならば聞こう。ISの絶対防御とは衝撃から斬撃、打撃のダメージを全てなくすることはできるのか？」

「できるんじゃないですか？ 絶対って付いてるわけですし」

当たり前のように答えた蘭を喜色は落胆の目で見つめた。

「否だ。衝撃は伝わる。絶対防御と言っても絶対じゃないんだ。やりようによっては殺すことなんて簡単だ」

シャルロットがもつパイルバンカーや鈴音の衝撃砲がいい例だ。さらに絶対防御が発動しISが解除されたときに攻撃でもしようものなら赤子の手を捻るより簡単に人を殺すことができる。

「でも死んだなんて聞いたことないんですけど」

「そりゃあ一応『絶対』ってついてるわけだし。でも死にかけた奴ならいる。……ここにな」

喜色は親指で自分の胸をトン、と突いた。当然、蘭と弾は疑問に

思っていることがある。

「証拠はあるんですか？」

「もちろん。この体がその証拠だ」

そう言っただけで喜色は唐突に着ていた服の裾を捲り、腹部を二人に見せる。

「う……あ……」

「それは……」

見えたのは斬られ抉られ叩かれ撃ち抜かれて傷痕が変色した皮膚だった。その傷を治すために治療した縫合痕も多々あったが傷の数と比べても明らかに足りない。

青ざめた二人の顔を見て喜色は捲り上げた裾をおろす。

「さて、これを見ても考えは変わらない？ 変わらないなら後は知らない。勝手にすればいい」

「……」

「僕もただ単にやめろと言っているわけじゃない。ただ入学するならそれ相応の覚悟をもってこい。そうでなければお前の大切なものが無くなるだけだ」

「んー？ んんー？ なんじゃこりや」

篠ノ之束は何かを見つけた。

辺りに緑はなく、見えるのは焼け焦げた大地と大きくへこんだクレーター。クレーターの縁には大理石が白く太陽の光を反射し墓標のようにそびえ立っている。そして大理石の根元には花が添えられていた。

「んー？ 犬なのか猫なのかハムスターなのか……」

束が見つけたものを一言で表すなら『毛玉』だろう。くりつとした目、手に乗るくらいの体長、オメガの小文字のような口、短い手足、丸い胴体、一番目を引くのは首もとにつけられた首輪だ。

「ふーむ？ 君い冬に一緒にいると暖かそうだね。どこから来たの？」

言葉がわかるのか束の質問にわからないと言うように首を傾げた。

「わかんない？ と言うか言葉がわかるのかーそうなのかー。名前なんて言うの？」

またわからないと言うように首を傾げた。それを見て束は数秒間考える。

「よーしなら名前はストレイドだあ！ なんかビビッと来たのさ

！ 異論は認めないよ？」

突然指指された毛玉は身を震わせるが、ただ指を指されただけとわかれると短い足でジャンプして束の頭にふわっと着地した。

「おー？ 軽いねー君い。そしてモフモフだねー。いいいいよーそこがスーくんの専用席だねー」

毛玉を軽く撫でて束は歩き出す。頭についたウサ耳は毛玉が振り落とされないようににぎっている。

「なんなんだろーね？ 天才の束さんがお墓参りするなんて。普通なら気にもしないのにねー。しょっちゅう来ちゃうんだよ」

そびえ立つ大理石の前でスカートが汚れるのも気にせずトスツと腰をおろす。毛玉も頭から飛び降りて添えられた花を珍しそうに見つめる。

「あの目が忘れられないんだよ。自分は死にかけだつていうのに両足でたつてあの子を守るようにしてたあの目が。おかしーよねー」

「それにここに来るとなんか安心するんだよ。ただ荒れ果てたところなのに何でかなー」

「モフッ！」

「おおっ！？ 変な鳴き声だねーモフッて、モフッて変なの」

一声泣いた後毛玉はまたピョンと跳ね、束の頭に静かに着地する。束はもう一度毛玉を優しく撫でると立ち上がり服についた砂を払

う。

「さてと、そろそろ行くのか？　もうすぐ算ちゃんとも会えるし、ちーちゃんともいっくんとも会えるよ。あの子ともね」

19 話目 波乱の予感（後書き）

うーん、やっぱりシリアル。

もうちょっと掘り下げればよくなると思うんだけどなあ。

さて、

なぜ首輪つきがでてきた！？

意味が分からない。といってもただの毛玉で束のペットになる予定なんですけどね。

さあ、3巻が始まります。どうなるんでしょうかねえ 他人事

20話目

臨海学校初日（前書き）

臨海学校開始。

20話目 臨海学校初日

夏。

普通の学校の生徒ならば夏休みを堪能しているこの夏の日差しが降りそそぐ今日、IS学園の一年生生徒はバスに乗っていた。臨海学校のために移動するバスの中はとても騒々しかった。

「おえええ……」

訂正。一部を除いてとても騒々しかった。

「しかし予想外だね」

「なにが？」

顔を真っ青にしながら吐き気を呑み込む一夏を見ながら喜色呟いた。一夏に水を手渡ししながらシャルロットが首を傾げる。

「ISはあんなに振り回してもケロッとした顔をしてるのにバスで酔うとはね」

「あはは、まあ、ISにはPICがあるし、操縦者を保護する機能もあるからね。それに多分、遺伝的なものなんじゃないかな？」

そう言って顔を動かしたシャルロットの視線のさきには弟と同じように真っ青な顔をした千冬がいた。

その弱った千冬を見た喜色は目を輝かせる。

「うはー！ 千冬ちゃんが弱ってる今が積年の恨みをはらすチャ

ンス！　いつも頭をたたいてくれたお返しを今こそ！」

「蒼崎さん、それはまずいと思いますが……」

「ぎゃあー！？」

セシリアの忠告は当然、無駄になる。超人じみた握力を持って喜色の頭を握り締める。

「……蒼崎、そんなに死にたいか？　いまの私は気分が悪い……。かまってほしいなら、ラウラあたりが適任だろう……」

「待つて待つて！　頭が弾ける！　ザクロになる！」「うるさい……頭に響く……」

「だれだよ！　千冬ちゃんが弱ってるって言ったバ」

「お前だ……馬鹿者が……。ラウラ」

千冬は手に力を込めた。片手で成人近い男を気絶させるなどということができるのは彼女くらいだろう。

千冬は意識を失い、全身の力が抜けている喜色をラウラに渡した。

「教官？」

「いやなら……床に投げたおけ」

「……」

気絶した喜色の横には心配そうな、しかし嬉しそうな顔をしたラ

ウラがいたとか。

バスは近づいていく。

波乱が手ぐすね引いて待つ地へと。

彼らと彼女たちはまだ知らない。

この数日に何が起こるかを。

「ああ、死ぬかと思った。誰か絶対に酔わなくなる薬を作ってくれないかな」

「無理だよ。人には免疫があるからね」

旅館の部屋で二人は話す。毎年IS学園の臨海学校で使われるこの旅館は国民の税金からできていることもあって、まだ新しく綺麗で豪華だった。

その一室に二人は荷物を投げるように置いた。

「だよな。でも千冬姉の部屋の隣とはな。夜に騒げないな」

「そんなことより千冬ちゃんって何者？　いろいろおかしいと思

「うんだけど」

喜色が言うのはIS用の武装を生身で扱ったり超人じみた身体能力を発揮していることだ。人のことを言えない喜色なのだが。

「千冬姉は千冬姉だろ。なんせ俺の姉だからな」

「ああ、忘れてた。主人公はシスコンだった」

「シスコンってなんだよシスコンって。家族だからだよ」

「ふーん。で、何してるの？」

急須に茶葉をいれポットからお湯を注ぎながらお菓子を食べる喜色の横では一夏が鞆からなにかを取り出していた。

「え？　海に行かないのか？　すぐそこだぞ？　せつかくだから行こうぜ」

「あー、うん、行こうか」

「ん？」

うずうずとする一夏に返す返事はどこか歯切れが悪い。一夏はそれには僅かな違和感しか感じず、喜色の手を引いて部屋から飛び出す。

海。何を思い浮かべるかは人それぞれだろう。泳ぎ、水着、パ
ソル、バレーと答える人もいればナンパ、カナヅチ、青春、水没
と答える人もいるだろう。だが喜色はどれにも属さない。一人パ
ソルの影で楽しそうに騒ぐクラスメイトをぼんやりと見るだけだ
た。

「……」

楽しそうに騒ぐクラスメイトを見ても喜色は何も感じることはな
い。

「……」

寂しいだとか楽しそうだとか、混ぜてほしいとは思わずただ眺め
ている。

「……」

水着に着替えずいつも来ている制服を着て砂の上に座っていた。

「……」

「あれ？ あんたなにしてんのこんなところで？」

「……あ、鈴音ちゃんか。どうしたの？ 主人公は？」

喜色のつま先に人の形をした影ができる。鈴音がキョロキョロと
あたりを見回しながら尋ねる。

「一夏を探してるのよ。セシリアがなにか企んでたみたいなんだけ

ど、見あたらないのよ」

「セシリアちゃん？ さっきサンオイルとか持ってたのは見たよ」

セシリアが喜色に目もくれず駆けていったのは記憶に新しい。

「なんか企んでたみたいなんだけど……わからないわね。あんたは泳いだりしないの？」

「……まあ、ね。あれだよ。僕が」

「あつ！ 一夏見つけた！

あんた泳いどきなさいよ？ 海にきてしたことは海を見てまじたじゃ悲しいでしょ？ あ、セシリアも……水着脱いでる！？」

少し遠くで一夏とセシリアがいるのを見て鈴音はよからぬ気配を感じて駆け出す。もちろん喜色は放っておいてだ。

「えー、それって無いよ……」

喜色が一人ポツンと残った。

喜色は考える。篠ノ之束は何故、ISを開発したのか。

「……」

何故、女性しか使えないものを作ったのか。それでは産業廃棄物、

所謂産廃にしなければならないか。狙って女性しか使えないようにしたのか、はたまた意図しないものだったのか。

「……」

天災とも言われる天才が女性しか使えないものを世界に広めたら起こることを考えないなどありえない、はずだ。となると意図的なものとなる。だがそれではすこし疑問が残る。

「……何故、本来宇宙開発に作られたISが兵器にされているのにノーアクションなのか」

技術者は自分の作ったものに誇りを持つ。喜色の専用機を作った人たちも嬉しそうに、そして誇るような顔をしていた。そこが疑問だ。

そして、何故ここ最近はこうも動きが無いのだろうか。

「……」

そう考える喜色に誰か二人が近づいていく。

「あ、喜色。ここにいたんだ。……ほら、ラウラ恥ずかしがってないで」

「喜色！？ シャルロット、そこに喜色がいるのか！？ だ、だめだ、恥ずかしい！」

よくにあつた水着を着たシャルロットの後ろにはタオルを頭からふくらはぎまで巻いた何かがいた。声と反応から察するにラウラの

ようだ。

「大丈夫だから。僕が見ても可愛かったんだから喜色も可愛いって言うってくれるから」

「一夏はあつちでセシリアちゃんとなにかしてるよ。もしかしたら……」

「えっ？ セシリア、抜け駆けはなして言ったのに……。早く行かないと何が起こるか！ ラウラ、ちゃんと見せるんだよ！」

「……」

「……」

鈴音と同じようにシャルロットは駆け去る。後に残されたのは喜色とタオルのなにか。

喜色はラウラをちらりと見た。

「ラウラちゃん、暑くない？」

「……暑い。がお前に見せるともつと顔が暑くなる。……うう」

炎天下のなか、日差しはラウラを容赦なく照らしタオルのなかは蒸し風呂のようになるが、ラウラは羞恥心からなかなかタオルを外すことができない。

「き、喜色は、笑わないか？」

「なんで笑うのさ？ どうせラウラちゃんが着ている水着はとて

も似合ってるんだから笑う必要が無いよ」

「そ、そうか。……ふう、はぁ、すう、はぁ……っ！」

深呼吸をし覚悟を決めたラウラはその身に巻いたタオルを一瞬ではぎ取った。

タオルの下にあったのは決してグラマーとは言い難いが、成長をしている体とそれにくつつくラウラの白い肌によく似合う黒い水着だった。

「ど、どうだ？」

「……」

「……喜色？」

「あつ、うん、よく似合ってる。可愛いよ」

その瞬間ラウラの顔は赤に染まる。恥ずかしい気持ちとうれしい気持ちが混ざり、言葉が出てこない。

「あ、あ……」

「どうしたの？」

そんなラウラを喜色は下から覗き込んだ。こうなったラウラがとる行動は最早一つしかない。

「うあああああー！」

逃亡。持てる力をすべて注ぎ砂浜を走り出した。全速力を維持したまま海へダイブ、全力で沖に泳ぎ始める。

「……あれ、なんかまずった？」

『ねえ、これはなんの研究なの？』

『あ？　これか。世界のエネルギー状況が代わるかもしれない研究だ。この研究が完成すればお前も外に出られるぞ』

『それって本当？　なら、ならさ、海ってところに行こうよ、マザー！』

『ああ？　海い？　あんなもんしょっぱい水があるだけだろ。……まあ、初めて行くんなら楽しいかもな』

『だよね！　絶対楽しいよね！　マザー、約束だからね』

『はん、んなことしなくてもどこにでも連れてってやるよ』

「蒼崎、なにをしている。泳がないのか……水着すら着ていないのか」

「……」

「蒼崎？」

半分眠る喜色のまえに今度は千冬が立つ。ウトウトとして返事をしない喜色に千冬は首を傾けた。

「んん……マザー？ ……なんだ、千冬ちゃんか」

「マザー？ ああ、前に言っていた人か。それより何もしないのか？ 一夏たちといれば楽しいはずだが……ラウラはどこに行った」

「ラウラちゃんはどっかに走っていったよ。それにしても……千冬ちゃん」

ニヤニヤと口元を吊り上げる喜色を見て千冬の眉間に微かにしわが入り、指の関節がゴキツと鳴った。

「その水着、誰が選んだの？」

「……言う必要があるか？」

「なるほど、主人公ね。選んでもらったの？」

「ああ、家族だからな。それくらいは当然だろう」

自慢げに胸を張る。千冬が着ているのは所謂ビキニで、胸を張ると当然その大きさが主張される。喜色は鋼の精神でそれに目を向け

ない。

「わお、この人はブラコンだった。やっぱり遺伝だね」

「ふん、それで？ 何の夢を見ていた？ 生徒の話聞くくらいならできるぞ」

「何でもない夢だよ。海に行こうって約束した夢を見ただけ。それだけの話」

なにを思っ たのか千冬はゆっくりと喜色の隣に腰を下ろす。

「もう無理な話だけどね」

「そうか。お前は何故着替えてないんだ？」

「イヤだなあ千冬ちゃん、僕の体なんて他人様に見せられるものじゃないんだよ？」

喜色は苦しいことを隠すように不器用に笑う。千冬はしまったと僅かに顔をしかめたが、口からでた言葉は戻すことができない。なので、不自然に話を変えずに続ける。

「自意識過剰かもしれないぞ？ まず他人に見せてみる。案外思っていたのと違うかも知れないな」

「ハッハッハッ、ものは言いようだよね。可能性を示しただけで、その可能性は0に等しいんだよ」

「それで可能性が増えるかもしれないぞ？」

「……そんなに世の中は甘くない。わかっているだろう？　ブリュンヒルデ」

「っ！？」

喜色から殺気がずるりと溢れ出る。その密度、千冬の呼吸が一瞬止まるほど濃かった。

「千冬ちゃんもこんな奴のところにいないで弟と一緒にいたら？」

だが、それも一瞬のことで殺気はすぐに霧散し、いつものように話します。

「ほら、弟くんがキヨロキヨロしてるよ？　千冬ちゃんを探してるんじゃない？　来年はこんなことないはずだし、楽しんできたら？　それよりその水着似合ってるね、主人公に選んでもらったんでしょ？　なら見せてこなきゃ。ほら、行った行った」

「……ならば、行くぞ」

すこし、思いつめていた千冬は素早く立ち上がり、喜色の首を掴む。普通女性が男を持ち上げるなどということは出来ないのだから、千冬はズルズルと一夏たちがいるところへ引きずって行く。

当然、喜色はもがいて抵抗しようとするが彼に抗うすべはない。

「ちょ！？　首、くび、なんで！？　なんで僕引きずられてるの！？」

「お前が行けと言うから行っているだけだが？」

「僕が言ったのは千冬ちゃんだけでってことで、僕は……」

「聞こえんなあ。たまにはあいつらと遊ぶのもいいだろう。お前も、たかが16の子どもなのだからな」

白々しく答えながら千冬はズルズルと進む。もちろん、その左手には喜色の首がある。

「あ、千冬姉。と、喜色？　なんで千冬姉が引きずってるんだ？」

引つ張ってきたのはバレールを片手に持ち、チームをどうしようかと考える一夏のもと。自分が選んだ水着を着てもらえているからか頬が若干緩む。そして、千冬の後ろに猫のようにして連れてこられた喜色に視線が行った。

「なに、お前たちのビーチバレーに混ぜて欲しいんだとさ」

「千冬ちゃん！？　何言ってるの!？」

「お、喜色もやる気になったか。制服だけど……代えもあるし大丈夫だろ。千冬姉もやるか？」

ゴスッ

「織斑先生、だ。私は後で不利なほうへ入ることにしてやろう」

半年近く出席簿で叩かれ続け耐性がついた一夏はけろりとした顔で頷いた。千冬は不満足げな表情を浮かべながらもパラソルの陰に座り、観戦の体勢にはいる。

「さて、男も二人だし俺と喜色は別でいいよな。それじゃあ、好きなほうに分かれてくれ」

「はい」

「私織斑くんのほうに行く！」

「なら私は蒼崎くん！」

「私は どっちにしようかなー？」

「僕はまだやるとは……」

抗議しようとした喜色の背筋が凍りついた感覚に見舞われる。ギギと振り返ると不敵な笑みを浮かべながら声を出さず口だけを開く千冬がいた。

『いいな？ や・れ』

「やらせていただきます！」

その後旅館に戻った喜色の制服は砂まみれで、本人も砂まみれ。千冬にシャワー室に叩き込まれていたが、海を見ていた時の思いつめた表情は影も見えず、その顔には堪能して満足そうな表情しか見えなかった。本人に言ったとしたら全力で否定するだろうが。

「嫁よ、何故砂まみれなのだ？」

「ラウラちゃんこそなんですぶ濡れで疲れてるの？」

「いや、頭を冷やすために鮫に襲われたイルカを助けていた」

「イルカがいんの！？ とうか鮫と戦ったの！？」

「ああ。イルカの背中に乗せてもらったぞ？」
「……さいで」

20話目 臨海学校初日（後書き）

これといったイベントは無し。

なぜかヒロインのつもり của ウラが不遇で千冬がヒロインみたいに僕は悪くない。こんなことは予定してなかったのに。

今はフラジールにブレードでアンサラー撃破にチャレンジナウ。全ミッションどこるかカーパルス占領すらできてないのになにやってんだろ。

さて、次は喜色の過去。九十割はできてます。因みにここで解決はさせません。しかし、悲しいことに一話で終わっちゃう（´；；
、）
うまく書けてればいいなあ。

釣られてツッコミをしようとしたなら感想に釣られたクマーと言。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2815v/>

IS インフィニット・ストラトス 2人目の操縦者

2011年11月20日08時57分発行